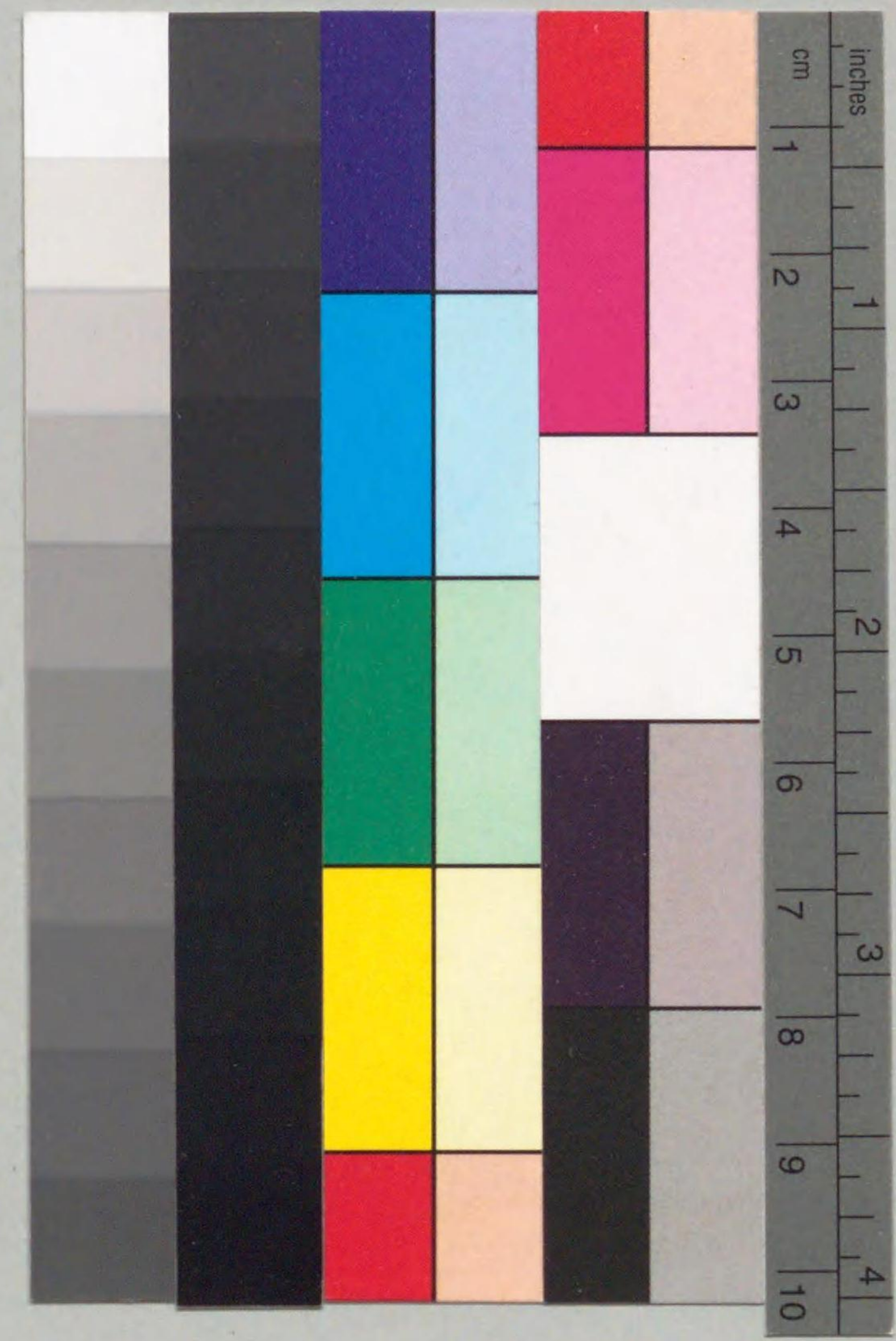


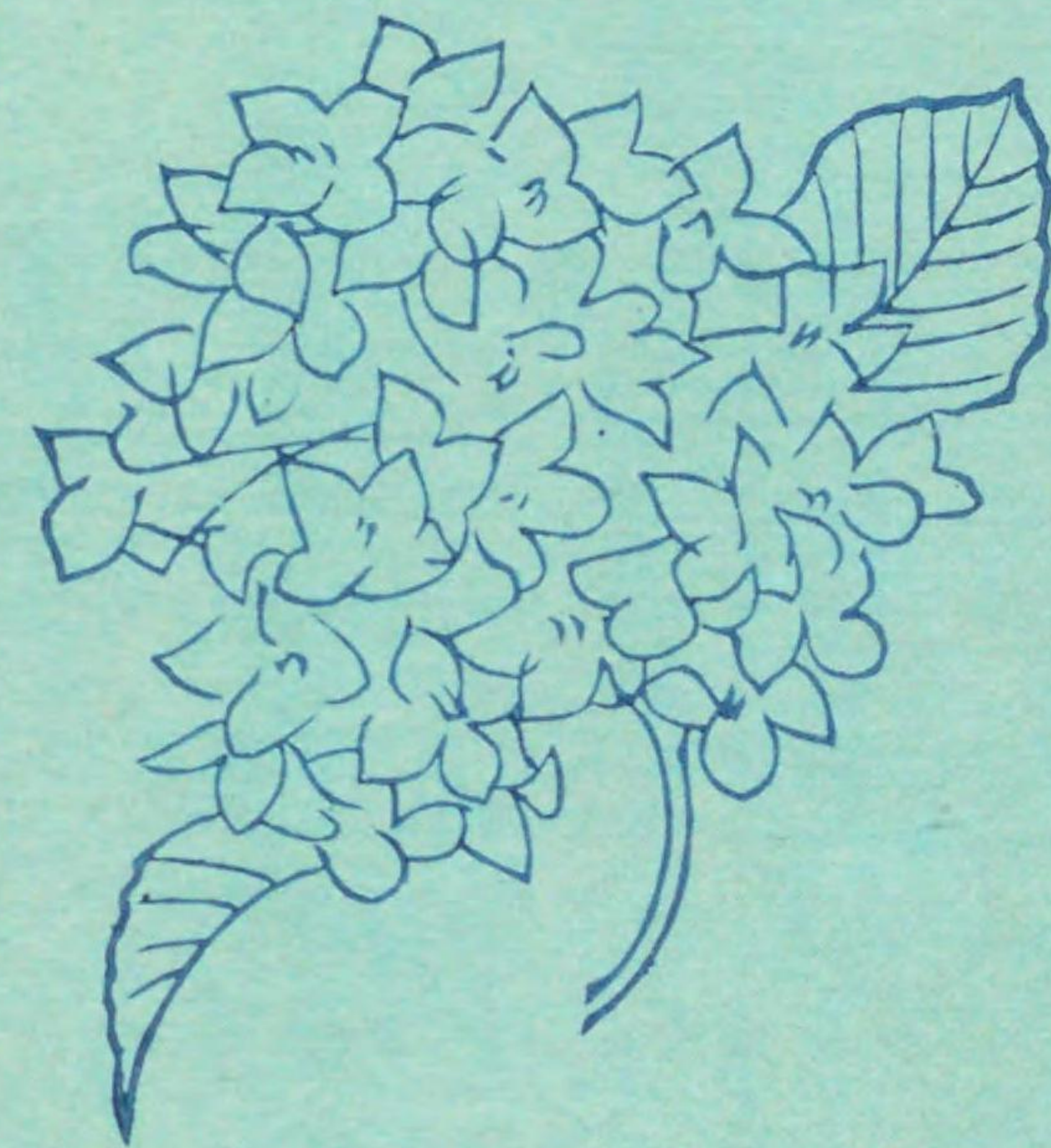
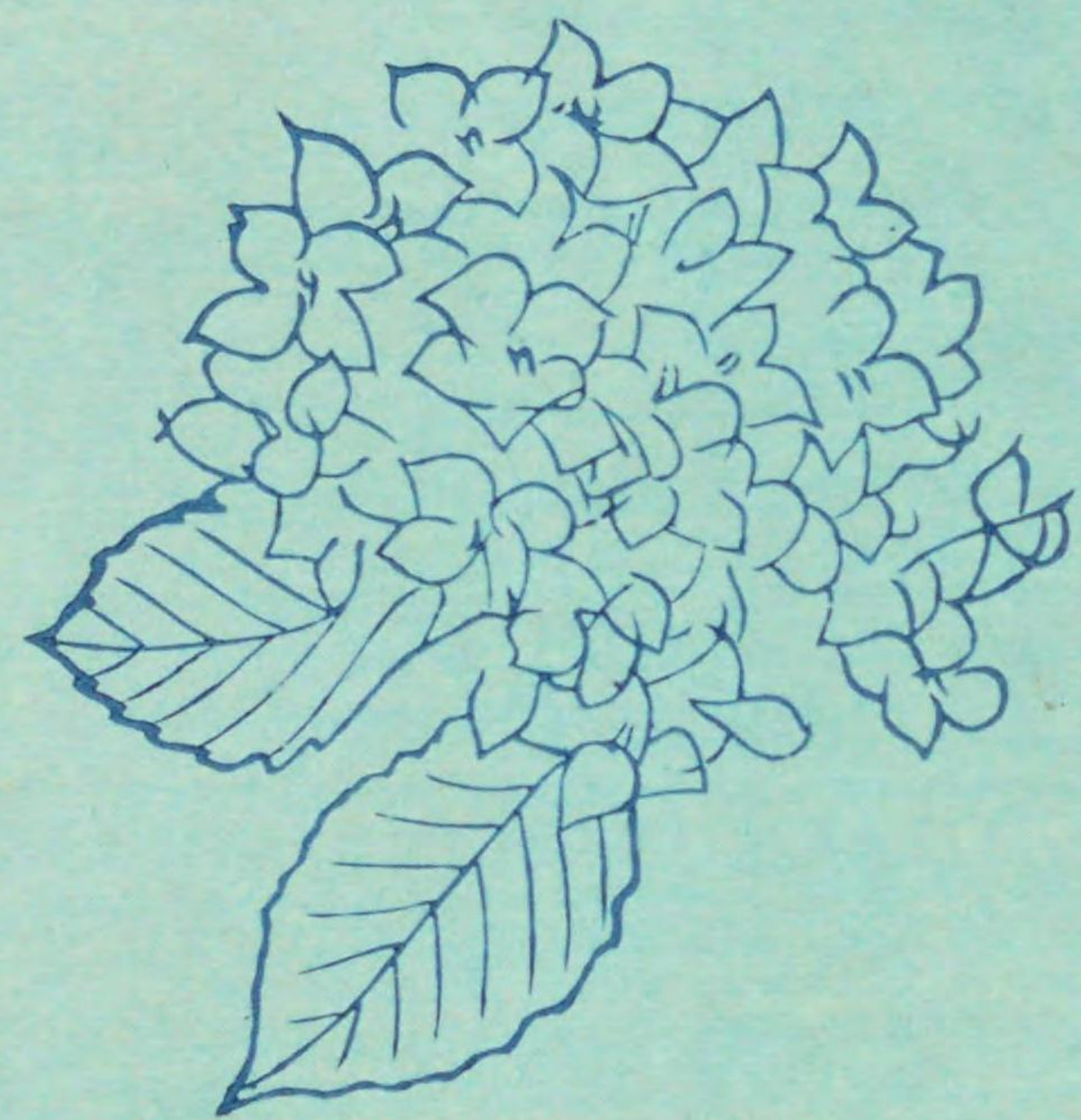
918.6  
1989k



00252002











讀

心

全

集

卷

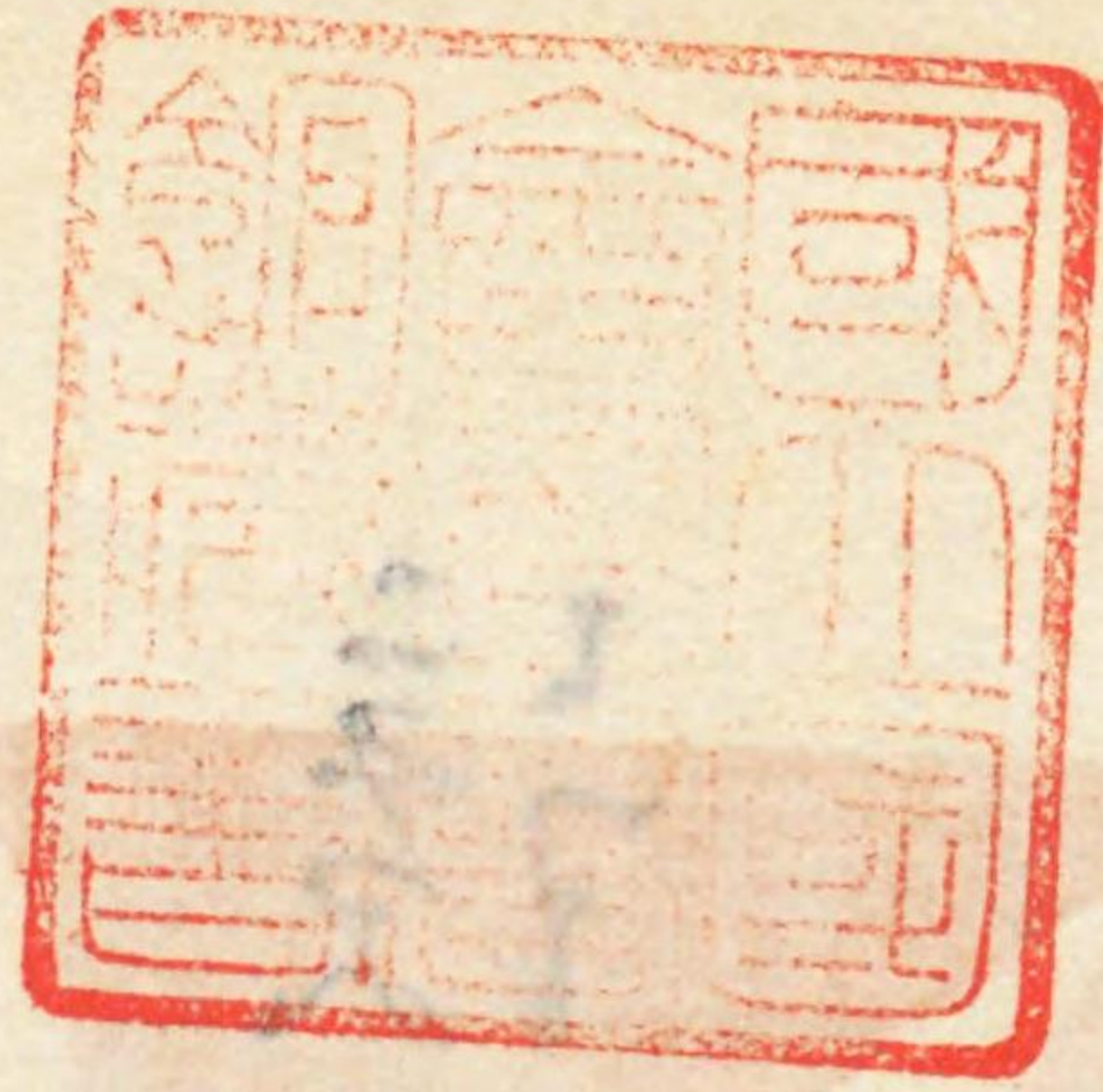
九

20025



目次

千鳥川 (明治三十七年五月).....	一
國外軍事通信員 (明治三十七年七月).....	一五
柳小島 (明治三十七年九月).....	三
わか紫 (明治三十八年一月).....	六七
銀短冊 (明治三十八年四月).....	一七九
瓔珞品 (明治三十八年六月).....	三五一
少年行 (明治三十八年七月).....	三四一
胡蝶之曲 (明治三十八年十月).....	三六一



252002



女 客 (明治三十八年十一月) ..... 四六七

惡 獸 篇 (明治三十八年十二月) ..... 四八九

海 異 記 (明治三十九年一月) ..... 五七七

月 夜 遊 女 (明治三十九年一月) ..... 六三二

千鳥川





上

「おかみさん。心中のあつた處ださうだね。何だか氣の毒らしくつて、好い景色だとも言へないやうな氣がするな。」

夕陽にかざした小手を拂つて、客なる學生は差置いた猪口を取上げた。

「嘘でございますよ、あなた、案内者をお連れなさいましたか。」

「可哀相に、御覽の通りの椋鳥だけれども、汽車といふ重寶なもののあるお庇には、今はじめての參詣ではない。」

店頭へ床几を据ゑた、土間に掘立の柱につかまつて居る女房、仰山に胸を反らして、

「あら、まあ、飛だことをおつしやる。然うではございませぬけれど、大方案内者が、そんなことを申上げたんでせうと思ひます。」

「其では間違つて居るのかい。」

「まるで、貴下、嘘なんぞでございますもの。」

「でも何だぜ、新聞にさへ委しく出て、一時大騒ぎをやつたんだぜ。」

「其は貴下、心中のあつたのは眞個でございますけれど、何も彼の鱗岩からではございません。」

此のさきの千鳥川の川下へ身を投げたのでございませぬがね。それぢや些とも引立ちませぬから、あゝやつて此の土地へさへ入らつしやれば、直ぐ誰方でも目につきます、御覽なさいまし、彼の通り、」

立つて居て伸上る、女房の目には望むべく、胡坐で居て、俯向く學生の目には瞰すべく、島山の根をさらりと噛んで、恰も霜柱の崩れるやうな、浪打際を稍離れた邊、五尺海面を抜いて五十疊敷ばかりの一座の岩、一脈、一秒に波が被つて、たらりと其の上を走るが、折からの夕焼に金を溶かして流せる如く、又、右より、左より、前より、後より、悠然と然も隙なく、靜かに然も強く、和かに然も揺れて、乗上り、躍越し、引返し、溢れかゝり、ざつと引いてやがて打ち打ち打寄する、水と水と相合ふ處々、水銀を投げて碎くやう、然も周圍は、綠青の濃き慎重雄大な色を湛へて、恰も一條の青龍有り、其の岩の根に棲んで、其の鱗を一個々々、潮に呼吸つく毎に、海はたゞ彼處ばかり常に大動揺をするが如くである。

「彼でございますから、貴下、龍の鱗岩と申しますと、津々浦々まで聞えて居りますので、評判の立ち好いやうに、新聞で拵へたのでございませぬとさ。」



「然うか、成程」と、他に思ふことのあるらしい、生返事を爲ながら、今なほ瞻つて居た鱗岩から目を返して、

「ぢやあ其の、」

一口飲み、

「川下だね、抱合つて入つたのは。而して千鳥川といへば此處へ来る路に、川つゞき、山の下まで早船が出る、彼處だらう。」

「然やうでございますよ。」

「はてな、」

學生は膝で割つてはさむやうにして居る、膳の上の箸を取つたが、謂ふことに實が入つたか、其のまゝ置き、

「千鳥川と聞くと恐ろしく寒くつて凄さうだが、いや一向なものぢやないか。匍匐になつたつて、急に沈みさうにも見えないぜ。」

「貴下、潮がさしひきをいたしますよ。其に丁ど心中したのは引潮時でございましたから、するすると海へ奪られましてね、死骸は、何でございます、此の沖で上りました。」

學生は頬に手を當て、

「はあ、潮のさしひき、いや、大うかつ。薩張其處へ氣が着かなかつた、潮のさしひき。……お、然う云や、杯の引潮時だ。」

と手酌で注ぎ足して、呵々と笑つた、怪しからず、可い機嫌。

女房は餘り機嫌がよくない。何故なら、書生客と、土間を僅ばかり隔てた、此の岩端の掛茶屋の其の一番海に臨んだ端の床几に、貴なる美しい令嬢一人、女中が二人ついたので休んで居るから。

利害失得、之に酒客を置くのは、彼處の茶代に關する、と思ふので。

下

「お銚子はいかゞでございますね。」

其にもせよ、取合はずに居ては、何時まで飲んで居るか知れないので、女房が自分に、お銚子の區切をつけに來たのであつた。

「未だある、女房さん、お酌には及ばないが、まあ話し給へ。え、と、怒う斬つたり、はつたり、人の生命にかゝるやうなことは、都會にはいくらもあるが、こんな邊鄙だから嘸其の時は騒いだらう。」



「そりや、随分騒ぎました。」

「どんな風だった、おかみさん、見たか。」

「さあ、見ましたとも、死んで上りました時は存じませんが、心中をします日の晩方、二人づれでお参詣をして、その時私どもへ一寸休んだのでございますもの、

學生は乗出して、

「様子は？些ともそんな様子は無かつたかね、

「何ですか、貴方、榮螺でも召食りませんかなんて申しまして、あゝ、あゝ、ツタツ切、上げて可いんだか、悪いんだか分りません位、二人とも中で返事をして、上の空でも居るやうでしたッけ。少い同士夢中なんでせう。それに、女の方は、テキハキものを言ひ得ませんし、大方、極が悪いんだらうと思つて居ましたがね、なあに、男は尋常の方なんださうですけれど、女と來た日にや、良い家のお嬢さんで、立派な學校の生徒さんだといふのに、飛だ浮氣もんださうですよ、行きがけの道づれにされたのでございます、而して些とも容色が好かないんだから厭ぢやありませんかね。」

「だつて、欺されたと言ふわけでもなからう。思合つた中なればこそ、心中もしたし、又死骸さへ女の扱帯で結合つて居たといふぜ。」

「其が皆、こましやくれた女のさし金でございます。いゝえ、皆知つて居ります。つい此のさきの、増屋といふ旅籠屋のお客で、四五日逗留をするといふ話だつたのが、學校の都合で、急に終汽車で東京へ歸らなければならぬと言出しましたさうで、其がもう日が暮れてからでございます。たものですから、番頭が提灯をつけて、千鳥川筋を村はづれの立場まで見送りました。

其のあとで、又あとへ引返して、川下から這入りました様ですが、其の番頭なども然ういひます、旦那の方は内氣な優しい方でしたつて。

だから、御覽なさい、はじめは、あれ彼處に、

と、女房は山の方を見返つた。白布を引いて磯形に上へ並んで、虹の如く、岩の狭間に途切途切の故道を横切つて、遙に一條の濃き煙、胡粉を以て描けるやう、そよとも靡かず。其の邊から黄昏れて、岩間々々の波暗く、榮螺の背に暮れかゝつて膳の上がうら淋しい。

「あの海草を焚いて居ります、彼處等が、合葬場で、死骸は假埋になりました。

後で知れたのでございますが、なか／＼貴下、其の女の家は、急に名の知れませんやうな身分ではないのですけれど、最う親達も、家の恥と、打棄つて置くのでございませう。

男の方は御親類の方が、直ぐに駆けつけてお見えになりました、早速掘起して立派にお引取りなさいました。」



學生は眉をあげて、

「女の死骸は、」

「其のまゝでございます。身を結へつけた上に、未だ、黒髪の水にほぐれたのが、恐い、男の肩をびつたりと巻いて、女の方からしつかり抱ついて死んで居たと云ふんでございますよ。そんなしだらで男をそゝのかして、慾の深い、貴下、何うぞ死骸は一所に葬つてくださいますと、お役人宛に女の手で遺言がしてあつたんださうでございます。憎いぢやございませんか。」

其の遺書が、村役場に大事に了つてあつたのを、男の方の御親類に見せましたものですから、叔父御だといひましたね、書記官とかを遊ばす、御身分のある方が、憎い阿魔だ、と齒がみを遊ばして、引裂いてお棄てなさいましたさうでございます。可氣味ぢやございませんか。」

あとで胸も乳も露出のまゝで、阿魔つ兒は一人ぼつち、舊の投埋、ほんとに唾でも引かけてお遣りなされば可かつたと、其時もお供をした増屋の御主人、番頭さんも然う申します。」

「ま、ま、待て。」

學生は、女房の行きかけたのを、猪口の雫を切りざまに、斜めに手を振つて遮つた。

「待て、氣の毒千萬。そんな分らず家が揃つて居るから、若木の枝を撓め枯らすやうなことにもなるのだ。可、親類の者は、身最眞や、身内の可愛さに目も眩まう。但、此處へ遊びに来るもの

が、自然おかみさん、お前の話などを聞いたら、嘸ぞ皆可哀相だといふだらう。彼の鱗岩を弔ふ者もあらうし、舊道を通がかりには、路傍の草なりと、手向ける人が澤山だらうね。」

「否、貴下、誰がそんな間違つた、第一、身を投げたのは彼の岩からではないと申しますと、何だ馬鹿々々しい、とおつしやいます。心得違ひなどといふ方もあり、業曝などといふ方もございませぬ。つい此の間も、其の女の、學校ともだちの、皆様、蝦茶のお袴を召したお嬢さんがお三方で、島遊びにおいでなさいましたね、其の話が出ますと、私たちはもう舊から交際は爲なかつたとおつしやいましてね。抱合つて死ぬなんて何といふ醜態だらう、學校の名なんか出されて、ほんとうに友達の外聞だ、聞くのも厭と、耳をおさへるやら、目をかくすやら、貴下、口を袖で塞ぐやら、ほんとうに學問を遊ばした方は豪うございますよ。それから貴下、黙つて居れば可うございましたけれども、ついお話の序に、心中が此店で休んで参りました、と申しますと、えゝ、まあ汚はしい、同一家に休んだといつて、袖を拂つたり、裾を振つたり、鶴龜々々をして、さつさとお歸りなすつたので、私も氣がつかしましたものでございますから、遅蒔ながら心中の休んだ床几に、鹽をバラ／＼とふりましてございます、もう些ともおきづかひはないのでございます。」

「いや、戲談ぢやない。」

と學生は擲つ如く、ぴたりと杯を俯向けに膳に伏せ、



「汚らはしいも凄じい！お茶ツびいめら。尤もな、蝦茶なんか穿いてた日にや、身を投げたつて、龍宮で門前拂だ。」

と激しく聲高にいつた……我ながら、別座の客に気がさしたか、學生がフト後を見ると、岩端に立つて、小形の雙眼鏡を取りながら、球を袖に伏せて、すらりと背姿でイんで居た。世にも麗かな高髻の、頸脚の雪のやうなのが、思はずもの思ふ風情で、振返つて、ト顔を見合せた。

二人の女中は、二人して、手に手に、しとやかに林檎を剥いて居たが、菓子皿を挟んで、向き合つて、緋の毛氈の上に正しく坐したまゝ、齊しく莞爾した、が、又伏目になる。

令嬢はそれなり雙眼鏡を其の涼い目にあてて、山手の方へ向をかへたが、一度泣らしたやうに外して、やがて片手を柱にかけた。羅の袖は優しく、時に件の煙とともに、やさしく晚風にそよいだのである。

意氣昂然として、

「そんな徒は簀巻にして沈めたつて活返るのだから論外だが、可哀相に、死んだものを、くさしかける奴があるか。」

善にせよ、惡にせよ、まあ、聞け。死ぬといふはよくせきだぜ。たとひ、ふしだらにもせよ、又身性の悪いものにもせよ、懺悔に消えるときさへいふものを、生きて居られないと覺悟をすりや、

罪も報も其迄だ。

譬ひどんなことがあつたにしろ、身を棄てたら許すべきぢやないか。

現在、命を捧げたものを、其の情を酌まないで、親類とやらの奴も然うだ。對手の女をこき下すのは、男の恥を曝すんだぜ。死骸になつても黒髪で抱緊めて居たあはれなものが、引放されて一人あゝの路傍へ投埋めにされたら、何んな心持がすると思ふ。

一體貴様たちのいひやうが宜くない。女は不身持だの、死んだ場處が違つてるの、容色がよくないのと散々に話すから、聞く奴等も鼻のさきで扱ふんだ。

嘘でもない、追善菩提のため、飽まで譽めろ、思ふさま庇つて話せ。

場處も如何にも、鱗岩で、然も月夜だつたといへ。一度お顔を見上げたものは、私どもはじめ、思出しては泣きますと何故いつてやらない。

鹽をふつたやうな簡方だから、貴様の此の店も繁昌しない。一生榮螺を焚いて終りたくなかつたら、お二方のお休み遊ばした處だといつて、道行茶屋といふ看板でも出して見ろ、あの鱗岩を築山にして、此の海を庭にする位、三階建に出世をすら、馬鹿な奴だ。

何うせ、くさしついでだと思つて、第一女振が好くないなぞといふことがあるものか。先づ其の容色から譽め立てろ、つひぞ見た事のないやうな美しいお姫様でございましたと、



「ほ、ほ、ほ、」

女房は餘りのことに大笑をして、然も輕蔑したやうに、

「はあ、可うございますから、お静に行らつしやいませ。譽めませうとも、男の方は、貴下をそツくり、」

と馬鹿にする。

學生は、ちつと見て、

「可し、そして女の方は、」

と片膝立てて、屹と振向き、

「彼處においで、あの御婦人を其ま、」

「貴下減相な、途方もない、」

それだからいぬことか、酔漢と、女房は蒼くなつて、此の罰に茶店が崖から落ちるだらうと思ふばかり蒼くなつた。

學生は自若として、しかし白面に酔ならず、紅を潮して、

「失禮……失禮ながら、」

「何うぞ、あの、私でよろしくば、」と優しく微笑んで見かへりながら、呆れて茫然とした腰元に、

静に、立つたまゝ其の手なる雙眼鏡を渡したので、一膝出て、跪いて受取つた。

其の時まで、一雙の明眸に映じて居た、故道の彼の煙は、自から下伏になつて、情に平伏すが如くに見えたのである。



國外  
軍事  
通信  
員



「拘られましたか。」

「もう、盗られたんですか。」

右左から問ふ者も、問はるゝものも、席を得ず、押し合ひ込み合ふ列車の中に、動きもならず立つて居る。

時に午後九時四十分、臨時發の東海道上り汽車は、此の米原で、今や、同じ日の午後三時頃より殆んど七時間の間待ち飽倦ねて、中には旅籠屋の二階で一寢入した連中さへある。數百名の乗客を一時に收容したので、動搖を作つて押寄する人數のために、列車々々の戸口々々は、恰も潮の低きに流れて、こゝに渦巻く風情である。

尤も二等の乗客には、改札口で豫め注意があつて、室は設けてあるけれども、臨時發の此の汽車は、等級の差別に因つて、相當の待遇は出来ないといふことを斷つたくらるであつた。

扱て拘賊に抜かれたのは、法然天窓で前垂がけ、縞の羽織を被た、骨董屋風の男であつた。餘りの雑沓に、あがきも隨意ならぬ手を帯に差入れ、時計の鎖のだらりと下るのを、ちやらちやらと鳴らしながら、

「はあ、否、手前が間抜けからでござす、何貴客、大したものぢやござせん、雑と手前年配ぐらゐるな古時計でな、はあ、何も惜い品ぢやござせんが、久しう持馴れましたで些と此處ン所が、何うも、もの寂しうござす。それにな、満更氣が附かんではないなかつたで、ぐいと、捻ぢられるのを存じながら、壓されて身動きもありません、此處へ入らうとする途端で、片一方は戸口へ摺り、片手には荷物をな、離せば倒れさうで、これは！と思ふ内に、マンマと首尾悪く抜かれたでござす。」

「飛だ御災難で。」

「見すゝやられたですね。」

「残念でしたな。」

「何、皆様。」

と仔細なく挨拶したが、しかし何となく物足りなさうな顔色で、法然天窓を、人いきれで薄暗い電燈に、ぼんやりと照された。……思出したやうに、

「いや、しかし誰方も、お氣を注げなさらんとありませんぜ。」

「恐い、恐い！」といきなり大聲に叫んだのは、小兒を負つて、室の真中、肩と肩とに挟まつて色白に肥つた身體を壓されながら、ぱつちりした目をぱちつかせて居た三十ばかりの大年増。次郎長が乾兒の小姐か、田舎茶屋の女房といった風、牙のある高い調子で、



「恐いよ、申戯ぢやないよ、掏賊が入つて居はしませんかねえ、それだと小兒は負つて居るし、懷中も帯もからあきだから、すぐに盗られて了ひますよ、どうしませうねえ。」と連もないのに大聲の獨言。

「これはしたり、そんなことをおひなすつちや、教へて拘らせるやうなもんだ。」と隣に立つたのが、深切にたしなめる。

「だつたつて貴客何ぢやありませんか、おゝ、誰がよく。」

折から泣き出した背の兒をすかさうと、年増は眞赤な顔をした。大勢にせばめられて、肩を揺ぶるさへ容易くないので、

「何しろ、お届けなさるが宜しからう。」と脊のひよろゝと長い、洋服扮装の一名の紳士は、下にも置かれず革靴を提げたまゝ、又被害者にいつた。

「はい、否それには及びませんでござす。」

「しかし届けた方が可うございますよ。」と最も窓に近く立つて居た銘仙づくめの商人も少いが實體な心がけ、

折から窓下に来て、手提の瓦斯を、車のあたりに差向けた驛夫を呼んで、代理人は其の口から次第を語つた。

列車の内の熱鬧に似ず、プラットホームは寂然として、雨上りの風冷たく、驛夫は頭巾を被つたまゝで、

「此室へ入りがけに拘られたですか。」と、灯もまばらな暗夜の中、衝と爪先へ瓦斯を下して赤い灯影を此處彼處にちらりと印しながら、列車に沿うて透し見た。驛夫は何等か掏賊の手懸りを得むとするものの如くであつたが、しばらくして、

「あゝ、此處に捻切つた環がある。」

「どれ、ございましたかな。」と件の窓に近い訴訟代理が、手を出して取らうとする。驛夫が再度手提の瓦斯燈を掲げた時、ぐつと重く引いて、するゝと汽車は出た。

響とともに、どつと乗客は前にのめつた。のめつたかと思ふと、反動で立處に後に反つた。腰も堪らず、右に踰踏めき、左に雪積れて、一齊の聲を擧げた。ドント尻餅をついたのもあれば、顔合せさへしたのがある。

例の女房は金切聲で、

「あれ、どうかして下さいよう、呼吸が留る！」と些と仰山。

さて此車體の動揺は、掏賊とは何の關係もない。汽車が格外の重量を曳いた惰力であつた。停車の時も又同一で、汽車は停車場に發着の都度、乗客の叫喚と轉倒は、一方ならぬ騒ぎであつた、



が、二度三度、やがて留まつたのは關ヶ原、其の揺れ方は一通でない。立つて居たものの刃ね上げられたのさへある位、大濤の人を洗ふが如く、西瓜船の地震に似て、左右前後、天窓が上になり下になり、わつとばかり聲をあげたが、これまではや、暫時鳴りが留まらなかつたのに、唯此の驛に於てのみ、一騒ぎ聲を揚げたと思ふと、寂寞とした。

同時に哄と萬歳の聲、野に満ちて、鈸に響いた。

擦れ違つて下りの汽車が停まつたのである。數千の兵員彼處にあり。

故あるかな、汽車の其の窓明りも、我が客車の此に比して一種森嚴なる光を放ち、玲瓏として暗の古戦場をぞ射たりける。

劍を握つて、椅子にかけたも見え、窓際に亘んで卷簾を燻らすあり、肱を支きて外面に顔を出せるあり、唯見る透通るが如き電燈の影に、肅然として、委清く面正しき幾多の戦員、將となく卒となく、黒き征衣は羅紗ながら、神采、鐵の鎧の如く、膚につけたる襦衣の色は白銀の鎖帷子を纏へる感あり、胸に肩に燦々たる、徽章勳章のきらびやかなる、眞珠黄金以て飾れるに異ならず。鐵車一列の雲に駕して、天兵、光爽に、珠の音と劍の音と、床に、袂に相觸れて、時に嘎然として調高矣。

「萬歳！」

時に室の一隅より、今乗組の一同が同音に萬歳を三唱して、一度寂寞となりたる折から、一聲高く、奇異なる音調を以て祝するものあり。

諸人驚いて是を見れば、右なる腰掛の、最隅なる薄暗き所に、丈高き一個の人物、鼻隆く、髪赤く、白面にして髻を蓄へず、鼠色の烏打帽、廂を横さまにしてびたりと低く、然も無雜作に被つたが、其の長き脚を屈め、肩を窄め、窮屈さうに、左右の腕を組違へて、窓に凭懸つて、眠るが如く、煖然として控へて居たが、一同の祝聲を聞くと齊く、其の碧き目を輝かして、腕を解いて手を舉げて、

「萬歳。」

いひ得て可矣と思へる如く、更に、

「萬歳、」と繰返して、微笑みながら四邊を視めた。

渠は此のために注意されて、誰ぞ話しかくる對手やあると、求むるが如くであつた。

「お、萬歳です。」と應じたのは、件の外國人の傍に、是も小くなつて座を占めた、つむりのてら／＼に禿げて、頸に一揃の毛を撫で附けた燕尾服一着の老紳士で。

外國人は此方に向くと、満面に活氣を帯びて、然も嬉しさうに、快活な調子で、立處に高く、數十言を語つた。



乗組一同、特に口つゞけに不平を鳴して、混雑動搖斯の如くむば、正に其の命の危いことを語りつゝあつた女房さへ、偏に目を注ぎ耳を傾けたが、解するものは一人もないのであつた。外国人は一息口切つて、極めて覺束ない日本語で、

「ワカリマシタカ。」

「は、」といつて、斜めに身體を差寄せて、筒服の膝に手を支いて、耳を傾けて默然となる。

「ワカリマシタカ。」

と念を入れて、外人は老紳士の様子を見たが、

「オ、ワカリマセン。」

誰が目にも此の老紳士の解し得なかつたことは其の様子で知れた。

外人は又繰返しつゝ語つた。談話に舉動のともなふのは、凡て此の人たちの習であるが、此の時は一層で、殆んど身を揉んで、手足で書き顯はすかと思ふまで、働いて言つたのである。さて、

「ワカリマシタカ。」

「は、」といつて、目を眠つた切。

外人は更に四邊の人々を眊したけれども、一人の是を解したものがなかつたので、胸を伸ばして、腕組をして、仰向けになつて黙つた。

けれども、到底語るに足らずとして打棄つた態度ではない。自國の言語を弄しつゝ、通ぜぬ紳士に煩を及ぼすことの氣の毒なのを覺つたやうな極めて慇懃なるものであつた。

しかしなほ、彼等か謂はむと欲して能はざる如き、思ふことある顔色であつたが、やゝあつて又前に乗出し、片手を上下に、上げ下げして、辛うじて覺えた日本語を、調子を取つていひ出した。

「小サイ、日本、勝ッ。大イ、ロスキイ、」と顔を振つて唄ふが如し。

「然矣。」

と唐突に答へたのは向う側の椅子にかけた、當世の束髪で、年は少いが、風采は産婆に肖た、色の黒い細面の婦人で、其の傍に烏打帽を正しく被つた、京阪風の同伴が居た。

外人は、所謂、ブロンドなる目で、其方を見たが、莞爾して、意の通じたのを喜ぶ面色、更らに朗な調子で、

「小サイ日本勝ッ、大イ、脳髓。大イ、ロスキイ負ける、小サイ脳髓。」

一同、萬歳と稱へた。汽車は分れて出たのである。

例の動搖は此の驛でも免れなかつた。騒いで鳴り留まない内に、渠は英國人なり、渠は新聞記者なり、渠は戦時通信員なり、渠は名家なりといふ聲、誰がいふともなく、語るともなく、人々



の耳に傳はつて、やがて爾ある事に確められた時分に、汽車は安らかに進行しつゝあつた。恐らく次の室、なほ其の次の室、或は遠き最後の室あたりから、逆に此處に傳へられたのであるかも知れぬ。列車は各室いづれも連続した上に、便所の前といへども隙間といつてはなかつたから。多勢の喧噪中、記者は自若として、澄まして、其の衣兜から取出した手帖の一面にさら／＼と鉛筆を走らして居たが、筆を擱き、又衣兜の中に入るゝとともに、手帖を縦に取つて目を通して、直ぐに向うへ向けて持ち直すと、半身をついと出して、衝と彼の束髪の手に渡した。猶豫はす請取つたが、唯打視むる、顔を寄せて、連の男も差覗いた。婦人が人指で字をついて、づつと横に棒を曳くやうにして、何かは知らず頷くと、男もじろ／＼と見ながら夥度頷いた。是をやゝ久しうして、衣紋を繕ひ、

「はい、」

といつて返すと、先刻から舊の位置に返つて、老紳士が額をおさへて俯向いた隣に、きよろきよる天井を仰いで居た通信員は、慌しく又腰を屈めて、慇懃に申請つゝ、

「ワカリマシタカ。」

「然矣。」

とばかり澄ましたので、通信員は、きよとんとして照れた顔。手持不沙汰なことであつた。し

ばらくして、

「オカミサン、」と何かいひかけよう、我が記した此の言は、たゞ一の然矣を以て、打棄てらるべきものでない、その不平を訴へようとしたのであらう。先づオカミサンなる名稱を以て呼びかけると、婦人はツンとして、シヤンと反り、

「否、オカミサン、ありません。」といつた。通信員は目を睜つた。

やがて美き手の甲を見せ、婦人の前に差出して、コトと其の自分の指環を突き、

「アナタ、指環、コ、オカミサン、アリマセンカ、ワタクシ國、一、二、三、四、」

と規則正しく數へながら、一ツづゝ指を壓へて見せた。又二の腕をぐツと攪み、手首を丁と握つて見せたは、腕環を仕方嵌めたのである。

「タクサン、ハメル。ケレドモ、オカミサンデナイ、コ、ハメマセン、アナタ、ユビワ。」

と別なる指、又トンと突き、

「コ、ハメル、オカミサンアリ、マセウ。」

如何にと、屹と見上げたが、婦人は不愛想にかぶりを掉つた。

通信員よ、是は、我が同胞の觀る處も亦、貴下と同一である。けれども貴下は過失つた。如何にも彼の婦人の指環は、貴下の國に於ても、又我が國に於ても、既婚の女子の飾り方である。け



れども婦人が、指環の用ひ方を過失つたよりも、尙大なる過失が貴下にある。前髪の立つた束髪、恠の如き風采の貴婦人は、是を女房さんといつては成らぬ、宜く夫人といひ、奥様といふべきであつた。

外來の客は然りとも知らず、尙婦人の服さないので見て、熱心に、

「ワタクシ、カミサン、モチマス、オトコ、ユビワ。」

といひかけて、首を回らすと、實例に用ふべき適當な美人が居た。

あらい矢緋の袷をだらしなく着て、高島田のおくれ毛を亂したが、胸のあたりまで、前襟を高くかゝげた、恰も裾を端折つたやうに、燃立つ緋縮緬の長襦袢は、惜気もなく、胸のあたりまでちらめいた。此の娘の恠う高々と棲を取つたのは何のためか分らない。或は落ちて來た梅川であらうといひ、或は悪漢に手籠にならうとした庄屋の娘であらうといつた。けれども、其二三の説皆非なり。何爲なら、高足駄を穿いて居るから。

「ムスメ、ヤル、ハメル。」といひつゝ、無雜作に手を伸ばして娘の指を取らうとすると、

(ちやつと)なる體で、慌しく、袴の長い然らぬだに手の隠れさうな袖口へ奥深く引込んだ。花はつぼんだ、蓋はかくれた。而して、又、棲をぐいと、眞赤に上げるのをキツカケに、胸をくねつて、ツンとひぞる。

記者は茫然として、アツと口を開いたが、カラ／＼と笑つた。

片手で袖を曳く形、片手でハタと掉拂つた形して、

「コレ、ニッポン、何? 犬、ドッグ、猫、キヤット、ザル、モンキイ、ザル、モンキイ。」

「貴客、猿でございます、ざるではありません。」

と老紳士は傍からいつた。

振向いて打領き、

「アリガタウ、サル、サル。」といつて、又獨り頷いて、よく其の記憶に印したことを面に表はし、

「サル、モンキイ。」

目を指して、

「アイ。」

といつて天窓を叩いた。

「ヘッド。」

すぐに口を壓へながら、

「マウス?」

「口、」と教ふるものあり。



大股おほまたに歩行あるいたのが、プラットホームで引戻ひきもどされたやうに、すつくと立たつた。通信員つうしんめんは振向ふりむいて、帽ぼうを取とつて、前途ぜんとを祝しゆくした學生がくせいに對たいし、莞爾くわんじとして恭うやうやしく一揖いちいふして、其そのまゝ、しばらく人ひとの中に、脊せの高い姿すがたが見みえたが、やがて美うつくしき中京ちゆうきやうの灯ひにまぎれたのである。

「口くち、口くち、マウス、目め、アイ、天窓あたま、ヘッド、サル、モンキイ、犬いぬ、ドッグ。」

といひながら、更さらに袖そでを引き、振拂ふりばらはれた仕方しかたをして、

「コレ、何なに？」

ふられる、ふられる、ふられる、と四五人じんくわく口々くちくちにいつた。

「オ、ワタクシ、フラレル。」とて、鬱ふさいだ顔かほをしながら、丁ちやうど其時そのとき、憚はりへ行ゆかうとして、記者きしゃの前まへで、ひよろ／＼踰よ躍ろけかゝつた、老爺らうやの腰こしを、長い腕うででひよいと抱だいて留とめながら、

「フラレ、マシタ。」

と又また高たからかに笑わらつたが、洒しやく々く、落らく々くとして擲なすべき態たい度どであつた。

名古屋なごやへ着つくと、厚あつきオオバアオトをしつくりと身みに纏まとひ、鳥打とりうちを、一文字いちもんじの鏢つばの浅あさい帽子ぼうしにかへて、肅然しゆくぜんとして立直たちなほつたが、荷物にものは持もたず、太ふと杖づゑを支ついて、づらりと見渡みわたし、

「皆みなサン、サヨナラ。」と衝つと下おりた。

「然さらば、外國ぐわいこくの紳士しんし、健けん在ざいなれ通信員つうしんめん。」

と滑なめかにイングリッシュで聲こゑをかけたのは、隣となりの室へやから窓まどを覗のぞいた、一人ひとりの學生がくせいであつた。學生がくせいは、はじめから様子やうすを知しつて、言ことばを交かはさうとしたけれども、人ひとごみのために室へやをかへることを得えなかつたのである。



柳  
小  
島



「やあ、旅のお女中。」

湖の面に影の映る、麗なる人に振向いたは、汀に投げ出した捨小舟、青芒のみ處々、四邊に蘆はなけれども、鶯のふんの堆い、舳に釣の糸を垂れて、茫乎浮木を視めて居た、禪ばかりの赤裸で、骨組の逞しい、屈強な漢である。頤を包んで旋毛で留めた、南瓜被といふ奴で、日に焼けた面を仰向け、

「もし、お前様、お宗旨は何でがすね。」

と詰るが如くにして尋ねた。

釣する状を、イんで視めた婦人は、小造ですらりとして、顔は菅笠に隠れたが、結んだ紐にくつきりと、唇の色紅く、緑の黒髪幽にこぼれて、清き頸に鬢の影。薄紫地に花の夕顔、ほのくとある半襟で、紺縮緬に白抜の蝶の模様、野菊を染めた友染の薄い襦袢も涼しげながら、半莫産を撫肩に、寂く寒れた姿容。湖を吹く風そよよと、漣渡る膚の雪の、ちらめくばかり媚

かしく、恰も翼を交はすやう、白き蝶々の、乳のあたりに、はら／＼と動くさへ、旅なれば哀にて、花野に狂ふものに似ず、草枕假寝の夢の、木の葉の衾を迷ひ出でて、此處に徜徉ふ風情あり。白の脚絆に、結附け草履、同一色の足袋、甲かけして、紫の色のや、襷せた、風呂敷包を持つた手に、竹の杖をぞ支いたりける。

襟に清らかな布をわがねて、鳩尾に袴と當て、白木の小形の箱をかけたが、巡禮か、六部か、千ヶ寺か、いづれ志す廻國の、然せる類のものであらう。

餘り唐突に聞かれたので、婦人は少時答へなかつた。

いで岩代に名にし負ふ、磐梯山の裾長く、沙漠の如き原野を曳いて、直に猪苗代に臨む處。其焼山の硫黄の煙、淡く日の光を蔽ひ、濃き影を地に擲つ他に、目に遮るものとは、高き樹の梢もないのに、羽衣を何の枝にかけて、天降りしや、と疑ふばかり。魚釣は、見上げ、見下し、

「え、これ、お前様、何のお宗旨でお在なざるね。」

婦人は少し打傾き、

「私の宗旨とおつしやいますか。」

「はあ、お前様、」

「私は、あの巡禮なんでございます。」と、優しい聲して判然答へた。



「巡禮様か。それぢや何だね。普陀落や岸打浪、と遣らかすだね、はあ是だ、」と舷を軽く丁と叩き、

「こんな静な風の日でも、時々だぶりと畝が来るだ、は、は、は、岸を打つ浪でがす。其處でお前様唱はつしやる氣か。」

婦人は妙なことをいふと思つたか、ものを問ふやうに返事をする。

「否、何ですか、私は別に歌を唱ふのではございませぬよ。そして、國々を廻りまして、方々お參詣をしますけれども、別に是と申して、宗旨といつてはないのです。」と、親くものを云ふのであるが、何となく威があつて、その口數が少く聞える。

魚釣は、頬被の中に眉を擧め、

「はてね、普陀落やを遣るでもなし、お宗旨というてはなしか、では何というて拜まつしやるね。」

「はい、法華宗のお寺なら、妙法蓮華經と念じます。淨土、一向宗、眞宗の寺々では、阿彌陀佛と唱へます。」

「何、南無妙法蓮華經、南無阿彌陀佛、日蓮様と蓮如様を、兩天秤にかけてござるか。これはしたり。」

と額を叩いた。

音は發奮まぬ南瓜被、魚釣は變な顔で、

「其の様子ぢやお前様、お宗旨は五目だね、時には山伏も遣らつしやるの。」

「然うなございますよ。」

と透通るやうな皓齒が幽、婦人は纔に打微笑む。

「はい、」

と舳に腰を落して、

「法蓮華經で、阿彌陀と來て、なむおびらうんけんから、おんなぼきやあべるしやのツ。いや、こりやならぬわ、大變ぢや。」

身もだえをして、周章てる拍子に、船が揺れると、差置いた、釣棹がするりと迂るを、ちやツと壓へ止めて、きよとんとする。

婦人は水紅色の腰帶の、幅の廣いので緊乎と締めた、高端折の裳軽く、草履重げに一步進み、

「あ、貴下、何ぞ宗旨に因りましては、此の邊に、入れない村でもござんすかい。」

「何の滅相な、お前様、雨も風も通抜けぢや。吉利支丹でも婆提連でも、そんなことはお構ひな



し、お宗旨を聞いたのは、私がそら、恚うやつて、魚をせしめて居るからだよ。

見さつせえ、日和の所爲か、まんが悪いか、朝から未だ一尾もかゝらねえだ。

根が素人の横好で、私釣が下手でがす。道樂にやるんだで、せめてこれ晝のお菜に、鯔の一本も、引摺んで行かねえ分にや、磬梯山に雲はなうても、山の神が暴れるだてね。

鳥差でも然うぢやとね。釣をするも同一ぢや。傍に人が見てござつて、慈悲に題目なり念佛なりを唱へると、雀も、鮒も皆遁げて、針にも棹にも留らぬ、と云ふでねえかね。

猿は庚申様、長蟲は辨天さん、鯨は鹿島大明神、鯔の親分は知らねえで、お題目で遁げをるか、お念佛は利かねえだ。念佛で遁げをるか、題目は效用がねえで、何方へ外れて、何が釣れねえとも限らねえだが、お前様のやうに、八宗兼帯、なむあびらうんけんから、べろしやのまで唱られた日にや、當りはづれはねえだからね。間抜けが餌を饗應ひをる、我も来い誰も来いと、大海の鯨まで、此の湖水へ呼び込んで、私をなぶらうも知れねえだ。

魚釣は又、額を撫でて、高く笑ふと、風が吹くやうに袂へ響いて、山も水も寂寞して、廣野の夏の十二時頃。

「其處でお前様に聞いたでがす、やあ、もし、親達か、と云ひかけて、風俗を熟々と、

「む、許嫁様か、それとも旦那殿か。命日といふでもねえなら、勘辨して大目に見て、殺生戒の呪文などを唱へねえでくらしやいよ。」

婦人は靜に聞いて居たが、杖とともに二歩三步、斜に、汀を後に退いて。

「まあ、飛だ、お妨げになりました。貴下のお邪魔にならうとは、思はなかつたものですから、拜見したのでございます、眞個に気がつきませんで、心ないことございましたねえ。」

慇懃に詫びられて、魚釣は氣の毒さう、

「何お前様、唯見ておいでなさる分には、半日だつて一日だつて構ふことはねえでがすよ。」

え、自分の下手を棚へ上げて、悪く勘ぐつて濟みましねえ、はあ、面目なうがす。氣にかけねえで下さいませよ。

而して彼ぢや、何ならお前様些と此方へ入つて、休んで行かつしやつては何うでがすね。

遠慮はねえだよ。岸に附着いた船だけれど、水に浮いて居るだけに心持ばかりでも、づつと風が通つて涼しいだ。」

「難有う存じます。否、實は、彼方から、此の岸へついて参りましてね、餘程の間、まるで、人に逢ひませんもんですから、此處に釣をなすつていらつしやるのを見ますと、頻に貴方がお懐しくつて、つい、通り抜けれなくなつたんでございますよ。」



魚釣は恥ぢたる色あり。立膝に腕組して、全く釣棹に打背き、くるりと此方に向き直つて、

「これは早や、懐しがられる人體かい？……よくお前様、獺の化けたのだと思はつしやらねえ。尤も河童だと、腦天の水が干るで、此の日向にや、曝されねえ理窟ですがね。得て慥ういふ處では、猿ものの功經た奴が、人間に見えるもんだで、お前様餘り人懐く、うっかり口なんぞ利いちやなんねえ。」と、太く婦人の風采に動かされたものやう、染々と云ふのであつた。

「あの、それでは此の邊は恐しい處でございませうか。」

魚釣は頭を掉り

「何の、恐くも何ともない、神代のやうな處だがね、那須野ヶ原は御存じか、殺生石は一ツでも、墜る鳥は木の葉のやうぢや。釣をする奴は一人だけんど、捕られる魚は幾つだか知れねえ道理で、こんな清淨の湖のあたりでも、一個や半分、厭なものが居ねえとも限らねえで申すでがす。

見りやお前様、大分遠方のお方らしいが、一體是から何處をさして行かつしやりますな。」

旅の婦人は頷く如く、其の笠を打傾け、

「今も私が申しました通り、國々を巡禮して、お参詣をして歩行きますが、此の湖水について参

りますと、辨天様の御堂があるんでございますツてね、つツと向うの一軒家で、お茶をたべて休みました時、聞きましたものですから、其處へ参るんでございませうが、小さな徑は皆な山の方へついて居て、此の岸の砂場は、時々浪が来ますばかり、人通りもありませんから、何だか覺束なくなりまして。釣をなさいます貴方を見つけて、一寸伺ひませうと、存じましたけれど、傍見もしずにおいでですから、お邪魔にならうと、控へましたが、却つて悪かつたのでございませう。」

魚釣は極悪げに、

「些とも悪くはねえでがすて。」

「それでは、是を何處までも参りまして可うございませうね。」

「え、つツとおいでなさいませ。何處までもとおつしやつても、最う然う澤山の路ぢやねえだ、それ。」

舩から手を出して、水の上で指した。

「彼處に、低い、がこんもりと、黒くなつて松と柳が見えるでがすな。岸が突出て居りますで、水に枝垂れた枝なんざ、手を出しや取れさうな様子でがすが、歩行いたら十四五町、直ぐに其が柳小島で、お前の行かつしやる、辨天様のお堂の處……」

教ふるを笠の下、清い目で打視遣つた、横顔涼しき緑の木立を、五六尺手許へ離れて、フト一



羽の白鷺が飛んだやうに、汀を此方へ近寄る者あり。

魚釣は瞳を返して、

「おう、旦那どのがござらつしやる。チヨツ、」と内證で舌打した。

「貴下、其の厭な人？」

「何、はあ、月の輪村の巡査でがすよ。」

「然うですね。此の邊は涼いので、眞夏のやうではありませんが、最う、彼の方たちが白い服を着なさるやうになつたんですね。」

望んで仰ぐやうにした。笠のふちに優しい手の、白き木綿の手甲も、峯の煙に薄曇。莫塵をはらりと洩れたる袖の留南奇は失せて、染模様の、蝶の翼も弱々しう、夕顔の花の萎むに似て、故郷遠き姿かな。

魚釣は思はぬ狀、棹に片手をかけながら、

「いや一寸待たつせえ。」

「……………」

杖を此方に向直れば、

「これ、今の殺生石だね、妙なことを云ふやうぢやが、途中で浪花ぶしを唸るのを聞かつしやる

か、見さつしつたら、遠くから除けさつせえ、氣をつけねえとなんねえだ。」

「え、。」と何か言はうとする時、はや靴音が聞えたのである。

四

「木川田、木川田、こら、猪三郎。」

した、かに巡査に呼ばれて、件の魚釣、棹の絲の伸びたほど、鼻の下を長うして、其の乗つた捨小舟の、右舷より左舷まで、ぐるりとまはつて十八里の、大湖の水の一處、浮木を熟と視めながら、汚れた六尺の結目高に、まともに臀を見せて大胡坐。生緩く引張つて、やうくした、けだるい返事。

「やあ。」

「何が、やあかい。」

「やあ——」

「何だ、やあだ。」

「や。」

「こら木川田ッ。」



「やあ。」

「やあではないが！」と身を揉んで、しゆんさ 巡査は反身に、靴を上げて、艦を一ツ蹴つけたが、船も人もびくともせず。

「何だね。」

「え、！き、貴様、其處に何しをるか。」

焦るほど尙ほ落着き、

「釣つてるだよ、見なざる通りだ。其處で騒いぢやなんねえよ。折角寄つた魚が遁げて了ふ、今が肝心の處だよ。」

見返りもせぬので張合はないが、薄い髻を、ぐいぐい引いて、

「魚も釣もあるもんか。貴様、一體、今日は如何なる時であると思ふ、うむ、木川田。木川田ツツ」

「騒々しい人だ、何だつて、——今日は如何なる時——されば、十二時下りでもあらうかね。」

「何を、誰が貴様に時間を聞いたか。」

「刻限を聞くぢやねえのかよ。」

「白癡め、どんな時節だと詰問するんだ、貴様また夏だといふのか。こら、露西亞と戦争中であるんだぞ。國家の安危の分る、處ぢや。うむ、貴様どんな心得で、悠暢な眞似をするのぢやい。」

「はッてね、露西亞と戦をして居りや、岩代國は耶摩郡、月輪村の御百姓は、鰯を釣つてはなんねえかね。」

冷にいふを聞きもあへず、一聲叫んで、

「黙れ！百姓なら田をたがやせ、暇があつたら肥料桶でも搔廻せ、今此の天下存亡の秋、釣つてる奴が何處にある。然もな、今しがた此地へ知れた、船が二艘沈んだぞ。」

「へい、郡山から若松がよひの鐵道が出来てから、餘り蒸汽船は通はねえがね、大業にいはつしやる。それとも漁船でも沈んだかね。それにしちや日和續きた。湖水の神様にでも魅込まれたかな。」

「噫言をつくな、夢ではないぞ、運送船がやられたんだい。」

「地體浮いて居るものだね、時によると沈むでがすて。」

「面を洗へ、木川田。貴様も帝國の臣民ぢや。志があれば釣をして居ても、大砲の音が、此の水に響いて聞ゆる筈ぢや。對馬の海で、敵艦のために撃沈された。然も我が戦闘員、幾多の將校兵勇が乗つた船だ、蟲の知らせでも分らぬか。」

島小柳

と洋刀をがちやりと鳴らして、地踏躰を踏んだ時、未だ傍を遠く隔てず、見て居た巡禮の旅の婦人は、杖を舉げて、両手で膝のあたりへ横たへたが、耳を澄ました様子であつた。



魚釣は少時黙つたが、無言の間に、絲を取直して、するりと向うへ、

「そりや敵といへば敵だからね。仇も手向ひもするでねえかな。對手が敵なら此方も敵だ。見させえ、頃者中、村方を荒す狂犬だつて、うまく打つかりや退治るだけれど、此方に隙がありや、向う脛だつて、横腹だつて、場所は擇ばねえで喰ひつきます。」

然も呑氣らしくいふのさへ、遊びの片手間で身に沁みない。

「巡查は見る／＼色を變へたが、

「國、國、國賊。」と怒鳴りつけた。

「小平瀨は天神様で、柳小島は辨天様、こくざう様は柳津だつて、此處等にやござらねえ。」  
今度は煙管を横啣。

## 五

「來い。」

と喚いて、巡查は宛然のめるばかりに、いきなり身を壓に脚を踏張り、艦に兩手を、曳！ぐい、とこじると、小船は堪らず、だぶり左右へ傾いて、附着けたやうな魚釣の臀は、ひよいと持上つて、大きく手を支き、

「や、こりやならぬわ、何うするぞいやい。」

「此方へ出る。」

一喝する時、はじめて巡查の姿を見たが、是は！吃驚した顔色、で、船が揺れたよりは一倍顛倒。

「屯の旦那様でござりますかね。」とぼんとする。

「木川田。」

「唯。」

「貴様今何と云つた。」

「へい。」

「へい、ではない、不埒な奴だぞ。貴様、國家に對して捨置かれん、怪しからん事を云うたが。」  
「え、／＼、何を申しましたか、から厄體でござります。今朝から一尾も釣れませぬで、やつきとなりまして、最う掛りさうな處と、一心に氣を取られて居りましたんで、へい／＼。」

「巡查は始めて威儀を調べ、背伸するほど、すつくと立ち、

「嘘を吐け、とぼけるな。」

「心からの事でござります。」



むすく這出しさうに手をつきながら、イむ巡禮を仰いで見つ、

「唯今も、其處な旅のお方が、此處を通りかゝらつしやつて、優しく見てござつたのに、苦情事をぶつかけて、豪い赤恥を掻きましたばかりな處、いやはや、他愛はござりましねえ。」

「巡査も、背後をじろりと見向いて、一入氣を入れて髻を捻り、

「む、其では全く、本官であることを知らんぢやつたなッ。」

「毛頭虚敷は申しませぬ。へい、地體其の、鼻々めが、釣が大嫌ひでござりまして、喧嘩面に愚圖々々申します處から、なりたけ目につきません遠くへ退いて、恚うやつて、へ、へ、慰むでござります。釣棹も他處へ隠して置きます始末で、旦那が今、いきなり背後からがみく叱らつしやりましたもんだね。實は其、鼻々の間諜かとも心得ましたから、つい、弱味を見せまい氣で、飛んだ失禮を申しました。」

「只管恐入つたる狀に、巡査も少く色を直して、

「馬鹿め。妻の方が餘程伶俐だ、然もあるべき事だ。些と、時節柄を辨へろ。」

「はいはい。」

「な、貴様そんな心がけなればこそ、豫備騎兵で、一度仙臺へ徵發をされながら、刎ね出されて、出征が出来んかつたぢやないか。」

こら、閉塞隊の選に洩れたのを無念なりと、血書して願書を出した水兵があるんだぞ。陸軍でも後方勤務にまはされたのを口惜いと、腹を切つた勇士もあるに、貴様はな、はい、然やうならで、のめくと歸つて来て、酒亞々々釣をしとるは何事かい。

たつた今も申聞かす通りだ。對馬の沖で敵艦が冠をして、非常なる損害を蒙つたんぢや。鐵道でも靜に通るぞ。貴様、煙草を吹かしながら、狂犬でも隙があれば、脛へ喰ひつくと吐し居つたが。」

「段々恐入つてござります。」

「恐入れ、恐入れとも。本官の前で其の頬被りは何だ。」

言の下に、慌てて天窓へ手を遣ると、意氣地なくだらりと解ける、手拭をぐしやりと握つて、膝を縮めて踞つた。

「第一、貴様の其の裸體は何か。」

「是は其の、實は脱ぎましたのでござりまして。」

「こらく、又馬鹿にし居るか、許さん！ 裸體はと聞けば、脱いだ、とは何をいふか。」

「旦那お見免しを願ひます、へい、つい、どきまぎいたしますもんでござりますから、しどろもどろで、申上げやうが悪うござりました、へい。過日私と一所に、召集をされまして、これは戦



地へ向ひました、小坂辰之助の留守のものが、餘り困窮をいたしますにつけて、脱いで遣りましたのでござりますわ。」

六

「もし、當事もねえ、私が何も、こんなお金子を頂く法はありませんねえだ、飛でもない、措かつしやい。」

「否、こんなお金子とおつしやるほどのものぢやありません。眞にお恥いんですが、是でお襦袢でも召して下さいまし。世間はお互でござります。村から出征をなさいました、小坂さんとやらの留守の方に、貴下が召物をお脱ぎなさいましたと申しますから、私は貴下に、お被せ申したう存じます。」

優容に差寄せた、懐紙の小さな包は、巡査が叱り捨てて脱め廻し脱め廻し立去る間に、笠の下で領いて、手早く拵へたものであつた、爪紅や染めつらむ。

慥くて沖を行く片帆の影に、洋服の色隠れるのを待つて、船の艦に引返し、手招きして、密と、渡さうとするのであつた。

木川田猪三郎は其の名である。魚釣は打笑ひ、

「は、は、は、今のお聞きなされたね、いや、方便と名をつければ、嘘も吐いて見ようもの。眞似も宜いことは爲いというて、何か、身の皮を脱いでまで、人に貢いだというたので、すぐに又お前様の御厚志を頂くだが、それでは冥利が悪いでがす。」

何、此の野郎の様子を見て、大概御推量なされやし、陰徳を施すなんて、そんな氣の利いたのぢやありませんえだ。

驚が嘴が煩いで、可加減な虚言ウ打つて追拂つたまででがす。」

手を掉れば、袖で壓へ、

「貴下、嘘でも可いんですよ。」

と落着いて云つて熟と見た。目つきに不思議の品があり、屹と命令をされたやう、辭み難さに俯向いたが、

「それぢや慥うしてお呉んなさい。お前様は、これから柳小島へ參詣をなさると云ふで、月の輪村は其の在所ぢや。小坂が内とお尋ねなされると、一番汚え、が直き知れるで、爺様なり、婆様なり、又嫁御なり、同じお施しなさりますなら、其處へお遣し下さりやしよ。」

巡査にや、ズドンと放しただが、私が裸體も満更形のない事ぢやねえだがね。

一體此の月の輪さ、名は豪え熊だけれど、羊見たやうな瘦村で、焼ッ原で、米は出來ずに、當



節の茄子なども、硫黄が染つたかと思ふほど、木にあるうちから赤ッ茶けて、嚙ると焼砂に齒を  
缺すだ、四國の芋は石になる弘法大師か、親鸞にでも、祟られたやうな在所でがしてね。

魚が捕れても鯉や鮒ぢや、湖でくらしもならず、然うかと云うて此の節ぢや、鐵道が通じまし  
たで、旅を對手に商も出来ましねえ。

御覽じまし、恚う見た處は宛然大海、眞中ごろは水や空で、見事な湖ばかり。野山も、人も、  
骨と皮で、棲めば都といひながら、磐梯山の煙に咽せて、朝夕を送るのが多い中に、小坂が内と  
来た日にや、話になるのぢやござりましねえ。

老人二人に、嫁、小兒、四人が留守をして、稼人の辰之助といふ忤でがす、豫備で取られて出  
ましたのは。こりや村での學者でね、小坂の家が旅籠屋で、未だ何うかやつとる時分にや、東京  
へ勉強に行つて居ただね。金の都合と、兵役で中途で止して歸りやしたが、野良仕事の晝上りに  
や、懷中から本を出して、内から土瓶を持つて行く嫁さんと、小松の蔭で覗き合ふ仁體ぢや。そ  
れだけでも、こんな邊土に、埋木にするは可惜ものだに、嫁さんが又東京うまれ、素晴らしい別嬪  
でね、何でも書生さんをして居る時分から出来て居て、男が仙臺へ入營すると、其あとを追つて  
奥州下り、彼處の茶屋で奉公して、三年たて切つた貞女でね。立派な内の嬢さんだつていひます  
が、親許はそれで勘當。」

「唯、辰之助の傍に居たいばかりで、お茶屋の二階を勤めたんで、年期はなし、借金はなし、自  
由の利くことといへば、お前様、色男の小兒をこしらへたのに、乳母をつけて、内證で育てさせ  
たといふ權式でね。

それでも金華樓の姉さんで、お縫といへば響いたもので、土地ッ子は申すに及ばず、東京の落  
武者の藝妓如きがあたり近所へ寄つかれるもんぢやない。

一時は松前節と一緒に、唄にまで唄はれて、どんな人の宴會でも、お縫が居ねぢやなんねえ  
と、不殘金華樓へ持込む騒ぎ。

其癖誰でも男があつて、兒持なのを承知の上だで、今時にや珍らしい、全盛ではありましねえ  
か。

私も仙臺に居ただがね、何うして音に聞くばかり、金華樓の十町四方で、ほんのり香をかぐば  
かりで、手の届くやうな花ぢやねえ。

隊は違つちや居ましたが、生れ故郷が同一だで、小坂とは兄弟のやうに交際つて、畜生め、も  
承知だが、どでござんすで色女に、見せるやうな男ぢやねえだよ。



唯辰之助が戸外を通ると、やあ、中將が行く、中將が行く、と慫ういふだ。小隊長殿、大隊長殿まで、内證ぢや小坂中將といはれましたが、一等卒を何爲か、と云ふと、業平だといふ洒落でね。なに、こりや男振が佳いぢやねえ、對手が金華樓のお縫だから、それででがした。

年季も何にもねえだけれど、親と親が許さねえ、ころび合の中なんで、年寄たちに遠慮して、辰之助が除隊になつて、此の月の輪に歸つた時、一所には來ねえだつたが、半年ばかり經つてから、高島田でお前様、帯をね、お太鼓といふのに結んで、村の入口で腕車を下りると、大い革靴を二ツまで、車夫に提げさせて、雪駄をちやらく〜と入つて來ただが。

いや、押魂消たの、何のぢやねえだよ。

私丁ど、辰之助がね、畠へ肥料をぶツかける處へ通りかゝつて、野良談の最中ぢやつたが、立停つて、小坂さんは、と其の別嬪が聞くでねえかね。

肥料柄杓を、ぽつかり落いて、お、といふと色男、日に焼けた顔を眞赤にして、何しに來た、此處はお前の來る處ぢやない、と云ふ。是を見せに來ましたつて、抱いて居た子を男に渡すと、すぐに手巾を顔へ當てたあ。

それでも兩親が、と皆聞かず。やあ、辰公、媒妁人は爰に居る、と私あ爾時、仙臺座のお芝居を遣つたでがす。

さて、私が先へ立つて、小坂住居となると、一倍芝居ぢや。爺様は先祖の位牌に燈明を上げさつしやる。婆様はお前様氣の毒な目が見えぬ、手をついた花嫁の背後から撫で擦る。辰公土間に立つて茫乎ぢや。

三ツになる男の兒が、ちゃんとお辭儀をして、お爺ちやま、お婆ちやまと云つた時は、私思はず泣いただね。見たこともない舅たちに、これまで心遣をする、少い阿母の心の裡、こりや貞女だ、と思ふに違はず。

在所では在所なみと、二十三といふ少さに、眉を落して齒を染めたが、發心のはじまりで、力業こそ出來ねえだが、草も取りや水も汲む、舅の肩腰を擦らずに寝た事はない孝行。

其年から瘦村だけでも、日和が好うて豊作つゞき、小坂が背戸の眞桑瓜の甘いのも、嫁の徳ぢや、と譽めもので、五月やみでも辰が門に、卯の花の明いのは、何時も月夜ぢやと言ひましたつけよ。

近所のことなり、柳小島の辨天様信心して、小兒を連れちや雨にも風にも、おまゐりを缺かさず爲るだ。鰯口の紐に縫らつしやる、其の窠姿を見るにつけ、可愛い妹が出來さつしたで、辨天様も、嘸御苦勞なさるであらうと、皆いひ居つた事でがす。

「眞個ですな、」



と身に沁みる。

八

「處が今度の戦争だね、」

魚釣は煙管を投出し、

「親も子も女房も、身體もあつたものぢやねえだ。鐵砲を引擔いで帶革でぎうと腹を緊めりや、がらりと魂が入交つて、彈丸食はうと啼く蟲が、咽喉の邊まで込上げるで、出掛ける本人はお茶の子だてね。辰之助も、逢つた時泣いたほど別離にや薩張して、召集に應じただが、さあ、残つたものは一期の大事。」

立派な稼人が居つてさへ、田地はなし、山は持たず、小作や秣取の合間にや、村の小兒に學校の温習でもしてやつて、蕎麥粉や南瓜のつけ届けを算盤珠に入れるくらゐ、お彼岸の牡丹餅の、大きくて鹽の利いた奴、鬼の首でも取つたやうに、振廻はす小兒を見て、情なかつたのも疾の昔、今ぢや兩親が見て喜ぶやうな、食ふや食はずの酷い落目。

例の持つて來た革靴にや、男へ貢ぐ書生羽織、舅たちへ土産やら、村中への心づけ、自分の衣類も夏冬揃つて、四覆五色とあつたけれど、嫁た翌年から中氣で寝て居る、舅へ着せたが無くな

すはじめで、とゞの了ひにや、針さし兼帶の疊紙に、東京の内を出る時、結つて居た島田にかけた記念だ言つて、大事に入れて置いた手絡まで賣る始末。

こりやもし、熱鹽の湯治に行く、お晴れの丸髻に掛けるというて、村内で評判の、洒落ものの媽々衆がね、文久五ツで買っただよ。

こいつは可笑し、襦袢を直した友染の、色の褪せた單衣を着て、小坂の小兒が袖を結へて、水あがきの腕白はいぢらしいが、いけたいの悪いのは、村長が許の娘だてね。

縮ツ毛の胡坐鼻、大道白の尻を振つて、お縫さんの紋附を、ぞろりと引摺りは何うでがす。梟が孔雀を殺して、翼を啣へたといふもんだ。

お前様、申戯ぢやねえ、未だ恐いのは其の村長の兀天窓だ。

地體、此處いらにや、賣らうたつて、小袖に羅を買ふものは、掘つても出ねえ。氣前の可い東京育ちだ。先のうち、私が媒妁人といふ格で柔いものを一枚、内の媽々に下し置かれたと思召せよ。

島小柳

麻の葉木綿の湯卷の上へ、ふはりと引かけたが、とみかうみて、こりやだんぶくろでは納まんねえ、緋の袴を穿かひでは、と眞面目になつて吐いたでねえかね。

旅費を使うて、若松へ行つて賣るでもないと大概の品物は村長様が引込みました。



其處でお前様、あらうことか、緋縮緬の蹴出しを一枚、兀め、座蒲團に仕立てただね、爰へ、ぐにやぐにやと坐り込んで、金函を背後に背負ひの、やあ、床の間の花を活ける、小坂の嫁を呼んで来う。綻が切れたお縫を呼んで、それ、茶を入れるの、途轍もない、三味線弾けのと權柄づけ。粟一升貰ふのも、くらしの助けと、可哀相に、主人のやうに勤めるだが、兀は妾にする氣だから、つけつまはしつ、いや最う、狒々に魅込まれた災難が、辰が留守になると十倍まし、是だけでも瘦せるのに。

おまけにお前様、聞かつしやい。お縫さんには男の小姑、辰之助に兄があつて、身上のあら方は此奴が潰した厄介漢。打つ、買ふ、飲む、三拍子揃つた上に、土根性の悪黨で、渾名を蝮の大九郎といふのがあるだ。

内にや居ねえ、前々勘當ものだがね。義理を立てて寄附かぬわけぢやなうて、汚穢しいから踏込まぬばかりさね。其癖間がな透がな、つけまはして、少しでもお錢を見りや、其場で引攫つて跡足で砂とやる。お縫さんの衣類なども、お爲ごかしに、世話をして、大抵上前を刎ねたでがすよ。

大九郎め、此の節ぢや、村長どのの手先になつて、頻りにお縫さんを口説くだがね。何、汝も又はじめから狙をつけて、手籠めにしようとなでした事もあるでがすよ。

何處に立つ瀬があるもんだ。

九

魚釣は思ひ餘つたか、詰めかけむばかりの氣色で云つた。が、巡禮を見て、己を見返り、船と水と山を眺し、掌を、丁と拍つて、

「は、は、は、うつかり實が入つて、飛だ長談話を遣りからかいた。これぢや魚を其方除けで、お前様を釣つて私が釣込まれたやうなものだね。

さて、何から起つた談だツけ、それ、と獨で飲込み、  
「此の裸體の一件ぢや。今の巡查には、何か、小坂が許の切ないのを見るに見兼ねて、着て居るものを脱いだやうに云ひましたが、何、お前様、實は借りたものを返したまでだよ。

過日、辰公と一所に召集されて、仙臺へ行つたでがすが、隊から被服が出ましたでね。最う戦地へ行くばかりだ、と、着の身着のま、な單衣を一枚。本來は媽々が許へ記念に送る處だけんど、入山形の夜討の揃で、後世に残るほどのものなら格別。

陣笠首の古着なんぞ、悪く佛壇にでも奉られて、虱を這はしては勿體ねえで、五合にして飲了へ、と錢にして酒を買ひ、いや、煽るほどにの。芭蕉ヶ辻へ突立つて、鯨波の聲を上げたは



可いがね、もし、隊に人員の都合があつて、私が従軍は後廻した。

はあ、情ない、と落膽して、擇屑になりました、と何うして里へ歸られるだ。小包にしてなりと戦地へ連れて行つて下さいとね、逆筋斗を打つて願つたけれど、時節を待て、戦争は三月や半年で済みはせんと、小隊長殿がおつしやるで、本降の前のぼつくだ。無理に駈出すにもあたらぬかと、さあ、引返すことになつたですが。困つたのは鎧だね。そら、脱いだわ、賣つたわ、飲んだわで、虎の皮の禪こそしねえけれど、鬼の餓鬼が、仙臺下りで生れたやうに、大兒の素裸、従軍をしねえものが、被服を着ては居られぬので、そっくり疊んで返上すると、あとは宿舍の二階から階下へも下りられぬといふ始末。

や、どんなもんだと、柱を押して、しこを踏んでも對手はなし、軍人ともあらうものが、鎧櫃の底を拂いて、もんなしは恥かしし、天窓を抱へて居た處を、辰之助は戦地へ行くので、これは、もう不用といふので、衣服を貸して呉れたがすよ。

脱いで来たのは其の單衣。尤も、はじめから辰之助は、私に呉れるというたけれども、留守の身上が身上ぢや、貫切りに着服する氣はねえだ、歸ると早々舊へ戻さうと思ひましたが。

私心ばかりでも、辰之助は何となく殺したくは思はぬだ。前方が其氣もないものを、私がか手から、自然に着ものが返るやうになつては、是がもし記念になる前兆でもあつてはなんねえ。ま

あまあ、と考へてね。一日のばしにして居た處、昨夜の事、お前様。

例のそれ村長が、厭らしいことを云ひかけて、何でも、酒をくらつた擧句、引抱へか何うかした時に、後生です私と思つて、髪を買つて下さいましたッて、お縫さんが言はしつたとね。錢はともかくもお前様、容色を賞翫の元親仁だ。髪は惜がつて切らせずに、其場は濟んだげに言ふですかね。

十

魚釣はしめやかに、

「聞いただけでも、私瘦せるやうな氣がした。髪を賣らうといふ切羽では、今度は生爪を剥ぐばかり。單衣一枚でも大層な足になる、縁起も不縁起も云うて居る處でない、今朝来がけに脱いで来ました。お縫さんは手間とりに近間へ行つて居ましねえ。爺様は向うむきに呻きながら寢てござつて、寢返りするも大儀な様子。婆様は茄子のへたを、蔭干にしようとして、糸に繋いでござつたがね。これの、辰兄に頼まれた、着物一枚返します。つい近所の事で、まさか忙しかつたとも、忘れたともいへぬもんだで、済まぬことぢやが、だんまりで少時借用のしたでがす、面目次第もない始末、とすぐに裸體になつたがね、目が見えぬで仔細はねえだ。



口へ出しては言はつしやらぬが、私が戦地へ行かねえのが、どんなに羨しからうと思ふと、ものを言ふも切ないで、腰をかけたで、饒舌つた處で、麥飯一杯世話をする力もなし、世辭を云ふだけ面目ないと、逃げるやうにして來たですがね。

「其で御發心なされた、はて、さて。」

何お前様、此處等の田舎ぢや、今時裸體で野面を歩行は當前のこんなでね、私帯を解くほどにも思はねえだよ。馬が綱なしに、のそり／＼放し飼に歩行く處だ。巡査に云うたは出鱈目だ、私にお氣遣は勿體ない。平によしてくれさつしやい。

だがね、此の包金子施さつしやる氣があるなら、今話したやうな譯でがすで、何うぞ何だよ、其小坂が許へ饗應うてやらつしやいやし。

高はどれだけか知んねえが、一錢か二錢づゝの頭髮をね、お縫さんが器用に結うて、それもあつる日もありや、ない日もある。おどんだ處を鼻に進せて、上澄を吸つてつないで居る。花の露なら味はあれど、粥の薄さが似ただけで、蝶々よりも果敢ない姉さん。半年の命はつなげませうでね、私頼むだ、何うだね。」

と薩張した氣象らしいに、くどく／＼言ふのも我事ならず、他人を思ふ眞である。

旅の女は、犇々と引入れられた風情であつた。

「まあ、承れば承るほど、何とも申上げやうのない、お可哀相な、そして染々お優しい方でございますねえ。あの、其のお縫さんとかおつしやる方は、現在、此の先の村においでなさいませ。」

「え、居りますとも、お前さま、たゞ、花のしぼんで消えぬばかりで。」

旅の女は身を震はすまで。

「可かつたこと。もし今のやうなお話を伺つて、そして其の方は、はや泣死にお亡くなすつたといふことだつたら、どんなに口惜しからうのに、眞個に世の中に儂いものは、一人ばかりではありませぬね。」

魚釣いかさまといふ顔して、

「然うすると、お前様も、」

「否、私などは苦勞と申しても其のお方なぞと較べられるのではないんですが、でも、あの、不束な自分勝手の手心では、まだ其のお方がお羨しいほど、情ないのでございますよ。」

「其で御發心なされた、はて、さて。」

お年紀少な、其のおからだで、よく／＼なことになうてかい。いや、お歩行ひなされた足のあつたには、こんな焼原にも今度から、董なり、桔梗なり、女郎花なり咲きませう。功德になるで、



どうぞ、小坂が許を見舞うておつかはしなさりました、是は、此ま、お前様、

「其は然うしてお置きなすつて、貴下から其の方へお上げなさいませうとも、他におつかひなさ

いませうとも、可いやうになすつて下さい。

彼方へ参つて、私から別におしるしをいたしませうから。」

金子は爰に、と明けては言はぬが、袖をかへせば白銀黄金、立處に蝶となり、花となつて來たらむず、神々しくも見えたりけり。

魚釣片手で包を頂き、

「そんならお言に甘えまして、お預り申しますわ。恚う見た處は澁團扇を持たぬばかりの姿ですが、御利益を以て福の神となつて、私も小坂が門口から、ばらくと撒くとしますだ。

處で、お待ちなさりまし。お前様、これから辨天様へ御参詣なさつて、お縫に逢うて下さるは可いが、晩の泊のお心當りは？」

「唯、お堂守に願ひまして、お通夜をさして頂きます。唯今までも彼方此方で、然ういたして参りました。」

事もなげに云ふのを聞き、夥度打領き、

「歸命頂禮、何よりな思召ぢや。堂守も何にも居らぬ祠ですが、此頃は在方のものが交るゝ」

詰め合つて、それこそ平生は敵同士の法華も念佛も親類づきあひ、一心になつて、皆、自在辨天に、敵國調伏の祈をして居りますので、あとで又私もお目にかゝりましょ。お送り申しても可いだけれど、立つて見さつしやつたばかりさへ、叱言ぬかした此の口で、追従らしうて極が悪いで、まゝ、づつとおいでなさりまし。ぢやが、近頃此の山の根ツこから野原へかけて、狂犬がをりますで、晝間は大抵出をりませぬが、氣をつけて行かつしやいまし。萬一な事があつたら、岸は浅いで、水の中へ入らつしやると、屹と飛つかねえだから、可いかね、誰も見ちや居らぬ處、裾をぐいとやらつしやいよ。」

十一

「追つけ私もお後から参りましたよ。然うして、はあ、今夜お前様を頭に、お縫さんと私三ツ鐵輪で、祠に通夜をしますべし。其時さ、又お前様の身の上も聞かしてくれさつしやいよ。」

如何に、其の通夜の、清く美しく、哀であらう。湖のさゝ波も、然らむ時は嘸、天女が琵琶の絲に響いて、妙なる調を傳ふるであらうかを、深くおもひやつた口吻であつた。

旅の婦人も、正に其の然るべきを豫期したやうに、寂く微笑みつゝ頷いたのである。けれど、約束はあだになつた。此の三人が、柳小島の辨財天の祠に未だ會せぬ内、魚釣は、



二度目の召集に應じて、家にも歸らず、仙臺さして馳せ參することになった。

其の順序は恁うである。

木川田は船のあたりを分れて行く、巡禮の後姿、後姿は唯女性の案山子を、野中に見るに過ぎないけれども、や、前下りに深く被つた、笠の間なる頸の雪、薄く煙つて艶かに濃い、髪のかゝりの洩るゝにつけ、先づ其の目鼻だちの如何ばかり、氣高く美しきかをおもひ遣つて、怪しきまでに悚然とした。上目に仰げば磐梯山、下目に俯せば猪苗代。

其の湖べりを次第々々に、遠ざかれば猶花の香の、風は此方へ戦ぎ來て、馥郁として、四邊を籠め、峯の煙は中空を、逆にむらゝと彼方に靡いて、紫の雲の路を描き、漣は靜に寄せ、翻つて、さらゝと走つて、白銀の橋を渡し、ともに其の人を導く光景。

荒涼たる原野、塵埃を納めて、鶴の羽以て掃けるに似たり。

其の影見えずなり行きたるまで、諸膝に兩手を組んで、魚釣茫然として居たが、思はず獨言をいふ。

「はてな何だか餘り神々しいので、些とこりや不作法なやうで、眉毛に唾も附けかねるが、……はてな。

昔の城の女妖が今時出て來るわけはなし、破裂の時の亡者にしては些と人格が高過ぎる。蜈蚣

を射る、とも、鯨を切れ、とも、別に註文がない處ぢや、底におはします姫君でもないやうだ。然うかといつて、辨天様に知己があるぢやなし、はてな……」

と船に差置かれた、金子の包を捻つて見て、ト日に透したが、小首を傾け、打案じた手はいつとなしに、兩提の煙草入にかゝつたが、粉の中へ突込んで、引握るやうにして金具を留めた。柿を木彫の根附を掴んで、熟と考へたまゝ、片膝を立てると、そろゝ六尺に挟んだが、殆んど無意識。

はじめて心着いて、煙管を拾つて、唯切尖を検す構、飲みさしの吸殻が、消えてこびりついたのを、舐へごつんと當てて、口をへの字形に、フツ。

持直して、身體をねぢりさまに、ぐいと、色も形も自然薯の如き筒につつまみ、振向いて、手拭を取つて又南瓜。

腕を伸ばして釣棹を手許へ引くと、水に線がついて、絲が寄るのを、尖からくるゝと巻きつけたが、張合のない顔色。

一寸肩に、ぬいと立つと、小造の仁王のやうな、筋のしまつた、脚の長い、屈強な其の丸裸で、のさりと胴の間を踏み出すと、舳へ蜻蛉が來て留まつた。

船はふはりと浮いて、斜めに陸より高きこと三尺、木川田は陸へ上つた。



身内に引つけた丈短き、曠野の影を熟と見ながら、島に流されて年経た形で、悠々と歩行き出す、前方から、ばたくと駈けて来て、足許に鳥が立つ、けたましい、村の親仁。  
「やあ、猪三郎どん、此處にかい。」と呼吸せいたり。  
「佐次兵衛さんかね。」  
「お、主は此處にかい、早、早く来てくれさつしやい。」

十二

「慌てまい、何でがす。何事かはだかつたよ。」  
「猪三郎どん大變ぢや。」と顔も膽も見るから小さな其の目の色を變へて居る。親仁が状を左視右瞻。  
「うむ、狂犬が出ましたか。然うぢやねえかね。はあ、それぢや途中で、綺麗な怪ものさ見さつしやつたか。何、ありや辨天様へお参詣に行くだとよ。心がけの可いお妖ぢや、些とも恐がらつしやるには當らねえだ。」  
「何いふぞい、狂犬もお妖も日中にや出はせぬが。又出た處で、恐しいといつても自分の事ぢや。私が騒ぐのは、餘所の人の身の上だに。」

「はあ、誰ぞ、何うかしましたか。」

「おいの、」

と始めて息をつき、

「爺様が許の嫁御の事ぢやわ。」

「お、お縫さん、」

「其の女ぢや。」

ぎよつとして、

「何うかしたかね。」

「村長が許へ、引摺つて行かれただよ。」

「引摺つて？」

木川田は目を睜つた。

「何だつてね。」

「又厭らしいことを言ふだあよ。」

「打棄つて置かつせえ。悪い病だと断念めるだ。」と詮方なげに、兎も角も安堵したが、自分も断念めたやうに云つて、足を踏留める勢もなささう。背後から押される形で、てくくと歩行き出



す。

佐次兵衛は引添うて、情ない上目づかひ、

「猪三どん、猪三どん。」

「……………」

「これよ、猪三郎どんてばな。」

「やあ、」

「主が然う氣なしでは誰が何う出来るものぢや。まあ、見ては居られんで、来てくれさいよ、何うかして遣らつしやい。」

「仕方がねえよ。」

「え、これ仕方がねえちゆツて、主、見殺しにする氣かい。」

「別に彼の村長だとして、お縫さんを取つて喰ひもしねえだあよ。」

「氣だるくいへば、急込んで、」

「主といふものは、これ、一層のこと、取つて喰や一思ひ、我等目を瞑つてお念佛ぢや。あとは地獄も極樂も、阿彌陀様まかせぢやでの、氣を揉んでも仕方がねえだが、煮ようか、焼かうか、酢で揉まうかと、食はぬ前を樂に、お縫姐さんをつかまへては、狙の上へ乗せて、庖丁で撫でま

はしては、又生洲へ放すのを、傍で見居られるもんかな。

今日は何と、晝日中さ、村長めが寝そべつて、太九郎の奴に、浪花節を唸らせて、姐さんは三味線弾いて居るでねえか。

「猪三どん、何とだよ。」

「……………」

「無言か、これえ、考へて見さつせい。」

親兄弟にも棄てられるまで心中立をした男は、戦争に出て留守なり、舅は一年半と、腰も立たねえ煩ひなり、おまけに姑は目が見えぬ。これではお前、國主大名の御臺様でも、大概いきついで了ふだに、啜るものは粥も六ヶしい、五錢や六錢の髪結錢で、四人が其日ぐらしぢや。

軍書讀が三國志に、琴を弾する法はあれ、何と主、其の苦勞な中を、狒々や狼に取巻かれて、三味線が弾けるかよ、え、猪三。」

「弾けぬ！」と大きく、藪から棒に云つて退けた、猪三の面は眞赤である。

「弾けまい、それを姐さんは弾いとるだよ。」

「まだ、心配なことがあるだ。」

豫て主も知る通り、私等これ交るべく、辨天様の祠に籠つて、敵國調伏の心願をかけて居るだ



ね。

「今日も朝から参つて居つたわ。村の喜六叟がの、昨夜から隣村へ往つて居て、今朝疾に村方へ歸つたというて祠へ駈込んで来たつけえ、顔色が好くないぢや。然しての、説ふことを聞かつかえ。」

十三

「主等アもつと一心に、信心せいではなんねえだ。豪いことが出来たぞ、と眞蒼になつて居るで、何を云はつしやる、百姓だつて何だつて、此方人等人間ともあらうものが、いかに暴ればとて、手に負へねえとて、狂犬の事なんぞ、神佛に御手敷をかけてなるものかい。」

喜六叟、私等が此の祠に立籠つて居ると云ふのは、其處に押立てた旗にも見さい。憚ながら露西亞退治、敵國調伏の願がけだぞ。狂犬に咬まれましねえやうになんぞと、そないな小ほけな了簡ではない哩と云ふとの。

「何こきををる、誰が狂犬退散の、願ぢやと云うた、と力む。」

「はてさ、叟、主いま大變なことがはだかつたと云つけえ。ござる道で、唐黍の陰にでも、狂犬の尻尾を見たつらあ、と籠めたわい。」

駄目を云ふもんでねえ、さては何にも知らぬげな、言うたら膽玉がひつくりかへらう、耳を塞いで能う聞けよ。隣村の噂では、對馬の沖へ露西亞の鐵船が顯はれて、こちの船べい大砲彈丸にあげをつたわ、兵隊さんが千人近く、中佐少佐のお方たち迄、討死を遊ばしたわ、何とぢやい！

ひやあ、と私等、上敷の外へ腰を抜いたが。

「やあ、猪三どん、眞個の事ぢやげな。」

猪三は釣棹を擔いだまゝ、俯向いたまゝ、頷いて、

「そんな事もあるげだよ。」

「滅多無性な話ぢやないかの。」  
それに、未だ憂慮なことを云ふのは、隣村の佐吉どんぢや。主だの、小坂だのと一緒に召集されて、彼は戦地へ向つたぢやが、丁どの、若松の親類から、喜六叟の往つて居た所へさして、對馬沖大變の音信があつた所へ、佐吉どんの手紙がの、廣島から届いただ。

いよゝ運送船、××丸へさ乗組んで、戦地に向けて出發だ。隣村月の輪の戦友、小坂辰之助どのも、同船にてござ候とあつたとい。やあ、是れ敵艦に沈められたは、船もあらうに××丸ぢや、助かつたものも些とはある。未だ其の名は分らぬが、船も人も藻屑となつたで、十に一は助からぬ、佐吉は的切南無阿彌陀、と沸えるやうな騒ぎでの、昨夜は一村まるで寝ず、私もおちお



ち寝ぬのぢや、と喜六叟は目を赤うして、隣村は隣村、此方の辰之助も危い。もしもの事があつた日にや、小坂の爺様や婆様は何とならう。第一貞女な、孝心な、あのお縫さんの顔が最う情なうて見られぬで、朝飯を食ふ元氣もない、と、其ま三板敷の上へ轉げ込んで、苦い顔をしながら、甌をかいて切齒ぢや。

五人居た同志の講中、寢像の悪い喜六叟を取巻いて、唯出るものは溜息ばかり。

其の内に停車場へでも走つて、對馬沖の様子を聞かうと、駈出したものもあり、氣が抜けて茫乎として、内へ歸つたものもあるだよ。

火は消える、茶は冷える。ロイ利くにも張合がないで、湯でも沸せと、一人が土瓶の下を吹くと、一人は清水を汲みに出た。私は、しようことなしに鉦を叩いて、悄乎と拜んで居たわ。

此處へ何と、お縫どのが、あの五つになつた小兒を負うての、束髪ぢや、頬へはら／＼風で吹くのを、小兒が煩からうと拂ひ／＼よ、眉を落してくすぼつても、判然と色が白く、窶れりや窶れたで美しいぞ。小さな日の丸の旗をくる／＼と廻して見せながら、肩越に振返つちや、あやしあやし、いそがしさうに冷飯草履で、びた／＼拜みにござつたが。

顔を見ると此處が一杯。」

と、はだかつた胸を横に撫で、

「南無三寶、蟲が知らせて、様子を勘附いたと云ふではないか。又疾くに、××丸の、風説を聞いてぢやと、尙ほ難儀。

これ／＼でござりますさうな、良人は無事でございませうか、とそれ尋ねられてでも見たが可い。はあ、何というて返事をすべし、こんな時は、寢て居る喜六叟が羨しい、と思ふとの。

誰の心も同一ぢや、土瓶の下を吹いてござつたのが、火箸を杖に、こつくり／＼。」  
佐次兵衛眞似をして、澁い顔。

十四

「可か、居睡をはじめただ。水を汲みに行つたのは、と横目で外を見ると、其の親仁もぬかるものか、松の樹の下、しよろ／＼流を、土瓶に汲んだり、溢したり、底の方を洗うて見たり、落葉を掻除けて見たりしての、つツと向うで背後向に納涼んでござつて、急には歸りさうな様子もない。

さしづめ、私が對手ぢやで、皆さん御苦勞さまでございます、と判然口を利かつしやるのも、底に涙がある所爲か、ひや／＼と頸に沁むわい。

鉦を矢鱈にカンカン／＼、柳小島は寂として、他に誰も人は居ず、一人が寢そべつて、一



人が居ねむり、清水の傍には一人が踞んで、私が鉦を叩いた所は、湖のへりの仙人か、羅漢の缺に魂が入ったか、辨天様の御住居へ、庚申様のお猿が四足で、店借をした體ぢやての。狐格子を開いた下の、敷居際に膝を折つて、しばらく拜んで居さした。

寝そべつたのに遠慮の氣か、姐さんは小さな聲で、爺さん、爺さんと私を呼ぶぢや。

そりやござつたと、どつきりした。慌てて三本毛を抜かうにも、天窓は元げたり、猿にならず。見まい、聞まい、饒舌るまいで、澄まして居ることもなんねえで、お、小坂の姐さんか、ござらつせえ、と云ふ口の下からの、密と、顔を視めたて。

可いお天氣でございますねえ、皆様のお氣張で、戦もおめでたう存じます、とたとへにいふ、白魚のやうな指を揃へて、丁と挨拶をさつしやるで、先づ此の處大丈夫ぢや。對馬の難も、辰之助が其船に乗つたことも、未だ知らぬやうに見えたので、一寸のがれに一呼吸ついて、それから爺様の容體や、婆様の氣の毒さ、あゝの恚うの、と二ツ三ツ觸らぬ話をして居るとの。

民太郎といふ小兒がよ。

うつとりした神々しい、柳小島のお姫様の、まをし兒でもあるやうな、色の白い顔を仰向けての、御像を見て居たつけが、線香を取つて、そら、睡狸の火鉢から火をつけて、姐さんの顔を見て、莞爾するとの、線香立にさしたと思へ。

ちよこなんと胡坐をして、練物のやうな膝を立てたわ、鉦を一ツ、カーンとやつた。何事ぢや、お供物の團子でも狙ふ事か、と私思はず涙が出た。

此の面との、小兒の顔とを見較べて、姐さんがよ、黙つて俯向いて居さしたけえ、漸と彼方此方向すと、狸も、猪も、松蔭の狐も其のま、ぢや。

をぢさん、皆様のいらつしやいます前では、餘り身勝手に、申上げられた義理ではございませんが、どうぞ、御祈念を遊ばす序に、辰之助が討死をしませぬやう、無事で戻つて來ますやうに、お願いなすつて下さいまし。親兄に負きました、いたづらの私だけでは、辨天様のお心も、どうやら料りかねます、と然う云うての。ほろくとお前、何ぞの花へ、露がかつたやうに、涙を落したではあるまいか。

何と我慢がならうぞい。狸もむっくり、猪も起きた。清水の狐も飛んで來た。此の猿松も手を取つて背中をさする、肩を撫でる、小兒を抱くやら、賺すやら。え、何をつけ、おかみには、大將もある、兵士もある、艦も鐵砲も立派にあるわ。片田舎の此方人等が、何を知つて戦ごことに、嘴を入れうぞい。一人の無事は十人の無事、百人の無事は千人の無事、千人の勝は國の勝ぢや。皆が寄つて祈願を籠むるは、此方様たちの可愛さに、辰之助の無事を祈るのぢや、と皆が泣くやら、悄氣るやらの。姐さんを中心に取巻いて、身體に雨を降らせたぞい。



おい、猪三どん、主も泣くか、

と佐次兵衛は目をしばたき、

「然うする處へ、何と、聞かつしやい。小島に立てた旗の下へ、ぬいと立つて、尻を捻つて、鼻の先きに頬被よ。三尺帯の前はだけ、表打の下駄を突掛け、厭らしい風俗でな、うそく御堂を透したのが、我折れ蝮の太九郎野郎ぢや。」

十五

「はれやれ、見たくでもないと思つたが、殺さぬ内は居る奴ぢや。やがて、のそくと遣つて來つて、何と、勿體ないことではないかい。高くもない縁側ぢや、片足御堂に踏掛けて、口を歪めて覗きくさる。眞先に目につくのは、彼のふちの黒い盗人眼よ。お縫さんく、一寸顔を貸してくれさい、些と急な用があつて、一遍其處等を尋ねました、さあ直ぐに、と急ぎ立てをる。

姐さんも行きたくなし、私等も遣りたくはないに因つて、目眞似や仕方方で留めるばかり。對手は力づくで引立てもしかねぬ奴。

又それでなうてからが、爺様も婆様もあれば、居切になつて、辨天様のお附の木像に成澄ますといふ法ではない。はい、唯今参ります、と直ぐに民太をおんぶして、悄悄と出さつしやる。

さあ、急ぎねえくと、私等には會釋もせず、忙しさうに前へ立つて、裾をくるり、半分が處尻をむいて、藪蚊か蛇にでも螫されたか、毛だらけな太股をこりくと搔きながら、じろりと見返つて連れ出したわ。

此奴と一所にや民太も厭か、あの、三日月の中へ髻題目書き込んだ、大旗の下の處で、おんぶをされた背中から、いたいけな手を出して、旗竿をつかまへて、駄々を捏ねて動かぬぢや。

姐さんも引留められて、しばらく旗の、磬梯おろしに靡くのを、熟と仰向いて見てござつた。

え、何を路草喰ふのぢやい、と堂まで聞える大聲で、太九郎めが怒鳴りくさると、怯えて、わつと泣きだす民太の、手を挽ぎ放して、しよ引き居つた。

何をするか黙つて居られぬ。私が遠くからあとについて、様子を見に出たのぢやが、それ、今いふ通り、村長が許へ連込んで、とうとう三味線を引かせるのを、裏の藪から覗いて來た。

何と又太九郎めが、狒々親仁のしみつたれに、幾千貫うて爲る事やら、其語り居る浪花節がの、小栗判官照天姫や、山莊太夫の段ではない、事細には参らねども、雑と陳べます段の儀は、惚れた男の胸の内と、あの畜生、兀天窓の代理をして、拍子にかつて口説き居る。

六十男の事なれば、氣立がようて、しんせつで、搔い所へ手が届く、などとやるとの、兀旦那が、でれりとして、あ、よいやくと囃すぢやないかい。



見ても聞いても居られる事か。優しい民太はの、阿母が泣きく三味を弾く、瘦せた膝に突伏して、重ね手に顔をのツけて居るぞい。

何と、此の眞晝間、まさか手籠にするでもなし、今はじまつた事ぢやないが、朝の御堂の様子もあり、不分から堪へ堪へて、黙つて居たのが最うならぬ。

おのれ此の、裏庭の崖敷から、鴨越の逆落しで、埴生村の清盛の、薬罐首抜いてくりよと、な、思ふばかりで私ぢや明かぬ。

夢中で駈廻るやうにして、猪三どん。其處で主を捜したのぢや、これ、猪三どん。や、主、背後を向いて何處さ行く。

と心着いて變な顔。並んで歩いた猪三郎は、此時埴生村近くなつて、唯見れば肩を合はせながら、舊來た路の方に向をかへて、在所に背中を見せるのであつた。

木川田は目に涙一杯。

「佐次兵衛さん、私又釣に行くだよ。」

「何ぢやと、」

「迎も同一村に居て、お縫さんのいぢらしさを、私見ては居られんで、舊の船へ出掛けるだよ。」と早や、つかくと踵を返した。

驚いて、慌てて、壓へ、

「これ、やい、主が釣に行きや、姐さんの身が抜けるかい、鯛や、釣の土産もので、了簡換る元ではないが。」

小さな親仁を腰に纏らせ、山を望んですつくと立つた。猪三郎は動かむともせず。

「けんどもね、仕方がないだ。」

十六

「仕方がないで済まされるか。え、猪三どん、主は第一媒妁人ぢやぞ。」

木川田の脚は根から揺めき、

「や、それ言はれてはなんねえだ。」

「見さつしやい、黙つては居られぬ處ぢや、喃。あの爺さまが、婆さまが、姐さんが、民太が、と口早に云ふと、身震ひして、

「え、それ聞かされちや溜らねえ、理解で分る對手でなしだ。私が飛込みや喧嘩になつて、太丸の蝮や村長めに、疵でもつけずにや納まらないわ！」と二ツ三ツ地蹴踏む。

佐次兵衛齒がゆさうに勇み立ち、



「主に似合はず、何をうじくするのぢやい。傷ぐらる愚な事ぢや、太九が土性骨踏折つて、埴生村村長が首、引抜いてくれい、やい！こゝな隊長め。」  
聞くより大息に肩を揺り、

「私、私が身體は露西亞が對手だ。一人や二人を向うへまはして、ひッたけでも入らしては、從軍が出来なくなる。我が身もみまゝにやならぬわ、最う堪らぬ、爺々、堪忍させえよ。」

といひ棄てて振切つた、魚釣は一目散、村を見棄てて駆出すあとから、轉がるやうに追つかけて、佐次兵衛が又武者ぶりついたは、足疾く續き得たものではなく、木川田が何とかしけむ、不圖其の歩を留めたのである。

又絶つたのを振も拂はず、

「おゝ、爺々、ありや、爺々が許の白馬ではないか。」

此のあたり村に近く、湖に岸にや、距り、耶摩の岩山に相接して、野中を北寄りの崖の下、井戸側蒼く苔蒸して、玉清水を湛へたる、傍に古き建札して、龍神の水といへるあり。

此の清水、昔より汲めども盡きず、溢れもやらず、長に鏡をかけて、柳小島の月一輪。雨に濁らず、雪に隠れず、唯長早に湖心の水、其の高さ三尺を減する時は、水晶一分の厚さを削らる。故に猪苗代の龍神こゝに宿ると稱へて、然も冷冽氷に似たり。

巖を絞るにあらすと雖も、此の冷さに四邊の岩山、膚に粟立ち、露したゝり、一面に薄く草の生ふるが見ゆ。

然れば硫黄の煙黄に、土赤く、熱砂湖面を吹いて水の黒き時は、建札清く、草緑に、玲瓏として澄み渡り、山紫に、野は蒼く、千里一碧拭をかけて、木の葉の他に塵なき時は、却つて陰暗く、水曇りて、小雨そほ降る眺望がある。

時に此の靈水に、鬘を颯と垂れて、悠々と飲む一頭の白馬があつた。  
鞍は固より一絲をかけず、鶴の姿の四足の雪。

「おゝ、似ては居るがの、違ふやうぢや。」

「然ういや、交毛がないやうだ。」

折から空良く晴れたれば、水精恰も霧の如く、清水を蔽うた駒の背後に、朦朧として女の姿しとやかに手を舉げて、此方を招く風情である、と見直せば塵く。

木川田は思はず胸轟き、

「爺々、一所に來させえ。」

足早に二人して、船なき湖を渡るが如く、眼に遮る樹立もない、野を斜めに横切つて、龍神の水に近づけば、微妙き風一陣、ざつと鬘を吹くよと見るや、木川田は明に、前刻の旅の女の、月



の顔、黒髪涼しく、小笠を手にして端然と其處に在むのを発見したのである。

「や、お前様は！」

「前刻は。……途中で村の衆のお話、捨小舟に魚釣る人は、騎兵でおいでなさると聞きました。然して、つい今しがた、急に又、貴下の召集令が下つたさうで、急いで迎ひの支度を、とお騒ぎのやうに見受けましたから、かりそめではありますが、お知己になつたお方、早くお知らせ申さうと存じまして、引返して参りました。」

木川田は、満面に意氣溢れて、

「召集令が、や、そりや真個？」

「誰が、こんなことを言つて遊びませう。」

「え、難有いぞ、いや、こりや何うぢやい、」と握拳を下げたり上げたり。

微笑ながら打視めて、

「それから、貴下、丁ど猪苗代の馬市へ持つて行くといふ、博勞が、此の馬を持つて居りましたから、御國のための御首途、心ばかりのお贖に、此を貴下に差上げます。贈物にはお恥かしいが、駒は千里の駿足らしい。直ぐに召して、つツとおいで遊ばしませう。汽車より早う、仙臺へお着きなさいませうよ。而して戦場でも、何處までも、何時も貴下の召すやうに、私が祈つて上げますか

ら、

と鷹揚ながら物優しい、其の風采を、物越を、呆氣に取られて瞻むる脚を、下からぐいぐいと引張るのは、此の美人を一目見るより、其ま、大地に領伏して、わな、きながら口の裡に、唯、辨財天女の御名を唱へた、佐次兵衛の叟であつた。

木川田、心着いて諸膝支いたが、

「は、は、は、何と申しやうもござりませぬ。が、貴女様は？」

「名を申しては、何となく、恩を被せませうやうですが、貴下にもものを差上げますのに、氏素性も申さないと、お心持が悪いでせう、鬘に結はへたものに、一寸記して置きました、後で御覽なさいまし。さあ、早くお馬に召した、勇ましい姿が見たい。」

「……………」  
「御遠慮なく。」と裳をあとへ、靜に身を引いてのたまへども、木川田は猶ほ猶豫へり。

「……………」  
屹と見て、

「どうかしたのでございますか。」

「え、村、村方に、お縫と云ふものが居ります、」と云ひながら、轡頭を上げようと、清水を覗



いた猪三郎。

「何にも云ふな、勿體ないぞ。」と顔を擡げた佐次兵衛も、齊く同音に、あ、と叫んだ。

魚釣は水の中に、老いたる博勞は蹄の下に、渠は御へられた埴生村の村長の首を、此は踏躪られた太九郎の軀を、幻に認めたのである。天女は最早見えたまはず。

駒の轡を引向けて、湖水に緑の滴りたる、柳小島の方にして、片手を丁と拜手に、願の下に遙拜し、

「許させたまへ。」

と翻然と乗れば、英姿忽ち爽に、唯鞍壺に刻まれたる、第二師團に名譽の騎兵、駒は神與の駿足なり。心靜に蹄を刻んで、

「這奴！爺々、武運のほどもおもしろ哉。」

と馬上に莞爾と打笑むや、釣棹を鞭に取直し、ハオとばかりに十里の曠野を、早調子で輪乗りをかくれば、合掌を解いて腰のあたりに、背手を組んで、ほく／＼視むる、佐次兵衛の右の袖より、白き虹、衝と湧いて、湖のへりをかけ、磬梯の麓に迫つて、左の袖へぐる／＼。

雪に旭の照添ふ色艶、三度にして乗鎮めた。垂々と汗になる膚も、龍神の水をかひたるぞや。珠玉を聯ねてかけたる如く、星をつらぬいて飾れる装。

洵や、柳小島の辨財天は、遠き昔、元和の頃、孝子が鯉を捕ふる網より赫耀として出現あり、御姿の端嚴典麗なる、海潮妙音に肖させたまへど、本地は月天子にて渡らせ給ふ。

されば帷幕の模様にも、旗にも、三日月を描くにこそ。猪苗代の渺々たる、磬梯山の巖峻なる、硫黄の煙立籠めて、荒野の光景夜の如く、月の世界に似たるかな。

白馬は嘶くこと一聲す。

木川田は心着いて、其の鬘を搔撫でると、小さき紙の切端が、元結のやうに結んであつた。

押頂いて披き見れば、鉛筆の女文字、はしり書美しく、旅順口第一次閉塞の時、戦死、海軍少尉××が許嫁の妻、××良人の追福修行のため、諸國巡禮の途次これをまるらす。

柳小島にて、と讀まれたのである。



わか紫



みつぎもの 裏關所 丁か半か 室咲 日金風 神妙候  
御曹子 黑影白氣 梅柳

みつぎもの

一

伊豆のヒガネ山は日金と書いて、三島峙、弦卷山、十國峙と峰を重ね、翠の雲は深からねど、冬は満山の枯尾花、虚空に立つたる猪見るやう、蓑毛を亂して聳えたり。  
讀本ならば氷鐵といはう、其の頂から伊豆の海へ、小砂利交りに牙を飛ばして、肌を裂く北風を、日金風と恐をなして、熱海の名物に數へらるゝ。  
冬季には此の名物、三日措き五日措きに、殺然として襲ひ來るが、二日續くことは殆どない。  
翌日は例の如く、嘘のやうに暖く、公園の梅はほんのりと薰つて、魚見岬には麗かな人集合。熱海の土地は氣候が長閑で、寒の中も、水がぬるみ、池には金魚がひら／＼と、彌生の吉野、小春日の初瀬を寫す俤がある。

紫かわ  
扱て此の物語の起つた年は、師走から春の七草かけて、一度も日金が風さず、十四五年にも覺



えぬといふ温暖さ、年の内に七分咲で、名所の梅は花盛り、紅梅もちらほら交つて、何屋、何樓、娘ある温泉宿の藏には、雛が吉野紙の被を透かして、あの、ぱつちりした目で、密と覗いても見さうな陽氣。

時ならぬ温氣のためか、それか、あらぬか、其頃熱海一町、三人寄れば、風説をする、不思議な出来事といふのがあつた。仔細はない、崖の總六が背戸の、日當の良い畑地に、二月の瓜よりもなほ珍とすべき、茄子の實が生りました。

總六は、崖の、と呼ぶ、熱海の街を突切つて、磧のやうな石原から浪打際へ出ようとする、傍の蠣殻屋根、崖の上の一軒家の、年老いた漁師であるが、眞鶴崎へ鯉の寄るのも、老眼で見えなくなつたと、最う鈎の棹は持つて出ず、晝は人仕事の網の繕、合間には客を乗せて、錦の浦遊覽の船を漕ぐのが活計。

仇しあだ浪いとまなみ、がらくと石を捲いて、空さまに駈け上る、崖の小家の正面に、胡坐を總六とも名づけつべう、造りつけた親仁のやうに、どつかりと臀を据ゑ、山から射す日に日向ぼつこ、海に向うて朝から晩、暮れると、浪枕、やあ、ころりとせ。

沖から遠眼鏡で望んだら、瞬する間も静まらず、海洋の蒼き口に、白泡の齒を鳴らして、刻々島根を喰削らむず、怖しき浪の頭を壓へて、巖窟の中に鎮座まします、世に頼母しき一體の羅漢

の姿に見えるであらう。

總六親仁は、最初、此の茄子の種を齎らして、背戸へこぼして行つたのは、鳥に肖て翼違ひ、雉子のやうで稍小さく、山鳥かと思ふと嘴の白い、名を知らぬ、一羽の鳥であつたといふ。

且其の鳥は、小春日の朝、空が曇つて、大鳥が判然と墨で描いたやうに見えた時、江浦、吉濱の空を伸して、遠く小田原の城の森から、雲の上を飛んで来て、ふうわり、足許へ来て留つた、其處から苗が出来たといふのであるが、鳥はこの親仁が、名を知らぬものだつたかも知られぬ。

小田原よりか、函嶺からか、それとも三島、日金の方か、たとひ家は崖の上でも、十里は見通し得る筈がない。惟ふに、親仁の産神は彼處であるから、恠く珍らしい、伊豆紫の若茄子に、鳥帽子を着せ、狩衣召させて、一粒種のお鶴といふ、娘の婿にでもする氣であらう。

暮に取立ての初穂を、先づ新しい苞入にして、切火を打つて、爰から七里ある、小田原なる城の鎮守、親仁が産神に、謹上。

師走の末の早朝、藍の雲、淺葱の浪、緑の巖に霜白き、伊豆の山路の岨づたひ、其の苞入の初茄子を、やがて霞の霰舞きさうな乳の邊に緊平と守護して、小田原まで使をしたのは、お鶴とい



つて、十六の、明くれば七になる娘。

お鶴は總六の小屋に生れて、其處で此の年まで育つたので。恰も浪の打附つて様々に碎くるのが、旭に輝き、夕陽に燃え、月にあらはれ、時雨にかくる、牡丹の花に、雌雄の獅子の狂ふ状を自然に彫刻んで飾つたやうな、巖を自然の石垣は、二階屋に住むものの馴れた階子段に異ならず。

鞠がはずんで潮に取られ、羽根が外れて海に落つれば、切立の其の崖を、する／＼と何の苦もなく、蟹を捕へ、貝を拾ひ、斜に飛び、横に傳ひ、翻然と反る身の軽さ。小兒同士が喧嘩して及ばぬ敵の迫る時も、腕白な悪戯を薪雜木で追はる、時も、石垣が逃げ場所、びたりとひそんで縫ると其まゝ、衣服の裳のそよ／＼と、潮に近き唐撫子、手に取る術はなかつたさうな。

泳ぎは固より、木も攀づれば、峰も谷も駈け歩行く。中にも大島を遙かに望んで、眞鶴の濱に對向ふ、熱海の海の岸一帯、火山が碎けた巖を飛び飛び、魚見岬に行く間、小石にも白波や、貝殻にも潮の花。さら／＼と、さら／＼と、ちら／＼と亂る、上を、眞珠に似たる爪尖で、お鶴は七八ツの時分から、行つたり來たり我が庭同様。然も人となるに従うて、天の成せる麗質あり。

手も足も庇はずに、島の入日に焼かれながら、日金風を浴びながら、緑の黒髪、煙れる生際、

色白う肥えふとりて、小造りなるが愛らしく、其の罪のなさ仇氣なさも、蝴蝶の遊ぶに異ならねど、浪打際に岩飛ぶ風情を、土地の者は渾名して、千鳥々々といふのであつた。

娘ならば、龍宮のまをし兒であると稱へても、茄子の種子を云々より、恐らく聞くものは疑ふまい。其の色の白いばかりも、此の邊に類はないから、人々は總六が自讃する、怪しき鳥の舉動には然もなく、湯河原の雲を攀ぢ、吉濱の朝霧や、眞鶴の霜毛に駕して、名だたる函嶺の裏關越え、小田原の神に使した、美しき使者をこそ、皆口々に讃め稱へつれ。

却説、お鶴が其の日の扮装には、頬に浪打つ黒髪を、頸に結んで肩にかけ、手織縞の筒袖は曠着も持たねば、不絶のなり、襦袢の襟と帯だけは、桔梗の花、女郎花、黄菊白菊の派手模様。これは湯宿の込合ふ折は、いつでも手傳ひに行く習、給仕に出た座敷の客の心づけたものであらう、其の上に、白金巾の西洋前垂。

此の前垂は、去ぬる頃、旅籠屋の主人たち、三四人が共同で、熱海神社の鳥居前へ、ビイヤホルを營んだ時、近所から狩催した、容眉好き女の中に交つて、卓子の周圍を立働いた名残であるのを、白きはものの潔く、清らかに見ゆればとて、親仁が指圖で禮服也。芳紀正に二八ながら、男女も雌雄の浪、權兵衛も七藏も、頼朝も爲朝も、立烏帽子といふものも、其處等の巖の名と覺えて、崖に生えぬきの色氣なし、形にも態にも構はばこそ。



裏關所

三

父爺の總六が吩咐けのまゝ、手織縞の筒袖に、其の雪のやうな西洋前垂、背へ十字に綾取つて、小さく結んだ菊模様様の友染唐縮緬の帯お太鼓に、腰へ捌いた縁の下げ髪、裳短かうふツくりと、白きは脚絆の色ならず、素足に草履穿占めた、爪先の薄紅。石高路を物ともせず、獨り早朝の霜を踏む。

山懐の處々、一帯に産出する蜜柑の林に射入る旭に、金色の露暖かなれど、岩の衝と突出でた海の上に臨んでは、路の下を搔い潜つて、崖の尾花を越す浪に、有明月の影の碎くる、冬の朝未だ七時といふのに、早や吉濱を過ぎ、眞鶴を越して、江の浦さして行く途中。

灰色の網を中空から斜めに颯と張つたやう、中だるみに四方潤と、峰の開けた處がある。中に一條、つるくさ交りの茅萱高く、生命を搦むと芭蕉の句の棧橋といふものめきて、奈落へ落るか谷底へ、すぐに前面の峠の松へ、蔦蔓で釣つたやうに攀づる故道の、細々と通じて居るのが、函嶺の裏關所の舊跡である。

娘は此處へ来るまでに、唯其の一臺を見た、熱海通ひの人車鐵道、又人力車など通ふにも、上の新道を行くのであつて、此舊道を突切れば、萩の林に狼の尿こそ見ゆれ、ものの一里半ばかり近いといふ、十年の昔といはず、七八年以前までは駕籠で辿つた路であらう。

舊より恐るゝ處にあらず。

娘は豫て聞いて來た、近道をするつもり、峰の松を目的に、此方の道の分れ口、一むら薄立枯れて、荒野の草の埋れ井に、朦朧としてイむ如き、双の影ありと見えたるにも、猶豫はず衝と寄つた。

「ほうい、兎かと思つた。吃驚すら。」

「何だ、人間か。」

濁聲齊しく、じろりお鶴に眼を注いだ、霧はなけれど、ぼやけた奴等。其むら尾花の蔭に二臺、空腕車を曳きつけて、踞んで、畜生道の狛犬見るやう、仕切つた形、睨み合つて身構へた、兩人とも背のすんぐり高い、大約恰好五十ばかりで骨組の逞ましい、巖丈づくりの、彼是車夫。

お鶴も思ひがけなかつたか、ぴたりと草履を霜に留めて、透かして差覗くやうにした。尾花は自然の傍示杭、アノ山越えて來いやんせ、此谷辿つて行かしゃんせ、と二筋道へ枯残る。車夫は新道の葉かげから、故道の穂すれに立つた、お鶴の姿をきよろゝと、ためつ、すがめつ。

紫かわ



「よう、合の子だな。」

「目が黒い、髪も黒いぞ。」

「フム。」

「神巫のやうな娘ッ兒だ。」

一人、膝頭と向う脛、露出した間に堆い、蜜柑の皮やら實まじりに、股倉へ押込みながら、苦い顔色。

「彼の兒、彼の兒、姉え。」

と呼びかけられ、ぱつちりとした目を睜つて、豊かな頬を傾けたが、くつきりとした眉のあたり、心懸りのない風情。

他の一人が是をうかゞひ、

「へ、べらぼうめ、慌てやがつて、蜜柑を咎めに來たのぢやねえや。」

扱は盗んだものさうな。

「喃、姉え、此方にも一ツ遣らうか、は、正直に黙つて居ら。」

「彼の兒、此方へ來や、一寸來ねえ、好い相談があるが、何うだ。」

四

「何だ、蜜柑を遣る。恚う死んだ小兒でも思ひ出したか、詰らねえ後生氣を起しやがるな、打棄つて措けといふに、やい。」

「うんにや、後生氣處ぢやねえ、此處一番といふ娑婆ッ氣だ、傳九。」

とすくくと鬚の生えた、山猫のやうな口を突出し、相手の耳に囁くと、傳九と呼ばれた一人は、歪めて聞いて居た面に、以ての外な、ニヤリと笑む。

「な。」

「然うか、う、然うか、面白かんべい、へ、へ、へ、おい、姉え。」

「待ちねえ、待ちねえよ。」

薄の霜に入残る、有明月の消え行く状、覗いて居る顔が彼方へ、茅萱の骨に隠れむとした、お鶴は續けさまに呼び留められ、敢て危む様子もなく、

「あい、私。」

「お前だ、お前に限ることだ、なあ、雲平おぢい。」

「まあ、姉え、一寸來ねえよ。」



雲平なるもの、板昆布のやうな袖口から、眞黒な手を出して、圖太く浚へ込む形で手招く。  
「何さ。」

と聲も氣も輕う、衝と身を反して歩を向けた。胸に當てたる白布には折目正しき角はあれど、さばいた髪かみのすら／＼と、霜枯すゝきの葉はよりも柔順。

「よう、妙な扮装だぜ。」と雲おぢい、更めて熟々視める。

「だから神巫見たやうだといふのよ。」

「己ら又、柱曆の繪に描いた、倭武尊様かと思つた奴さ。」

悠悠として、搔かいはだけた、膝の皿さらに牛蒡の脰ひぢで、憎躰な頬杖ほづゑなり。

雲おぢい、蒼瘧あせぢかと、刺青の透すいて見える、毛だらけの脇腹わきばらを、蜜柑の汁しるの黄きばみついた五本の指ゆびで無意味むいみに搔かき、

「時に姉え、お前、何處だ。」

「熱海なの。」

「は、御花主場だ、餘り見かけねえ。」

「車夫さんは小田原？」

と、めりはりが判然はつきりして、人見知りひとみしりはせず、愛々あい々しい。

傳九でんく頷うなづき、

「圖星づぼし々々。」

「其の圖星だ、一番きゆうと極めてえもんだ。」

「先づ、じらす内うちが樂たのみよ。」と蜜柑みかんの皮かを擱つかんでは、ほた／＼と地板ぢひたへ打ぶ附つける。

お鶴つるは何なんの氣きもつかず、

「私は海岸かいがんなの、をぢさんたちは、お客様きやくさまを送おくつちや町の旅籠はたごやの方ほうへばかり行くんでせう、だから知らないんだわ。」

雲おぢい頷うなづいて、

「成程なつ、可いわえ、それぢや水心みづこころありの方ほうだの、恚がう、姉あねえ、而そしてお前めま何處どこへ行く。」

「小田原。」

「何が小田原、」

「相談さうだんは極きまつてら。」

目めを見合みあはせて北叟ほくそ笑わらみした、傳九でんく、更あらためて、面つらを捻ねぢ向け、

「え、姉あねえ、些ちとんべい、お前めまにの。」

「己達おらたちが頼たのみてえ事ことがあるだ。」



「素直に肯かねえぢや不可えぞ。」  
お鶴は涼い目を下ぶせに、真中にすらりと立つて、牛頭馬頭のやうな御前立を、心置なく瞰下しながら、仇氣なく打傾いて、

「頼みッて？」

「應、姉え、お前の胸にあるものだ。」

「此處へ打ちまけて見せて呉んろ。」

といつて傳九郎上目づかひ、

「慙う姉え、知つてるか、丁度お關所にかゝる此の道の岐れる處は、此處ン處だ。つい今年の三月、熱海へ奉公に出て居つた、お前ぐれえな新造かの、親里の吉濱へ、雛の節句に歸るッて、晩方通りかゝつての、絞殺された處だぜ、なあ、おぢい。」

「然うよ、恐ねえ處よの、何でもいふことを肯かねえぢやあ。」

丁か半か

五

「へい〜へい、何旦那一寸其の、洒落に遣りましたばかりなんで、へい、大した天下を望むやうな謀叛を起したではござりやせん。」

雲おぢいは眩ゆさうな顔をして、皿の兀げた天窓を搔く。

「全く以ちまして、娘ッ兒をどうの慙うの。私等ア御覽なさりやすとほり、いゝ年紀でござりやす。」

傳九郎は揉手でびた〜お辭儀する。

二人の車夫を屹と見ながら、お鶴を庇うて立つたのは、洋装した一個中脊の旅客であつた。

濃い藍の鳥打帽、厚い毛皮の外套を、襟を立てて、顔の半ばから膝の下。鼠のすぼんの裾が見え、樺色の靴を穿き、同一色の皮手袋、洋杖を軽くつき、兩個の狼を前にしつゝ、自若たる其の

風采、恰も曲馬師の猛獸に對する如く、綽々として餘裕あり。

時に眞鶴の山中は、當世風の扮装した一の這個旅客を得て、はじめて湯治場へ行く道の、熱海街道となつたのである。はじめ、其の山、其の岩、其の霜、蜜柑畑も枯薄も、娘の姿も車夫の状

も、浮世に遠き趣ならずや。

紫かわ

「洒落にしろ宜くないな、黙つちや通られん洒落ぢやないか、亂暴な事をする、可哀相に。」

といひかけて、半ば隠れて顔は見えぬが、在原業平の目かづらかた俤で、あとなる娘を顧みた。



薄日は射したが未だ融けぬ、道芝に腰を落して、お鶴はくの字形に手を小石。親まさりの爪尖尋常に白脛を搦んだま、衝と横に投出した、肩胛の處々、黒土に汚れたるに、車夫等が亂暴のあとも見えて、鈴かと思ゆる目は清しく、胸のあたりに張はあるが、落膽り疲れた様子である。けれど、さして心を傷めた趣のあるにもあらず、茅花々々土筆、摘草に草臥れて、日南に憩つて居るものと、大なる違はない。

自分が手籠めにならうとしたのを、折よく來懸つて扶けて呉れた、旅客に顔を見られたが、直ぐにとかうの口も利かず、鬼に捉られた使の白鳩、さすがに翼を惱めたらしう、肩のあたり、胸のあたり、黒髪も打揺らぐは、朝風のさそふにあらず、はずんで呼吸をつくのであつた。

「此奴等、眞個に悪い洒落だ。

又咳くが如くいふ。

傳九郎苦り切つた面を上げ、

「でも其の全く、へい、洒落に違ひはござりやせんので、なあ、おちい。」

「此奴が申し上げる通りでござりやす。」

しり込みするのを右瞻左瞻、

「む、まあ然しお前方、素直に然うやつて、折れて呉れて、お互に幸だ。

朝とはいつても全然、恚うやつて、前後に人通りのない山路だ、風體の悪い……おい、悪く聞くな。」

「へ、へ、へ、どういたしやして。」

と雲おちい、膝に手を置いて突出した、臀へ頸を捻ぢ向けて、己が風體をじろりく。

「大の男が二人懸りで、此の娘さんを押伏せようとして居るのを見ちや、旅空の鳥だつて、黙つて見ては通られないから、私も夢中で飛込んだが。」

然しだ、朝ッぱら口あけ仕事の邪魔をする、疊んで仕舞へ、とか何とかいつて、むきになつてかゝられて見たが可い。

別に又武者修行でも來れば可し、然もなけりや私だつて、お前たちにや一人にも敵やしない。一堪りもなく谷底へ投られるんだ、なあ、おい、そんなもんぢやないか。」

今度は傳九郎が、

「どういたしやして、へ、へ、へ。」

六

「處を、清く、恐入つて呉れたといふもんだから、双方無事で、私も大に技倆を上げたが、いつ



て見りや、こりや、お前方のお庇だよ。」

上衣の肩の動くまで快げに打笑ひ、

「就てはお前達が、洒落だといふ、其の洒落が、些と何うにか、ものなる相談をしようと思ふが、一體何の洒落かね、恚う見た處、何うも満更、此の娘さんを手籠めにしようとしたやうでもないな。」

いはれて雲平、

「旦那、綺麗な姉さんにや姉さんでござりやすが、から孫見たやうなものを捉えて、色氣で、何う恚うといふわけぢやなかつたんで。へい、實は、少々御法度の、へい、手慰みを遣らかして居りましたんで。」

傳九郎も漸々窮屈さうな腰を伸した。

「ほんの出来心なんでござりやすよ、此節は、人車鐵道が敷けましたに就いて、此方人等、からつきし仕事と云つてござりやせん。」

處が昨日珍らしく、箱根から熱海へ廻らうといふ二人、江戸の客人がござりやして、此のおぢいと棒組で、恚うやつて二臺曳いて参りやした。

小田原を昨日八ツ時分に出ましたんで、熱海へ着いて、對孝館へ送り込みましたが、昨夜、も

う十二時頃。

五兩と三兩纏つた、穀の代を頂いたんで、此處で泊込みの、湯上りで五合極めた日にや、懐中も腕車も空にして、土地へ歸らなけりやならねえぞ。何うせ戻り腕車はねえんだで、悪くすると、お客をのせて山越を、えッちら、おッちら、此方人等が分際で、一晚湯治のやうな寸法になりさうだ。一番このまんまで引返せと、へい、おぢいも氣が合つて、其處で、もし。

一膳めし屋で腹を拵へて、夜通し、旦那、がらく石ころの上を二臺、曳摺つて、夜一夜山越しに遣つて來やしてね。明け方丁度此處ン處まで参りやすと、それ、旦那。」

と谷の方を瞰下した、雲おぢいも齊しく其方を。

旅客は却つて、娘を一寸見たのである。

「お關所でござりやせう、里心といふんぢやねえんだが、妙てこに昔懐くしなりやしてね。」

「へい、私等、恚う見えて、へい、何も見得なことはござりやせんが、是で昔の雲助でござりやす。息杖で背後へ反つくり返るのと、楯棒を握つて前のめりに屈むんぢや、から、見た處から役割が違ひやさ。

紫かわ  
あゝ、あゝ、此處ら、一面に、己達の巢だつたい。東海道は五十三次、此雲助が居ねえぢや、繪にも双六にもなるんぢやねえ。いざ、道中となつた日にや、お大名でも、飛脚でも、品川から



忘れねえのは、富士の山と、お關所と、大井川と雲助かい。

女づれの遊山旅に、桔梗一本折ればといつて、駕籠を昇いだおぢさんに渡りをつけねえぢやな  
ぢなかつたに、名物の外郎は、偶にや覺えた人があるか、清見寺の欄干から、葦山の虹を見たつ  
て、雲助を思ひ出す後生願は一人もねえ。

ものの三十年と經たねえ内に、變れば變る世の中だ。どうだ傳九、此の、お關所あとを見るに  
つけ、ぼけた金時ぢやあるめえし、箱根山を背後に背負つて、伊豆の海へ巖端から、ひよぐるば  
かりが能ぢやあるめえ。丁度尾花の背景もある、牛頭馬頭で眼張りながら、昔の式を遣つて見べ  
いと、

「おぢいと言ふのは私の圖星。其處で旦那、共喰の手慰み、鐵拐博奕を切ツつけやした。なんこ  
から狐になつて、はたいた方が愚に返つて、とう／＼ね、蜜柑の種を勘定しながら、地體お星様  
は丁か半か、とあけ方の天井へ、一服吹かして居ります處へ、ひよつくり、其の姉さんが來たん  
でね。」

七

おぢい傍から引取つて、

「え、旦那、つい串戯に、一番驚かして呉れようと、おう、姉や、とそれ、雲助聲を出しやし  
たが、褌折笠に竹の杖、小袖の上へ浴衣を着て、緋の禪にもつれながら、花道を出ると違つて、  
方なし、おどかしが利きやせん。

權現様の出開帳に、お寺の門によたれて居る、躰ほどにも思はねえか、平氣で、私かいつて傍  
へ來るだ。」

「雲助の御威光、恚うまでに衰へたか、と餘り強腹だから、些と凄味に、厭だと吐かしや、と押  
被せて、それから、もし、あの胸にかけて居やす、其の新しい苞の中をね、開けて見せろつて申  
しやした。」

守護のやうに、ちゃんと斜めにかけて居るのを、旅客は又此の時顧たのである。

と同時に、お鶴も俯向いて熟と視めた。

「旦那、これが其の申上げた洒落といふんで、實は、おぢいの思ひつきでござりやしてね。」

「へい、」

「苞からボンと出た處勝負、ものは何でも構はねえ、身ぐるみ賭けると、おぢいが丁で、私が半。」

「姉や、恚う開けて呉んねえ、といふと旦那、てんづけ頭をふるんでさ。べらぼうめ、何處だと  
思ふ、場所が場所だに己達だ。」



汝、其の、胸を開けて、出来立ての乳首を見せろ、といふ難題だつて、往生しねえぢやならねえわ。苞に入れたは何だか知らねえ、血で書いた起請だつて、さらけ出さずに済むものか、と立身上りで、じり／＼寄つて行きますとね。」

「旦那、魅込まれたやうにあとびつしやりをしながら、厭だ、神さまへお初にお目にかけるもんだから、途中で開けることはならないつて申しやす。」

「親にも見せねえ膚だつて了簡をするもんか、一體其中ア何だつて聞きやすとね。」

「茄子よ、と吐かすだらうぢやござりやせんか。」

人をつけ、如何に陽氣が陽氣だつて師走空に茄子があらうか、小馬鹿にしゃがる。」

「慣氣としゃした。其處で旦那が、御覽じやした通りの體裁、や、抜けつ潛りつ、こやの輕いのにや飽倦ツちやつて、二人とも大汗になつて、ト、打擱へ、掛けたのを外しにかゝると、俯向けに倒れながら、未だ抵抗ふ氣だ。二人が手と其の娘の手先と、胸で指相撲のやうな騒ぎの處へ、旦那が割込んで來なすつたんでね。」

「なあ、おぢい、」

「然うよ。」

といつて頷いたが、

「大したゆきさつぢやございせんがね、根が其れ、昔の懐しさに、雲助の式をやつつけた處でござりやすで、いきなり、曲者とか、何とかいつて、旦那がギツクリとおいでなさりや。」

「最う彼是三十年以來といふもの、もがりも、ねだりも、勾引も、引落も何にもしねえ。戸籍檢べのおまはり様によ、這出してお辭儀をして、名前の傍に生年月、日までを書いてある親仁だけれど、此の山路に對したつて、黙つちや引込まれねえんだ。」

「函根の大地獄が火を噴いて、蘆の湖が並木にでもなるやうなことがあつたら、もう一度、焚火で秋刀魚の乾物を焚いて、往來へ張つた網に、一升徳利をぶら下げようと思はねえこともねえんでね。」

「たかが、今時のお前さん。」

「醫者だか、學者だか知らねえけれど、疊むに仔細はねえんだが。」

「野暮はよせ、金子にせい。」

「(金子だ、金子だ。)ツてのツけから、器用に捌いておくんすつたで、こりや、もし。からりと笑つて、

「私等の氏神様だ。」

「へ、へ、南無大明神でいらつしやる。其處で、ひよこ／＼、それ恠様に、」



トひよいと頭を下げた、小田原無宿の太々しさ、昔の状こそしのぼるれ。あら、面白の街道や。

室 咲

八

「危いこと！姉さん、もう些とで、賭博の賽ころにならうとした。」

旅客は娘に引添うて、横から胸を抱くやうに、美しい手袋で、白い前掛を拂ひながら、親身の妹に語る如く、

「眞個に、危いぢやないか。あんな無法な奴等だから、それこそ、谷底へでも投げ出されて見たが可い、丁も半もあつたものか。姉さんの此の星のやうな綺麗な目が、飛出してしまったらう。」

身體が大事だ、どんな家だつて、財だつて、自分にかへられるものはない、分つたか。」

「はい。」

といったが小さな聲、男の腕に肩をもたせて伏目に胸に差俯向く、お鶴は此の時立つて居た。

日の光は、あからさまに根の見ゆる、草の中へ淡くさして、枯れてしげれるむら薄は、燈火の影ぞと見ゆる、薄くれなるに包まれたが、二人が立つて背にした、山の腹は、暖かく照らされて、

其處に實つた黄金の枝は、露に蜜柑の薫を籠めて、馥郁として滴る氣勢。

朝晴の蒼き大空は、軽いが頭に近いやう、彼方にごろ／＼と音がして、黒きかたまりの緩やかに畝り／＼、遠ざかり行く、車、雲助、其の行くあたりちら／＼と、白い雲の動いて見ゆるは、狭間に漏る、青海原、沖に静な鷗の波。

「さ、最う可い、最う可い。」

旅客は腕車を見送りながら、お鶴の塵を拂つたあとを、背一つ撫でて離れ、

「怪我はせんか、何處も痛みはしないかな。」

「はい。」

とや、判然答へて、お鶴はむっくりした清らかな腕を、頬に押當てる姿して、倒れた時の土を見た。

爾時まで、雲助どもの亂暴を、打腹立つて拗ねたる状、此の救ひ人に對してさへ、我まゝに甘えて曲るか、抄々しく口も利かずに居たのであつた。

腕を曲げたまゝ、腫をくるりと、花やかに旅客を見向き、

「何處も何ともないのよ。」

「其の手は。」



外套の襟の上に、凛々しい眉を顰めていつた。

「否、痛みはしませんの。私、だつて、私、突倒されたんですもの、口惜いわ。」

急に唇を屹と結び、笑くぼを刻みながら涙を堪へて、キリ、と鳴す皓齒の音。

旅客は洋杖を持った手を擴げて、案外、と瞻つたが、露に濡れたら清めてやらう、と心で支度を  
にする體に、片手を衣兜に、手巾を。

やがて、曇は晴れたのである。

涙の名残は瞳の艶、莞爾と打微笑み、

「二人とも強いんですもの、亂暴ツちやありやしない。」

「いや、お前の方が亂暴だ。道理こそ、人殺とも、盗人とも、助けて呉れとも泣かないで、争つて居たつげが、お前、それぢや、取組み合ふ氣で懸つたのか。」

「はあ、喧嘩したんです。私、喰ひついてやつたり、引掻いたり、一生懸命だつたんです。でも負けたわ。」

と勇ましくいひかけたが、フト其のお轉婆を極りの悪さう、お鶴が面はゆげに見えたのは、案内記には記さぬ不思議。

故とたしなめる口ぶりで、

「當前だな、途方もない。」

「でも、然うしないと、無理に、あの、其の苞を。」

其の苞は、此處に此の娘の胸に、天女が掛けた羯鼓に似て居た。

「捕られて、中を見られるんですもの、あんな奴に見せるのは厭。」

「だから、だから今然ういつて聞かしたではないか。」

どんな大事のものだつて、身體と取つかへこにしてなるものかな。

このさきもある事だよ。」

九

「はい。」

とばかり不承不承、返事も恩人なればこそ、承けひく氣色は些ともない。

旅客は再び、差寄つて、

「よ、眞個に氣を着けなよ。」

今の車夫も然ういつたが、お前何か、其を持つて小田原まで行くんだといふではないか。

氣にかけないものだといふと、瞽女が背負つた三味線箱、たとひお前が藁づつみの短刀を、引



抱へて歩いた處で、誰も目をつけはしないもんだが。

然うやつて、人に見せまい、必ず手をつけさすまい、と秘して居るだけ、途中何となく氣が寄つて、まあ、魔がさすともいふものか、思ひがけない邪魔が入る。

又此の前、どんな事で、誰が見ようとしないうも限らない、——其時だ。

今のやうに、身體で庇つて、飛だ怪我でも爲ちや不可ん、氣をつけるんだよ、屹と、可か、分つたかね。

熱心に教へながら、お鶴の姿を左から、右へぐるりと一廻。

其の歩行く方へ瞳を動かし、ぱちり音するかと二ツ三ツ瞬いて聞いて居た。

「ぢや、あの、見せろつていひましたら、出しても可くつて？ 貴下。」

「可からうとも。」

「神様に見せない前に。」

と口早に附け加へた。

「神様に。」

「え。」

其顔を上げた時、はらりと顔にこぼれかゝる、髪の毛を、指に反らして拂ひ、

「孔雀見たいな、あの、翡翠見たいな、綺麗な鳥が来て、種をこぼして行きました。

小田原の神様が、おとつさんに、拵へろつていつたんですつて。

ですから、あの、これは神様のものなんでせう。」

見詰めつゝ、いふ氣構に、逆はず打領き、

「然うか、神様のものか。む、而して、苞の中は茄子だといったが、眞個かい。」

「は、お初穂を上げに行くんです。あの、これが小さな、紫色の苗になりましたから、白髪のおとつさんが、あのね。」

死んだおつかさんが着て居ました、桃色の切だの、淺葱の切だの、いろ／＼組合はしたちゃんちやんこを着ちや、背戸へ出て、十國峠へ日が昇るの、大島へ月が入るの、幾度見たか知れないの、丹精して出来たんですもの。

をかしくツてねえ。だつて鳥の羽見たいな五色のを被て、おとつさんは、種を持つて来た神使鳥のやうぢやなくツて。

それから今度、おつかひに持つて行く、私だつて……何なのよ。

過日ツからお精進をしたんです。今朝は、髪を洗つて、あけ方お湯を貰つたんです。すつかり身體を清めて來ました。」



然らぬだに此の風采を、況して、世に、慙くまで清き媛やある。  
旅客は恍惚、引入れらるゝ状であつた。

「それを、それを、あの、だつて、大事にして見るんなら、未だ何ですけれども、賭博の目に、よまうツていふんですもの。」

私、殺されても見せないんだわ。」

しばらくして面正しう。

「尤だ、至極其の筈だ、成程。」

昨日通りがかりに、小田原の鎮守の社へ、参詣をして来たが、御城の石垣の白いのが、鶴の巢籠のやうに見える。森として、神寂びた森の中の、小さな鳥居に階子をかけて、がさり、かさこそと春の支度だらう。輪飾を掛けて居たつけ。

神主の其の顔が、大な猿のやうに見えて、水干烏帽子を着て居たのが、何となく神々しかった。誠は神に通ずとやらいふから、大方神様の方でも、姉さん、お前の行くのを待つておいでなさるんだらう。けれどもだ。」

日は又かかげつて尾花白く、薄雲空に靨々く見ゆる。

十

「小田原の神に、靈がおあんなされば猶の事、捧げられる供物、お初穂が、其の品物のために、若い娘の身に、過失のあることをお望みはなさりはせん。」

喃。

と再び肩に手を。

「こんな可愛い姉さんにするまでに、第一お前のお父さんの、丹精を思つて御覺……幾歳だ。」

「六。」と低聲である。

「六？十六か、それまでにや、それこそ、其の十國峠に日の出るの、大島に月の沈むのを、幾度見たか知れやしない。」

佳い兒だ、いふことを背いて、身體を大事にしなけりや不可よ。眞個だ、遙々使に來て呉れる姉さんを、小田原のお宮でも、どんなに御心配だか知れやしない。」

背搔い撫でて、もの優しく、

「分つたか。」

「はい。」



旅客は勇んで口輕に、

「佳い娘、佳い娘。」

「ぢや貴下。」

「む。」

「もしか、あの、今度のやうな事がありましたら、出して見せても可くつてね。」

「可いともさ。」

「なに、それでは貴下のおつしやることは、神様の心とおんなじなの。」

「同一だとも！」

お鶴は何かいそ／＼して、

「だから私が酷いことされようとした時に、助けに来て下さつたんだよ。神様ねえ、神様ですねえ、貴下は。」

と、つか／＼と擦り寄ると、思はずたじろいで退つたが、

「あ、神様だ。」

いつた聲に力がこもつて、ついた杖の尖が幽にふるへた。娘のための方便ながら、勿體なくや思ひけむ。唯見ると臉に色を染めて、慌しげにいひ直した。

「お前にだけは神様です。」

「ではね、途中で又誰かに捉まるとね、今度は私、素直に見せて遣りませう。」

それでもね、あの、お宮様へ行かない前に、他所の人に見せるのは口惜しいんですから、私、貴下にお目にかけるわ。」

とて、直ぐに手を、胸なる苞の兩端へ。

「お待ち、待て／＼。」

急におさへたが、黙つて、しばらくして、目の色が定まつた。

「見せて呉れるか、ぢや、見よう。熱海の公園は咲いたらう、小田原でも苔を見た、此の陽氣。年内から最う春だ、夢に見てさへ可いといふもの、どれ。」

手中を引出して、根笹は浅く霜をのせたが、胸に抱いたら暖かさうに、又ふツくりと日の當る、路傍の石一個、滑らかな面を拂うて、其ま、はらりと、此方へとて。

浅葱の紐は白い頸から、ふさ／＼とある髪を潛つて、苞は両手に外された。既に其の白魚の指のか、つた時、雪なす衣の胸を通して、曇りなき娘の乳のあたりに、早や描かれて見えるやう。

「可愛らしくツて、綺麗ですよ。」

薄紫の花一輪、紅の珊瑚に、深みどりの、海の色添ふ小さな枝、實は二ツついたりけり。



旅客も杖をたてかけて、さしむかひに背を屈め、石を搔抱くやうにして、手をついて實を視めたが、眊を返して近々と我を迎ふる皓齒を見た。あはれ、茄子、二ツ、其の前齒に、鐵漿を含ませたらばとばかり、たとへむ方なく藤長けて、初々しく且つ媚しい、唇を一目見るより、衝と外套の襟を落した。美丈夫と艶なる少女は、ふと飛立つやうに身を起した。娘の髪にも旅客の肩にも、石の上なる貢にも、ひらりと射したは鳥の影。仰いで空を、赫として何にも見えず、お鶴耳許、まぶちのあたり、日は紅に燃ゆるやう。

十一

轟々と音がして、背後の山の傾斜面を、途端に此方に來るものあり。罪を鳴らす鼓か、と男は慌しく其方を見た。あらず、人車鐵道の、車輪隠れて、窓さへ陰、單、橙色に列つた勾配のない屋根ばかり、するくと曳いて通る。それが蜜柑の木の間。然も會社が何週年かの祝日にやあたりけむ、怒る山路に、ひらめく旗、二人の方にそよくと靡いて、天麗かに祝へる趣。と見る／＼頂から下り道、眞鶴あたりの樹立の梢、目の下の森をさして、列車は颯と逆落し、風に綾ある紅、白、蒼、いろ／＼の小旗の瀧津瀬、ひら／＼と流る、狀して、青海さして見えな

くなる。

娘は其を見送るやうに、眞うしろに舊來の方、男に背を向けてぞ立ちたる。

扱て旅客は、手づから包を舊のやうにして、靜に提げてお鶴の傍へ。

黙つて背後から、密と其の頸にはめて遣ると、苞は揺れつゝ、舊の通りにかゝつたが、娘は身動きもしなかつた。四邊には誰も居ない。

唯視むれば、其の淺葱の紐が、丈なる髪を、肩のあたりで仕切つたので、亂れた手絡とは風情異り、何となく里の女が手拭を掛けたやう、品を損ねて見えたので、男は可惜しく思つたらう。

手袋の一ツをはづして、手を、娘の、鬢の下に差入れた。おのづから得ならぬ薫、襟脚の玉暖かく、衝と血の湧いた二の腕に、はらくと冷くかゝつた、黒髪の末艶やかに翻り、遮るものはなくなつた。これにも娘は熟として、柔順に身をまかせて居たのである。

「ぢやあ、氣をつけて行くんだよ。」

「貴下は熱海へ行らつしやるの。」

「あゝ、然うさ。」

「今の人車だと譯はありはしませんのねえ。歩行いて行つては大變ですわ。」



「否、車なんか危なつかしくツて不可ません。ずん／＼駈け出して行つて来るの、何とも思ひはしませんよ。」

「私も實は人車はあやまる。屋根が低いのに揺れると来て、此の前頭痛で懲々したから、今度は歩行くつもりで、今朝小田原からたつて来たが、陽氣は暖かだし、海端の景色は可し、結句暢氣で可い心持だ。しかし私は片道だが、お前は向うで泊るのかい。」

「あの、おつかひをして、直ぐに今日歸るんです。」

「雜と行きかへり十四五里、然も此の山路を、何だか私は、自分の使ひにでも遣るやうで、氣の毒でならんのだ。」

娘は嬉しさに……何にもいはず。

「しかし、神ごとだといふんだから、今の雲助とは譯が違つて、金銭づくでは仕方がない、ぢや、これで別れるよ。」

「……………」

男は再び、深く外套の襟を立てた。

「御苦勞だな。」

と支いたる洋杖、踵を返した霜路の素足、靜に入れ交つて、北と南へ。

「お。」

心着いて旅客は又、うなだれて行く娘を呼んだ。

「一寸お待ち、大切なことを忘れた。折角、其の珍らしい、めで度いものを見せて呉れたに、途中だ、禮の仕やうがない。心ゆかしに是れを上げよう、これでも此處らに散ばつた落葉朽葉よりいくらか増、志は松の葉だ。」

さあ、手帳がある、それから鉛筆、これはね、お前の胸にかけたものと、同一紫の色なんだから。」

渡すを、受ける、熟と手を、其のまゝ前垂の胸に入れて、つツと行く白い姿、兎が飛ぶかと故道へ。此方は仰ぐ熱海の空、颯と吹く風に翻つて、紺の外套の裾が煽つた。

ケ、コッコ——鈴に響く鶏の聲、浦の苫屋か、峠の茶屋か。

## 日金嵐

### 十二

紫かわ

「へい、夫人、眞平御免下さりまし、へい、唯今は。」



毛は黒いが額は禿げ、面長な、目は圓く、頬の肉は窪んだけれども、口許に愛嬌ある、熱海の湯宿伊豆屋の帳場に喜兵衛といつて、帳面とともに古い番頭。

唯按摩が御用を聴く形、片手を廊下へ、密と障子。

中は八疊に寢床を二ツ、く、り枕の傍には、盆の上に薬の瓶、左の隅に衣桁があつて、こゝに博多の男帯、黒縮緬の女羽織、金茶色の肩掛など、中にも江戸褌の二枚小袖、藤色に裳を曳いて、襲ねたまゝの脇開を、夜目にも燃ゆる襦袢の袖、裾にもちらめく紅梅に、ちらりと白足袋が脱いであり。

其のうしろなる襖の繪の、富士の遠望に影を留めて、藻脱の主は雪の膚。空蟬の身をかへてける、寢着の衣紋緩やかに、水色縮緬の扱帯、座蒲團に棲淺う、火鉢は手許へ引寄せたが、寢際に炭も注がなければ、尉になつて寒さうな、銀の湯沸の五徳を外れて、斜に口を傾けたるも旅の宿の佗しさ也。紫紺の紐は胸にあれども、結ばず、緋の書生羽織を被つたやうに引かけた。厚衾二組に、座敷の大抵狭められて、廊下の障子に押つけた、一閑張の机の上、抜いた指環、黄金時計、懷中ものの袱紗も見え、體温器、洋杯の類、メエトルグラス、グラムを刻んだ秤など、散々になつた中に、しなやかに肱をついて新聞を読む後姿。

稍傾けたる丸鬚の飾の中差の、鼈甲の色たらくと、打向ふ、洋燈の光透過つて、顔の月も映を見向き、

「番頭さん？」

「へい。」

お辭儀、つい目の前に居られたので、向うへ頭を下げるゆとりがなく、顔を引込めて手を支いた。

「さあ、お入んなさい。今日は又何うしたのか、大變に寒いね。」

と火鉢の上に、白やかな手を翳した。

「何うも此の、日金嵐が参りますと、熱海は難でござりまする。まあ、夜分になりましたから可鹽梅に風も些と凩ぎましてござりますが、朝ツからの吹通しで、其處等へ針がこぼれましたやうに、ちくくいたしますでござります、へい。」

つきましてでござりますが、え、夫人、唯今はどうも、飛だお騒がしう、嗚まあ吃驚、お驚き遊ばしましてござりませう。いや、飛だ事で。」と些と澁面。

令夫人、手を揉みながら婀娜に肩を震はして、



「まあ、閉めて此方へお入りなさい。」

「それでは御免を蒙りまして、や、こりや、お火が足しなうなりました。」

ぼん／＼ぼんと手を拍つ。早や初夜過ぎの寂として、四邊へ響いたが返事がない。

「最う可ござんす、床を取つて了つたから。何ね、炭を繼がう／＼と思ひながら、つい懐手をすると不精になるんです。急に寒いもんだから恐しくいぢけて了つて。」と火箸を取つて品よく微笑む。

「嗚お身體に障りませう。時に。」

中腰で四邊を响し、

「旦那様はお風呂でござりますか、お鹽梅は如何で入らつしやいます。」

「どうもね、恙う寒いと直に障つてなりません。つい今しがた蒸湯へおいでなさいました。大方今夜は一晚でせう、咳が酷くつて、寝られないで困りますよ。」

と、しめやかにいふのであつた。

「ですが一番宜しいさうで、旦那様のやうな御病體は、是非其の、蒸湯に限ると申します。しかし地の下の穴藏のやうな處でござりますで、猶の事、吃驚遊ばしたでござりませう。何しろ、大地震でござりますから、いや、はや。」

十三

「眞個に、騒ぎだつたのね。」

夫人は落着いたものいひやう。

喜兵衛番頭、せき心で口早に、

「だつたの、なんのとおつしやつて、熱海中引くりかへるやうな大事、今にも十國峠が、崩れて来るか、湯の海になるかといふ、豪い事でござりました。貴女様、夫人は。」

「私は何うもしやしなかつたよ。」

「何か早や夢のやう、此の世のことか、前世のことか、それとも小兒の時のことでござりませうか。先刻の今が、宛然五十年昔あつた、火事か大洪水、それとも亂國、戰國時分かと思はれますやうな、厭な、變な、凄いやうな、然うかと申すと、をかしいやうな、不思議なやうな、然ればといつて、又現在目の前にちらついて居りますやうな、妙な心持でござりまして、いや、最う、此の大地震は忘れましても、道具の、出たり引込んだり一件は、向後いくつになりましても、決して忘れますることではござりません、と申しあげます内も、ぞツといたしまして、どうも此の、床の間のあたりが陰氣に暗い。」



喜番、据腰に手を突き出し、眞顔に天井を仰ぎながら、  
「魔の所爲でござりませう、とな、皆が、内々申合つて居ります次第で、へい。  
其處で夫人。」

豫てお聞及びの、あの、崖の總六と申します親仁が許の不思議な一條。」  
これは聞えて居たと見え、

「あゝ、あの、お茄子の事ですか。」

「其の儀、其儀にござりますが、へい、何か見馴れませんが、種をこぼして行つたと申して、熱海中の吉瑞、神業ぢやと、皆が、大抵めでたがりました事でござりますが、扱て怪うなつて見ますと、それが早や魔の業で、種を啣へて來ましたのは、定めし怪鳥、鶴ぢやらうかに手前どもが存じまする。」

一體當地に此の春大地震があると、口を合はせましたやうにいひ出しましたのも、根は其の總六が許の茄子から起りました事。

何しろ、暮の内から御覽の通り、師走の二十日前後に、公園の梅が七分咲きで、日中綿入を襲ねますと、些と汗が出ますくらゐでござりました。

それも當熱海の事でござりますから、然まで不思議とも存じません。畢竟は冬向暖いを取

柄に、湯治に入らつしやりますわけで、土地の自慢とも存じたでござります。

其の内に崖の總六が背戸の畑に、茄子が生えたと申すので、はじめは誰も眞個にはいたしませなんだが、立派に紫の花が咲いて、霜除に丹精した、御堂のやうな蕪束の中に、早や小指ほどなが一體。

茄子殿を一體も、異なるものでござりますけれど、親仁が神事ぢやと申すので、位がつかまして、其の、一體お生りなされた、など見て來たものが申しますで、餘り陽氣違ひぢやが。

一富士二鷹三茄子と申す儀もあり、むかし聖人の代には冬向き出來たものであらう、めでたいと申す内に、御初穂を取りまして、お鶴つて其の親仁の娘が。

はあ、はあ、旦那様も夫人も御存じ。あの鳩のやうな美しい目をした、然やう。手前などへも、手の入ります時は、一寸々々お給仕の手傳ひに参りますが、腕白でな。

其癖、熱海一といふ別嬪でござりますが、から野鳥でござりまして、よく御存じでいらつしやらないで、悪く御串戯をなさるお客様は、目潰しの羽ばたきをされてお怒りなされます。又よく御承知の方は恐ろしく御最良で、あの娘の渾名が通りました、千鳥の一曲、所望ぢやなどとおつしやりまする。

それが、使で遙々小田原の總鎮守、城の森のお宮まで、暮に持つて行つたでござります。十四



五里日歸りにいたしまして、へい、何、そのくらゐの事は、あの娘にやわけなしで、手前どもが朝飯を頂きます時分、もう眞鶴を越して、お關所にかゝりましたといふ話。

これは歸つてから手前どもへ參つた時、きゝましたのでござりますが。え、首尾よくお宮へ獻納いたして、一、此度、何々して奇特の段神妙候、藤原の何某、びたりと判の据わつた大奉書を戴いて、崖へ戻りますと、それから、皆様へお目にかけますといふので、娘がいつも世話になります、湯宿々々の主人の許へ、一ツづ、九軒ばかり、づらりと配りましたのでござります。」

こゝで番頭苦笑一番。

「何處の主人も慾張つて居りますから、大層縁起がつて、つるりと鶉呑。地震の卵と知れてからは、何とも申されぬ心持。」

十四

「中には諺にも申します、一口茄子に食て遣るは可惜もの、勿體ないと、神棚へ上げて燈明の燈心を殖しまして、ほ、う、茄子ほどな丁子が立つた、と大層縁起がつて居たのもありまするさうでござりますが、さあ、それが大地震の前兆だとすると、不氣味千萬。

取棄てようにも、下さうにも、揺れ出しさうで手がつけられませす。然うかといつて、其ま、

にして置けば、それなりに轉げ落ちて、其處から大地が破れるだらうと、愚にもつきませんが氣が寄つて取越苦勞、昇天する蛇玉でも祭籠めたやうに、寝の間も氣扱ひをしましたさうで。

手前主人などは、其の鶉呑みの方でござりましたから、腹の中をくるく廻つて、時々咽喉へつかへると、癩持同然。其度に目を白ツ黒いたして惱みましてござりまする。」

「いかなこつても、ほ、ほ、。」

「へい、否、それでも貴女様、何しろ此の騒ぎをいたさうといふ前兆でござりまするから、風説を眞個にしましたらるは、何でもござりません。

然うかと思ふ、兆を見せて下さつた、天道様の思召ぢや、満更、熱海を海になすつて、八兵衛鯛、理右衛門鱈、鐵藏鯨、正助章魚なんぞに、此方人等を遊ばさうといふわけでもあるまい。

して見れば、此の茄子は、災難よけのお守護だ、と細かに刻んで、家中持つて居りました處もござりまする。

それがと申すと、はじめは瑞祥だと申しましたのを、娘が奉納して歸りました時分から、誰いふとなく、此の春は大地震がある、大地震があるといひ出しまして、手前なんざ、一日に五六度、違つた人の口から聞きましたのがはじまりでございまして。

え、最初、矢張あの竹でござりました。番頭さん、此の頃に大地震がありますツてね、と帳



場へ来て申しますから、何を馬鹿な、と氣にも留めませんで、それから二階の六番へ。

丁度此の上のお座敷でござります、其處へ機嫌き、に参りますると、六十五になる御法體の隠居様。番頭どのや、厭な風説があるの、今湯殿で聞いて來ました、三人が五人、皆大地震があるといつて居られたが、と恚うでござりませう。

へい、否、一向に存じませんが、然やうなことが、と申したものの、些と變な氣になつて、下へ下りますと、暖簾から、内のおかみさんが半分からだを出して居なすつて、喜兵衛や、湯の熱さにかはりはないかい、大地震があるといふから、と屈託さう、些と血の道氣な處、青ざめておいでなさる。

そこへ勝手口から、魚を仕入れて來た金公と申します板前が、大變な風説です、地震の前で海があをつと見えまして、此の不漁なこと御覽じやし、蠣、鮑、鳥貝、榮螺、貝ばかりだ、と大呼吸をついて居ります。

私は肥満つて居るから遁げられぬ、と鍋釜の前で貧乏ゆすり。

處へ、毎朝海岸まで、お太陽さまを拜みに行きます、旦那が、出入りの賀の市といふ按摩と、連立つて歸りました。

門口で分れる時、お互だ、しかし、却つてお前のやうな不具が無事に助かるもんだ、と恚うい

つて臺所へ。

喜兵衛出て見ろ、何と妙な日の色だぜ。

さあ、恚うなると、ガツがあツと、晝夜に三度づつ、峠の上まで湯氣が渦まいて上ります、總湯の沸きます音が物凄うなりましたわ。

氣のせるか、熱湯を引いてあります土間を踏むと、足の裏が焦げますやうなり、魚見岬へ水柱が立つたといへば、誰が乗るともなく、船がすん／＼漕ぎ出して行く、影法師が見えるといひます。

土地の人氣にかゝはるからと、成りたけはお客様に、かくして置くにや置きましたものの、七草が過ぎます時分から、もう、ちらほら、其のために、たつてお歸りになりますのが、手前どもばかりぢやござりません、彼方に二組、……此方に三組。」

十五

紫かわ

「また然うまでにはなさらぬお方も、いざ、といふ時の御用心に、手廻りのものなんざ、御寝な

ります時、枕許へお引きつけ遊ばしてお置きになります始末。

然うでもござりませうか、——先刻の騒動の最中、此の家ならびで二軒さきの玉喜屋の表二階



で、仁王立になつて、ばら／＼、ばら／＼、大道へ品物を投げ出して居た方がござりますさうな。へい。」といつたまゝ、きよとん。

「だつて、地震だつて、恐しい騒ぎだけれど、些とも揺れも何うもしないんだもの。」

喜番、呼吸をつめて、やゝあつて、

「成程。」

といひ、

「でござりますな、其處でござりますな、如何にも揺れはいたしません。又根もない地震に、大地が揺れたり、三階建がぐらついたりしては堪つたものぢやござりません。

けれども夫人、貴女様は、ちやんと此處へ、魂が落着いておいでなさりますからで。

どうして手前などは、そりや地震、と聞いたが最後。

先刻、あの騒の時は、帳場に坐つて居りましたが、驚破といふと、唯くわつといたして、最うそれが、地の底だか、天上だか分かりません。

天窓がぐら／＼とすると、目がくらんで了ひまして、揺れるか、揺れんか、考へて居りますやうなゆとりはないのでござります。

主人は眞先に、戸外へ、鐵砲玉のやうに飛出しました。おかみさんも、匆起きて、突立つた

にや突立ちましたが、腰がふらついて歩行けませんので、大黒柱につかまつて、おしっこをするやうに震へて居ます。手前は、其の、……四這ひに這ひました。

座敷々々のお客人も一時に湧きましてな、一人として静となすつていらつしやつたお方はないので、手前どもにや僥倖と、怪我をなすつた方もござりませんが。

それでも竹、へい、あの粹がった年増の女中でござります。あれは貴女、二階の七番からお膳を下げてまして、丁度表階子の下口へかゝりました處で、ソレ地震でござりませう。ドンと腰を抜きました拍子に、トントン／＼と、一段づゝ俵が轉がつたやうに落ちたでござります。どういふ拍子か、背中を強く擦剥きまして、灸のあとから走るやうに血が流れたんで、二ツに裂けたといふ騒動、尤もひきつけて了ひました、へい、何、別條はござりません。

落膽して、お腹が空いたと申して、勝手でお茶漬を搔込んで居るでござりますが、な。

機會と申すは希代なもので、竹が其の腰をつきます時に、投りましたお膳でござりますが、窓からぼんと物干の上へ飛び出しまして、何と、小皿も箸も、お茶碗なんざ蓋をいたしましたまゝで、お月様へ供へまする體、や、どうも。」

「まあ。」

「あとで大笑ひいたしましたこととござります。先づ手前どもでは珍事が其の位で済みましてござい



ますが、お向うの伊東屋なぞでは、貴女、御夫婦抱き合つて、二階から戸外へお飛びなすつて、大怪我をなさいました方がござります。

何しろ、一時は人の浪が沸きましたやうに、上下へ覆しまして、どどどど廊下を駆けます音がたびし戸障子の外れる響、中には泣くやら、喚くやら、ひどいのは其の顛倒で、洋燈を引くらかへして、小火になりかけた家もござりますなり。

一體何屋の二階から騒ぎ出したとも、何處の内證から、喚きはじめてたとも分りません。

一騒ぎ鎮まりましてから、門口では隣づから、内では部屋々々の御見舞。仲間うち、土地のもの、お客様方に伺ひましても、そら、地震だと、轟となつたのが、丁度九時半、些とすぎ、彼是十時とも申しまして、此の山の取着きから海岸まで、五百に近い家が、不思議に同一時刻。

まあ、豫て大地震がある、大地震があると申して居りましたので、何處か一軒、神棚から御神酒徳利でも落ちましたのを、慌てて地震と申したのが、家から家へ、ものの五分間ともたちませぬ内に、熱海中、鳴り渡りました儀かとも存じまするが。」

十六

「然ういたしますると、東の詰で、山に近い對孝館あたりが、右の徳利一件で、地震の源かとも

思はれまする。

殊にそれ、湯の噴出します巖穴が直き横手にござりますんで、ガタリといへば、ワツと申す、同一氣の迷なら、眞先がけの道理なのでござりますが、様子を承りますと、何、彼處ぢや又、北隣の大島樓が、さきへ騒いだとか申します。

それぢや起因は海の方、なるほど始終、浪が小石を打ツつけます、特別其の音でも聞違へて、それで慌てたかとも存じられますが、またそれにいたしますと、北のはづれの菱屋では、南隣がさきへ鳴り立つたと申しますな。東も、西も、其の通。何でも申合はせたやうに、影も形もない大地震が、ぐる／＼渦を巻いて、熱海を揉みましたので、通り魔の所爲でもござりませうか。

何でも此騒ぎがなくツちや治りません、因縁事とも相見えまして、町をはなれました、寺も、宮も、鎮守の神主殿は、あの境内の大樟へかじりついたと申しますなり、妙蓮寺の和尚様は、裏の竹藪へ遁込みましたと申します。

あの方たちさへ、其の驚き工合、御覽じまし、我等風情が、生命の瀬戸際と狼狽へましたも、無理ではなからうかやうに考へまする、へい。」

「然うですね、餘り物音が烈いから、私は又火事ででもあるのか知らんと思つたよ。」

「え、／＼、火事と申せば洪水のやうでもござりました。中にも稀有な事でござりましたのは、



貴女、萬歳樂萬歳樂と、屋根にも物干にも物凄う聞えます内、戶外通りは何うした譯か。  
づらりと、道具衣服の類。

革靴もござりますれば、貴女、煙草盆、枕、こりや慌てて抱へて出たものがあると見えます。  
葛籠、風呂敷包、申上げます迄もござりません。それから夜具、豫て心得た人があると見えますし  
て、天窓へ被つて、地震の時はと、瓦の用心でござりませう。扱帯がする／＼と曳摺つて居たり、  
羽織がふうわり扉へかゝつて居りますな、下駄、蝙蝠傘、提灯、正しく手前方の前なんぞは、何  
が何う間違つたものでござりますか、大な洗濯盥が轉がつて居りましたわ。

何の事はござりません。右の品々が、山から突抜けに海岸まで、大通りへ、ちり／＼ばらく。  
裏道小町は然もなかつたさうでござりますが、通一筋道は、まるで、諸道具、衣類、調度が押流  
されました體裁、足の踏所もござりませなんだ。

こりや現に、手前、軒下へ出て見ましたが、降つたか、湧いたか、流れて来たか、何のことは  
ござりません、皆翼が生えて飛んで来て、空から雁が下りたと申す形體。

唯今は凄いほど、星がきらついて参りましたが、先刻、其の時は、どんよりして、まるで四  
月なかばの朧月夜見たやうな空合、各自に血が上つて居りました所爲か、今日の寒さに、皆汗を  
搔いたでござります。

あとが哄と笑ひになつて、陽氣に片附けば、まだしもでござりますに、喚いたものより、轉ん  
だもの、轉んだものより、落ちたものより、又飛だもの、手まはり持參で駈出し  
たわ、夜具をかぶつて遁げ出したわ、怪我をしたわ、と罪の重いものほど、餘り其の智慧の無さ、  
斬られた夢を見て目をまはしたやうな外聞でござりますから、誰一人、己が騒いだといふものは  
ござりません、其の二階から飛んだといつた、御夫婦のやうな大怪我は格別。  
大概の打傷、擦傷、筋を違へなどは、内分にして、膏藥も焼酎も夜があけてから隠密といふ了  
簡。

ありやうは手前なども、少々手負。が、遁傷でござりまして、女中どもの前も如何、へい、知  
らん顔で居りまするやうなわけ。

でござりまするから、往來ちり／＼の衣類諸道具、いつの間にやら、半時も經ちませぬ内に、  
綺麗に掃いたやうに無くなりました。誰が取り入れたといふこともござりませんで。

餘り薩張。

最初其の車に積んだら、大八に雑と四五十臺とも覺えましたのが、地震が鎮まりますと忽然で、  
盆踊りのあとぢやござりませんから、鼻紙一枚落ちちや居ず、お祭のあとでござりませんから、  
竹の皮一片見えなくなつて了つたでござりますわ。」



神妙候

十七

「此等は極御用心の宜い方で。なるほど、揺れません地震でござりましたもの、いくらでも荷は出せますが、しかし其の荷物を投げ出して居た方が、白い浴衣を着た、見上げるやうな大入道だつたと、申して、例のどんよりした薄明ぢやござりますし、丁度其の時分、何處からともなく衣類や鞆などが降つた最中、それを見たものが、魔ものぢやと申します。

又た同一時刻に、降つて来る荷物の中、落ちて来る衣類の中を、掻い潜り、溜つた上を飛び越え、浪に乗つて行くやうに、すつと山の手から、海ツぶちまでを、みだれ髪で、丈の小造な、十五六とも見える、女が一人、蝶鳥などのやうに、路を千鳥がけに、しばらく刎ね廻つて居りましたが、唯もう四邊は陰に籠つて、烈い物音がきこえますほど、却つて寂として、駈出したものも軒下に突伏したり、往來に轉んだ切だつたり。

通つたは其の小娘ばかりで、やがて床屋から小火が出て、わつといふ紛れに其れなりけり。何處へ消えましたやら、見えなくなつたと申しますが、いづれな……魔かな。

何でも熱海を搔攪して、一時お遊びになりましたものと見えます。と其の茄子でござりますで。」

「あゝ、それが、」

番頭は一呼吸つき、

「それが、根元と申しますのは、地體此の地震の風説は、師走以來の陽氣から起つたのでござりませう。それとても年内に梅が咲きますくらゐは何とも氣にはなりません、唯、茄子が生つたのは、前代未聞ぢや、と申して、それからの事で。」

特に、小田原へ使ひに參つた娘から聞きますと、それを又、宮で受け取つた神官と申すのが、容易なりません風體。

森々と樹の茂つた、お城の森の奥深く、貴女様、高く上りますのでござりますが、又此の石段がこはれこはれで、角の缺けた工合、苔の蒸しました鹽梅、まるで、松の鱗か、蛇の幹を攀ぢますやうで、上に御堂、是も大破。

お鶴が石壇にかゝりますと、もう遙か奥に、鏡が一面、きら／＼と蒼い月のやうに光ります前に、白丁を着た姿が見えたといひます。

境内は常磐樹のしとりで水を打つたかと思ふばかり、塵一つ葉もなしに、神寂びまして、土の

紫かわ



香がブンとする、階段の許まで参りますと、向うでは、待つて居たといふ形。

希代ではござりませんか。

神職は留守ぢやが、身が預る、と申したのが、ぼやつと、法螺の貝を吹きますやうな、籠つた音聲。鼻から頤まで、馬づらにだぶくした、口の長い、顔の大きな、脊は四尺にも足りぬ小さな神官でござりましたさうな。え、夫人。」と陰氣になる。

夫人は寂しい顔して、袖を掻合はせて、しばらくして、

「まあ、厭ねえ。」

「で其の、廊下から屈んで乗り出し、下から跪いて出しました娘の貢物を受け取つて、高く頂き、よたりと背後むきになりますと、腰を振つてひよこくと、棟から操の糸で釣るされたやうな足取りで、煤けた板戸の罅破れた形の口へ消えますと、やがて、お三方を据ゑて、又よたくと持つて出ましたのが、前申上げました、大奉書で。」

件の(神妙候)は、濃い墨で、立派に書いてござりますさうなが、(藤原何某)と名書の下へ、押しました判といふのが、これが大變。」

十八

「書き判を、恚うの、恚うの、恚うく、恚う！でもござりませんければ、朱肉を眞四角、べたりでもござりません。薄墨でな、ひよろりと掌を一ツ壓しました、是が人間でござりません。」

凡そ嬰兒の今開けました掌ぐらゐる、其の瘦せましたこと、からびた木の葉で、塗りつけました形、まるで鳥で。

然うかと思ひますと又、墨の染んだあとが、然もく、獸の毛で、猿宛然。

見たものの話でござりますが、これを一目の時、震へ上つて、すぐに地震、と轉倒いたしましたさうで、こゝで誰も大地震の前觸を、虚言とは思ひませんやうになりました。

處を日増の暖氣で、其の心持の悪い事と申したら、今日にも、明日にも、今にもと、帯を解いて寝るものはなかつたのでござりまする。

すると、今朝ツからの此の寒氣。峠の霜は針の山、熱海は忽ち八寒地獄、日金がおろして來ましたので、烈しい陽氣の變りやう、今日が危い、と又誰いふとなく、湯殿の話、辻の風説、會ふものごとに申し傳へて、時計の針が一つ一つ生命を削りますやうで、皆、下衣の襟を開けるほど、胸が苦しうござりましたわ。

紫かわ  
其の癖朝の内から蒼い玻璃見たやうな晴天で、昨日も一昨日も、總六が崖の上から、十國峠の上へ三日續けて見ましたといふ、つくね芋の形をした重い雲が影もないので、せめてもの心やり



にしました處、暮六ツ前から、どんよりいたしましたのが、日が暮れると、あの朧、風が小留んだと思ひますと、又少し寒さが戻りまして、變に暖くなる、と氣の所爲でござりませうか。厭にあかりが薄暗くなつたでござります。滅入つて息が詰りさうで、茫乎、手前などは、疊を見詰めて居りました。

其の疊の目が貴女様。

むく／＼と持上つて、疊と消えて、下の根太板が、凸凹になつたと思ふと、きやツといふ聲がして、がらく／＼轟、ぐわツと、早や、耳が潰れて、四ッ這ひの例の一件。

いや、何とも早や異變なことで。」

調子づいて語り果てた、番頭ふと心着いて、

「へ、へ、へ。」

何ともつかず笑つたが、大分夜が更けたといふ顔色。

「しかし、何事もなくツて可い鹽梅だつたのね。」

夫人は、さして退屈らしくも見えなかつた。

「へい／＼、お庇さまで、先づこれで、今夜から枕を高く寐られます。へい、雑と事濟。

恚う又氣が揃つたやうに大地震々々と申しましては、何事かござりませんでは、無事に果てま

すものではないでござります。

は、は、は。」

機會もなしに又笑ひ、

「まあ、まあ、御安心を遊ばして御寢なりまし、と申しました處で、夫人は何も手前どものやうに、些ともお驚きなさりませんのでござりますから、別に。」

といつて、照れ坊主、禿げた處をまつすぐに指で壓へ、

「え、つい其の一月ばかりの屈託が抜けました嬉しさで、貴女様はお馴染の餘り、飛た長話をいたしました。

慌てもの、臆病もの、大寄合のお伽話。夜分御徒然の折から、お笑ひ草にもあひなりますれば、手前飛だ其の大手柄でござりまする。」

「否、まさかとは思つても、過般中のやうな風説を聞くと、好い心持はしませんよ、私も氣になつて居たんです。」

火箸に手を載せ、艶麗に打微笑み、

「おめでたう。」

「へ、へ、へ。」



と手をつき、

「おめでたう存じまする。」

### 御曹子

#### 十九

「ですが地震は唯可い加減な、當推量ぢやあつたでせうが、何なの、崖の總六の娘さんとかが、小田原へ貢物を持って行つて、怪い神主に、受取を貰つて来た、判に獸のやうな手のあとが押しあつたといふのは眞個？」

喜番此の時立ち構へで、腰を廊下へ退きながら、

「え、も、それは貴女様、眞個の事でござりますとも。」

「眞暗な森の中の破れたお堂に、神主は留守だといつて、其の鼻と口と一所にだぶくと突出した大顔の、小さな人……何だか氣味が悪いことね。」

と座敷の三ツの隅を見た、尤も座にした片隅だけは、洋燈を置いて明るかつた。

「全く變でござりますよ。」

「内ぢやお客様が多いから、離れた處で、二室借りて置くけれど、こんな時はお隣が空室だと寂いのね。ほ、ほ、ほ、」

但し自から其の怪みを消して笑つたので。輕からぬ肺病のため、しばらく休養をして居るけれども、正に蒸風呂に籠れり、とあつた、秋山氏は、名高き……縣の警部長である。

良人の職掌に對しても、であるけれども、病ゆるには心弱く、夫人は毎夜、更けて靜な湯殿の廊下を、人知れずお百度といふもの踏む。

折から身に染む物語。

「大方何ね、其の娘に、魔がさしたとでもいふんだらうね。」

「御意、御意にござりまして、へい、娘とは申しませんが、一體崖の親仁の許に魔が魅しましたのでござりませう、其の相伴をいたしました熱海中が恚の騒動。彼家も無事なれば宜しうござりませんが、妙齡の娘、些と器量が好過ぎますので、心配なものでござります。

などと申しますと、手前岡焼でもいたしますやうで、は、は、は、」

老功に笑つて退け、仰向いて障子を竊と。

「まづ、おしづまりなされまし、お座敷へも、飛だお邪魔がさしました。」

然矣、魔か、鬼か、崖の總六が小屋に、魅入つたのは事實であつた。



翌日になつて一切明白。當時關八州を横行して、變幻出沒、渚の網に陽炎の影も留めず、名のみ御曹子萬綱と、音に聞えた大盜有焉。

鐘も響かぬ山家にさへ、寢覺に聲音轟いたが、哄と伊豆の國を襲つたので、熱海に於ける大地震は、即ち渠等が豫言の計略。

文武官、農、工、商、思ひ／＼に姿を變じた、御曹子が配下の賊徒、八面に手分をなし、湯宿に埋伏して、妖鬼家を壓したが、日金嵐に氣候の激變、時こそ來たれと萬弩一發、驚破！

鎌倉の聲とともに、十方から呼吸を合はせ、七轉八倒の騷に紛れて、妻子珍寶擲次第、就中、風呂敷にも袂にも懐にも盗みあまつて、手當次第に家々から、夥間が大道へ投散らした、霰の如き衣類調度は、ひた流しにする／＼と、山から海へ掃き出して、こゝに豫め纏つた船に、堆く積み上げた。

寶の山を暗まぎれ、首領の隱家に泳がさうと、激のかゝる巖陰に舳づかを掴んで、白髪を亂して控へたのは、崖の小屋の總六で、これが明方名告つて出た。

但、萬綱はじめ、手下の誰彼幾十人、一人として影を見せず、あとは通魔の鳴を鎮めて、日金嵐の風ぎたるやう。

然ればこそ土地のものは、總六に魔が魅したといつた。正直の通つた親仁は、やがて、唯通り

がかりの旅の客に、船を一艘頼まれたとばかり、情を解せざる故を以て、程なく囚を免された。と前後して、崖の小屋に一個の人物。

二十

年紀の頃三十四五の客が出来た。其人、眉秀で、鼻隆く、白哲俊秀にして盲ひたり。長唄を歌つて美音、尺八を吹き、琴を弾じ、古今の物語をよくして、辯舌爽かに、世話講談の座敷が勤まる。就中琵琶に堪能で、娘に手をひかれながら、宿屋々々に請ぜられて、安かに、親娘を過すやうになつた。

此處で諸人横手を拍つて、曰く、はる／＼小田原の鎮守に貢した、神妙候奇特につき、總六の産神が下したまうた婿である。此の何者かは誰にも分らぬ。

單これを知るものは、秋山警部長の夫人蔦子であつた。番頭が迂り出て、廊下に聲音の消えたあと、夫人は豫て、然か爲さむと期したる如く、すらりと立つた衣の音、障子に手をかけ、先づ、紙を隔てて、棧に薦たけた眉を載せた。

やがて、細目に密とあけると、左は喜兵衛の傳つた方、右は空室で燈影もない。其處から角に折れ曲つて、向うへ渡る長廊下。兩方壁の突當は、梯子壇の上口、新しい欄干が見えて、仄に明



がついて居る。此方に水に光を帯びた冷い影の映るのは一面の姿見で、向ひ合つて、流しがある。手桶を、ぼた——ぼた——雫の音。寂として、谷の笥の趣あり。雲山岫に湧く如く、白氣件の欄干を籠めて、薄くむら／＼と鬚鬚くのは、其處から下りる地の底なる蒸風呂の、煉瓦を漏れ出る湯氣である。

胸して、音なく閉め、一足運びざまに身を反した、燈火を背にすると、影になつて暗さがました、塗枕の置かれたる、其の身の聞のふちを傳うて、膨らかな夜具の裳、羽織の袖が疊に落ちると、片膝を軽くついた。

手を上に乗せて、斜めに差覗くやうにして、

「お出な。」

むツくり下から掻い上げ、押出すやうにするりと半身、夜具の紅裏牡丹花の、咲亂れたる花片に、裾を包んだ美女あり。

いかなる状にや結びにけむ、手絡の切も、結んだるあとの縫もありながら、黒髪はらりと肩に亂れて、狂へる獅子の鬘した、俯伏なのが起返る。顔には桃の露を帯び、眉に柳の雫をかけて、しつとりと汗ばんだが、其の時づつと座を開けて、再び燈を蔽うて住つた、夫人を見つゝ恍惚と、目を圓らかに瞻つた、胸にぶらりと手帳の括に、鉛筆の色の紫を、太白の絲で結んで、時計のや

うに掛けたのは、總六の娘お鶴。

「よく、お前、呼吸を殺して居られてね、苦しいだらう、湯か、お水でも上げようかい。」

膝さし寄せてひそめきいふ。

「否、私、澤山、水を飲みました。」

振仰向いて手をついたり。

「お水を？」

「あの、お床の中で、」

「床の中で？」

「はい、私、海の中で、水潜りをしますやうに、一生懸命に、呼吸をしないで居たんです。

でも少時ですもの。」

最う堪へ切れなくツて、澤山水を飲みました。私、泳げますやうになつてから、潜つて居て、水を飲みましたのは、これで唯た二度なんです。ですから、あの、水を飲みましたからこんなですよ。」

とわな／＼ふるへが留まらず、髪も揺いであはれであつた。

「可哀相ねえ、よく辛抱をおしだつた。」



でもね、然うしないと、今時分、思ひがけない處にお前が居るんだもの、直に氣がつかれて、怪まれないぢや濟みません。

それにね、何、お鶴さん。」

夫人は一際聲を密め、

「此處の内の番頭がね、あ、見えて、内證で警察の御用なんか聞くんだから。」

二十一

「それが談話に来たんだもの、私は最う的切。お前さんたちの爲た事が分つて、此の宿でも紛失ものが知れたから、旦那に相談にでも来た事と思つて、何か聞いて居る内も、はらくして氣が氣ぢやなかつたの。

最う方々でも鎮まつて、彼是盗られたものの氣の附く時分なだけけれど、騒ぎが餘り酷かつたから、未だ皆心が落着かないで居るんだよ。

最う今に知れます。然うすると、直に又番頭が遣つて來ます、何だか、私は、お前が何だか。」とみかうみたる目の優しさ。

「可哀相でならないから、委しく、いろんな話を聞いて見たいけれど、そんな、悠長な間はない

んだもの。然うでもない、旦那が蒸湯から、歸つて往らつしやらないとも限りませんから、又逢へる事もありませう。さあ、今の中。

お、而して何かい、其の、手帳と、鉛筆なの。其の人が呉れたといふのは、」

「え。」  
両手を支いたまゝ、ガツくりと頷くと、糸を引いて、ばたりと疊へ、衾にかくれて取亂した、衣紋をばれてはらりと開く。

是見てといはぬばかり、

「奥様。」

と悄れていふ。

何心なく取らうとして、思はず背後へ手を退いた。

「まあ、氣味の悪いこと。」

お鶴は屹と顔を上げて、清い瞳に怨を籠め、

「些とも、あの汚いことはありません、私、いつも此の胸の處に持つて居ります。」と判然いふのと顔を合はせた。

あはれ、何しに御身の膚に汚るべき。夫人は唯嘗てそれが、兇賊の持物であつたことを知つて、



爲に不氣味に思つたのである。

しばらく熟と見守つたが、

「あ、悪かつた、雲はかゝつても晴れば月、私のいつたのは然うではない。考へれば、旦那の御病氣、肺病はうつるもの、うつるといつてそれを厭つて、一度お持ちなすつたものを、人がもし嫌つたら、私の心はどんなだらう。

たとへ騙賊でも、盗賊でも、お前に取つては大事な御主人。

私が悪うござんした。」

と染々いつて、燈を躲うた身體を傍へすらしながら、其一ページを差覗いて、

「おや。」

「……………」

「紫の鉛筆で、私の座敷の目星いものを取つておいで、と書いたわねえ。」

「あの、其の人は、此の家の二階に泊つて居たんです。」

「然うだつてね。」

「そして何處よりか、念にかけて居たんですつて。でも貴女が、些ともお騒ぎなさいませんから、此室で仕事が出来なくツて、それで、あの尋常の方なら可いけれど、恐いお役人様なんで、手が

出せなかつたやうで口惜いからツて、これを私に書きましたの。」

「其のために來たのかい。まあ、

と今更見詰めながら、

「何と思つて、え、厭だつていはれなかつたかい。」

「……………あの、あの方がいつたんですから。家來は大勢居ましたけれど、誰も手出しが出来ないんですつて。」

「然うねえ。」

あの方だから、といふものを、夫人は諭すべき言もなく、

「大勢居て？」

「はい、十四五人。」

「何、而して魚見岬の下だつて。」

「あの、大な殿だの、小な殿だの、すく／＼して、浪の打ちます處に、黒くなつて、皆、あの、目を光らかにして、五百羅漢見たやうに、腰かけて居るんです。」



「ぢや、お前が、あの方といふ人はえ？」

「あの方は、一番高い尖がつた巖の上に、眞暗な中に、黒い外套にくるまつて、足を投げ出して、皆の取つて来たものを指環だの、黄金時計だの、お金子だの、一人々々、數をいひますのを、黙つて聞いて居りました。」

却つて夫人がさしうつむいた、顔を見るだに哀さに、傍へそらす目の遣場、件の手帳を讀むともなく、はら／＼と四五枚かへして、

「星があつても暗かつたらう。」

「遠くの沖で時々浪が光ります、あの此の鉛筆のやうな紫色に。」

「その他は、闇だつたんです。」

「でも、よく手帳へ書けたのね。」

「蒼い色に燃えますマツチを摺るんです。然うすると、明るなつて、巖に附着いた、皆の形が、

顔も衣服も蒼黒くなつて、あの、大な鮪が、巖に附着いて居りますやうで、打着ります浪の激が白くかゝつて見えました。」

前刻、奥様がお座敷にいらつしやらない處へ入つて、私、餘程盗つたんです。而して洋燈を吹消して出ようとして見ますと、あの向うの蒸風呂の壇を上つておいでなすつて、何處へも遁げられませんか、洋燈を消して、壁に附着いて屈んだんです。

でも、すん／＼入らつしやつて、座敷へ入りさうになりましたから、私、蒼い灯をつけて威したでせう。

え、え。

でも、恐がらないで、おや、お前かいつておつしやいました。

爾時摺つたマツチですわ。

私、此處に持つて居ります。」

と、帯の間に手を入れる。

「可いよ、可いよ、見なくつても大事ないよ。」

餘りの事に、然るにても、尙瞻らるゝお鶴の顔。

「でも何、先刻私を威したのは、あれはお前が考へたの。」



「否、此方へ來ませうと、巖を下ります時に、暗がりから、誰だか教へて呉れたんです。」  
「何といつて、さあ。」

夫人は忍び音を震はした。

「對手は婦人だ、それに、お百度を踏まうといふ信心者だから、遣損なつたら、威すと可い。遁げるだけは仔細はないツて、」

「あれ、そんなことまで知つてゐるのかねえ。」

「はい、而してあの、十二時を過ぎてから、お百度をなさいますから、其の隙にツて、いひましたんです。でも、來て、あの姿見の向うの流しの硝子戸から覗きますと、映りましたのは私ばかりで、奥様はお座敷にも廊下にも見えなさいませんから、此の間と思つて、飛込んだんでございますわ。」

「であの、其處へ集つただけで皆？」

「否、仕事をするにすぐ。」

ちり／＼ばら／＼。

「三島へ遁げるのもありますし、峠を越して函嶺へ行つたのもございますし、湯河原を出て吉濱、もう其の時分は、お關所邊で、ゆつくり紙幣を勘定して居るものもあらうし、峠の棄石へ腰をか

けて、盗んだ時計で、時間を見て居るのもあるだらうツて、浪の音の合間々々に、皆が話して居たんです。」

「大概どのくらゐな仕事だとか、其の人はいつちや居なかつたの。」

「内端に積りまして一萬圓ばかりですツて。」

「大變なこつたねえ、それから、何、お鶴さん、其の人の名は何といふの。否、大丈夫、私の命がなくなつても、とお百度を拜んで居る、観音様の御名にかけて、屹と人にはいはないから。」

「萬綱つていふんです。」

「あ、然うでせう。それから其の手下の衆の名は知らないかい。」

「はい、地震が濟むと、私と二人で、そこら歩行きながら、巖の上へ參りました、しばらく經ちますと、一人來たり、三人來たり、ぴちや／＼、潮のふえる音がしました。」

あの方が、皆揃つたかつていひました。」

「然うすると……。」

二十三

紫かわ  
「來るだけは不殘來ました。誰々だつて、然ういひましたら、伊豆の伊八、四丁船の甚太夫、鯨



の勘七、繩拔の正太郎、飛乗の音吉、秋刀魚の竹藏、むさ、びの三次、——あの此の人の聲だつたんです、私に奥様のことを教へましたのは、」  
夫人はお鶴の記憶の可いのと、耳の敏い、利發さと、其の如斯運命とに、唯何となく慄然とした。

「それから、あの、」

小指を折つて、

「吹雪の熊太、韋駄天彌助、書生の源、あの、太い聲で、六尺坊の悪右衛門つていつたんです。」  
蔦屋の二階に仁王だちで、通へ礫なげに贓物をこかして居た。大道に腰を抜いたものの、魔神が荒るゝと見たといふは、此の入道の事なりけり。

「お待ち。」

と夫人が聲をかける。裏階子を上げる音、唯トン／＼と聞えて止む。  
耳を澄まして、

「どうも、氣がせてならないけれど、此のまゝでは案じられるねえ。

あゝ、何なの、然うしてお前の歸るのを、其處で待つて居るのかい。」

「あらためて私の許を、皆にひきあはせて、おかみさんにするんですつて。」

「おかみさんに、お、お前それが嬉しいの。」

「はい。」と猶豫はらず答へたのである。

夫人は稍言急に、

「ぢやあ、お前、盗賊が好きな、悪いこととは思はないの。」

「否、盗賊することも、する人もいけませんけれど、だつて、あの方なんですもの。そして最う、最う私、おかみさんになりました。」

と、身の置所なさうに、此時ばかりはおろ／＼して、

「最う他に、他にお嫁入する處はないんですつて。」

「誰が、誰が然ういひます。」

「おぢいさん。」

「おぢいさん、お前には御兩親、おとつさんもおつかさんもないのだつてね、おぢいさんは何なの、其の人が盗賊だつてことを知らないのかい。」

「はじめは存じませんでした。はじめての晩、内へ泊りに見えました時は、何處のかお邸の、若様だと然う思つて居たんですつて。」

「まあ、泊りに行つたのかねえ、こゝに、書いてあるのが然うだね。」



先刻から目に留つたは、それ、ひらがなの走りかき、鉛筆で美しく、晩に、一行。行を分け  
て、お前と書き、の許へ、と又項を別に、泊りに行くよ、と記してある。

「何處で、こんなことをいはれたの。」

「此の二階なの。あの、山路でこれを貰ひましてから、私大事にして首へかけて、お、お乳の下  
へかくして居たの。」

三日の日に、此の内が忙しいから、お給仕の手傳に來たんです。  
而して二階の八番へ行きました時、其の方に逢つたんですわ。

いろいろおもしろい話をして聞かせてねえ。

それから、私、其の時も白い前垂をかけて居ました。をかしい、およし、今に所帯を持つてか  
ら、そしてから掛けて臺所へ出るが可い、取つておしひ。

其のかはり、お前にあげようと思つて、宿で頼んで、間に合はせに拵へて置いたから、疊  
紙に入つて居たの。私は其の方の奥様が着るのかと思つたんです。綺麗な衣服を出して、扱帯も  
ありました。

私、おぢいさんに見せてから、といひましたけれど、否、着て御覽、此處でツて、それから帯  
も自分でめてやらう、結びやうが下手だつて、結んで呉れたんです。

袖が長くて、其の人の手に巻きつきますから、袂を肩へかけて廻つたんです。でも、あの、恥  
かしいから、怒うして、襟を脚へて居りました。

でもあの、襦袢の中から、此のねえ、貰つた手帳が見えましたもんですから、返せツていひま  
した。」

二十四

「頭をふつたの。だつて厭なんでももの。あの時貰つたんですからこれは厭。衣物はいらないわ  
ツて、私ねえ。それでも返せツていふから、泣きさうになつたんです。

惜むんぢやないんですツて。

なつて了ふんですツて。

おもちやに持たして置く、と險呑だから、實は、今夜にも宿で聞いて、私、許まで取戻しに行か  
うと思つて居た處だつたツて、然ういひます。

屹と削りませんからツて、私強情を張りましたら、それでは、屹と誰にも見せるなよ。そして  
二人一所に居る時でなくツては、鉛筆を使つてはならない、屹とだぞツていひましてね。



丁度二人ばかりだから、とそれぢや今つかつて見よう、お前は、と私に、今夜は此の伊豆屋へ寝るのかとお聞きでしたわ。

泊る積だつたんです。

然うすると、手帳へ、こんや、おまへのと、こへとまりにゆくよ、と、あの、これを書きましたから、私引手繰つて、脱いだ筒袖と前垂とを抱へるか抱へないに、家へ駆け出して歸つたんです。

帳場で、何うした鶴坊ツて、番頭さんがいひましたけれど、そんな事は構はない。

おぢいさんに、歸つて然ういつたら、いそがしがつて掃除をして、神様棚へお燈明を上げました。

すぐに出發けたの。

私はお米ばかりのお飯を磨いだり、炊いたりしたの。おぢいさんは、甘鯛と、鮪と買つて、お酒を提げて戻つたんです。

でも來ないんでせう。

おぢいさんは肱枕をして寝て見たり、いつにない夜延をしたり。

私は崖の上へ立つて見て居ました。夜中にねえ、い、月の明い道を、大きな外套の裾が風に吹かれながら來たわ。

私もびゆうく海の方へ、袂だの、裾だの吹かれて、高い處に立つて居たもんですから、寒かつたらうツて、突然外套の下へ抱いて呉れたの。寒くはなかつたんですが、私、嬉しくツて震へたの。

其晩なの、奥様、おかみさんになつたんですツて。

おぢいさんは、其時は何んにも知らなかつたんですけれど、あとで今度の相談をしたとき、泣きましたツつて。私も泣いたわ。

確乎しろ、生命と亭主は二ツなした。俺が若い時の、罪障が報つたつて、可いわ、娘の支度と婿殿へ引出ものをかねて、一番、寶船を漕いでまかしょ、お正月だ、祝へツて、大酒をのんだんです。

ですから、あの、すつかり船へ積み込んで、人の知らない處につけて居ますわ。

私が歸つて披露を済むと、それから何處かへ漕いで行くんだつて待つて居るんです。

夫人は黙つて聞くうちに、幾度か目をしばたいた。

「お鶴さん。」

と聲が曇ると、

「……………」黙つてこれも打消れる。



「世間に人もないやうに、皆が、岬の巖になんぞ集つて、もしか捕つたらどうします。」  
と優しくいつたが、何となく人をおさふる威が籠つた。

これにはお鶴が事もなげ、  
「否、大丈夫、寅の刻までは海獺を極めて、此處に寝て居たつて警察なんぞ、と六尺坊主がいつたんです。」  
「其の方は、」  
「え。」

「お前の其の方は何てつたの。」  
「おのづと居坐が更まつて、夫人の聲は凜々しかつた。」

「眞鶴へ鮪の寄るのが、番小屋から見えるまでは心配なしだと申しました。」  
夫人、  
「然う。」

と頷くはしに、懐に手を差入れ。衝と一通の書の、字の裏が透いて見えて、未だ封じないまま、なるを取つて、手に据ゑ、  
「お前のおぢいさんも何といひました。どういふことか知らないけれど、一粒種の可愛いお前に、

盗賊の婿を娶つたのは、少い時の、罪のむくいだといふんぢやないか。

悪い事をすれば屹とそれだけの罪をうけねばならんです。  
御覽!

此の手紙はね、私の旦那が今しがた、蒸風呂の中で、お書きなんだよ。  
此家の番頭に持たせて、熱海の警察へ直ぐに届けるツて、いひつかつて来たんだがね。

「地震は盗賊の巧だから、早く出口々々へ非常線といふものを張つて下さい、魚見岬の下あたりには一團り居るだらう、手強い奴、と思ふから、十分の手當をして、と丁とお認めなすつたの。」  
わな／＼とお鶴は震へた。

「揺れもどうもしないけれど、餘り騒ぎが酷かつたから、あんな、穴藏のやうな中にいらつしやるんだから、一寸見舞に行つた時、あの、お前が忍んだ時。」  
夫人は爾時一段低い、廊下の向うの、新しい欄干から階子段を傳うて下りた。

下り切つた風呂の口と、上とに電燈はついて居るが、段は中程に又一個、燈を要するだけ長い。此處を下りるは、肺病患者より他にはなく、病人は、又大抵、風呂に長時間籠るので、夜は殊に殆んど通ふものがない、といつても可いので。  
木は新しいが、陰々と、奈落に一足づ、踏込むやうな、段階子を辿る／＼、一段毎に底の方は、



深く、細く、次第に狭んで、足も心も引入れられさう。  
されば、髪飾、絹の彩、色ある姿は其の折から、風呂の口に吸ひ込まれて、裳は湯氣に吞まるのである。

下り立つと浮世が遠い。

燈は朦朧と夫人の影を薄く倒した。

二足ばかり横へ曲ると、正面に、蒼く瘡せたる軀を納めて、病も重き片扉。

夫も籠れる心細さ。力なく引手に手をかけ、裳を高く搔い取つて、ドンと壓すと、我ながら、蹴出の棲も、あゝ、晴がましや、唯一面に鼠の霧、湯花の臭氣面を打つて、目をも眉をも打蔽ふ

土蜘蛛の巢に異ならず。

(鳶か。)

(旦那様)と答へたが、湯殿は約十疊餘、然まで廣くもない中に、夫の姿を認めたのは、やゝ頃

刻の後であつた。

今更ながら如何なる状態ぞ。

煉瓦で疊んで四方壁、唯其の扉ばかりを板に、ぐるりと廻して二三段、高く低く、飛々に穿つ

た穴、幾多の屍を中に埋めて崩れ残つた城の壁の、彈丸のあとかと物凄。其の一ツ一ツから、

濃厚なる湯の煙、綿を束ねて湧き出でて、末廣がりに天井へ、白布を開いて騰る、湧いてはのぼり、湧いてはのぼつて、十重に二十重にかさなりつゝ、生温い雫となつて、人の膚を是ぞ蒸風呂。患者が顔を差寄すれば、綿なす湯氣は口に漲り、頬を蔽ひ、肩を包み、背に擴り、腰に纏うて、やがて濛々として唯白氣となる。

足、手、幽な肉の一塊、霧を束ねて描ける状よ。されば焦く扉を開ける音信があつても、誰な

るかを見る元氣はない。たとひ爰に、天津乙女の、麗しき翼を休めたとして、絶る力も絶えたのが、

三人といはず、五人といはず、濃く薄く湯氣の動くに連れて、低くむらゝくと影が行交ふ。

一時、吸ひ草臥れて、長々と寝たるもあれば、其のあとへ、這ひ寄つて、灰色の滑らかな背を

凹に伸ばしながら両手で穴に絶るもあり、ぐつたりと腰を曲げて臍へ頭をつけるもあり、瘦せ

た膝に、両手を組んで居るものもあり、なえつかれたやうになつて、俯伏した女も見えた。中に一

人、壁の根に跪き、もの打念する状して、高く掌を合はせたものの、白き頸の湯煙ほぐれて、黒

髪の色と分れた時、夫人の目はやゝ、馴れて、其の良人の口に、一點煙草の火の燃えつゝあるを認

め得た。はじめは其を、燈の光と見分くることさへ出来ぬのであつた。

秋山氏は、眞中に据ゑた大なる大理石の圓卓子に肘をつき、椅子にかゝつて憩ひながら、かりそめに細巻をくゆらして居たので、尤も裸體で、纏へるは一片の布あるのみ。瘦せたる上に色さ



へ臙、見る影もない状ながら、猶床を這ひ板に僣る、患者の中に、獨り身を起して居た姿、連添ふ身に、いかばかりの慰藉なりけむ。

吐いきをしつゝ、立寄つて、

(お鹽梅はいかゞです。)

(慍うして居りや些とは可い。)

と打棄つたやうにいつて、

(何か用か。)

(はい、餘りけたゝましようございましたから、お見舞に上りました。此間から風説のございました地震なんでございます、とう／＼眞個ものにして騒ぎまして、たゞ今やう／＼鎮まりましたのでございます。あの、御存じでございますので。)

(いゝや、此處ぢや些とも知らん。又地震だといつて、驚きもせん。たとひ地の底に沈んだ處で、まあ、こんなものだらうと思へば、仔細なしぢや。)

周囲に蠢く患者の光景。

(迎も娑婆ぢやないからな、どうだ、まるで白い鰻の、のたくつて居る體裁ぢやないか、然ういふ自分は何か。)

殆んど失望の聲を放つて、自から嘲けるが如くいつた、警部長疾篤矣。

夫人はハツと首を垂れた。

時に、

(何か、別に誰も、賊難にあつたといふ話は聞かんか。)

夫人は、思ひがけないことだつたが、

(否)とありのまゝを答へたのである。

(未だ分るまい、薦、巻紙と硯箱を。)

是へ、と湯殿で命じたので。

(お硯箱、お手紙でも。)

(うむ、最う座敷へ行くのは大儀ぢや、意氣地はない。)

傲然として然も寂しく高らかに、

(はゝ、はゝ、はゝゝゝ)

(……………)

(疾くせい。)

引返して扉をあけると、重い湯氣は、娑婆へ返すやうに、どツと夫人を押し出した。身の健かな



る夫人は、却つて、くわツと上氣して眩暈を感じて、扉を閉めながら蹠跟いたが、ばら／＼脱ぎ散らした上草履亂れた中に、良人のを見て、取つて揃へて直しながら、袖にも襟にも、纏ひついで消えもやらぬ霧のまゝ、急いで舊の欄干口。夫人が此のときの風采は、罪あるものを救ふべく、疾めるものを癒すべく、雲に駕して往き還る神々しい姿であつた。廊下を出ると、風が冷たい。詭へられたを調べて、再び良人の前に行つた時、警部長は、天窓を掴むやうにして、堅く卓子に突伏して居た。

耳は掌で蔽うたが、氣勢に、忽ち、蒼ざめた、顔を上げて、

(此處へ出せ。)

(は、)

と袖から卓子へ。

未だ持つたまゝ、だつた巻蓑を、ハタと床に擲つと、蒸氣が宙で吸ひ消した。

椅子を引き寄せ、筆を取つて、さら／＼と認めたのが、こゝに夫人の、お鶴にさとした文言であつた。

書き果てると、著しく警部長の眉の顰むが見え、

(あゝ、厭ぢや、が、黙つちや居られん。何も見まい、聞まいと思ふに、此の壁を透して、賊

どもが、魚見の巖にかたまり居るのが、月夜の遠距離のやうに歴然と見える。)

といつた、眼の光爛々として、

(鳶、恚う神經が過敏になつちや、疾は重いな。)

夫人は再び二階の廊下、思はず映る姿見に、消えも入らむ思ふ時、座敷の燈が滅したのであつた。

梅 柳

二十五

「お鶴さん、分りましたか、旦那の此のお手紙が私の手にある内だつたから可いけれど、もう一足で、番頭に渡るとね、今頃は、皆が捕まつて居るかも知れません、もしか、其の人が牢へ行つたらどうするの。」

お前は屹と然うしたら一所に行くとおひだらうが、おかみぢや、牢の中で、同棲に置いては下さいません。第一お前、今こゝで、私がお前を歸さなかつたら、どうして其人に逢へますね。」

思ひ切つて聲強く、差寄る膝に手をかけた。お鶴は思はず取違つて、忍び音にわつと泣いた。



背に夫人も頬をあて、堪へず、はら／＼と落涙して、

「お、可哀相に、そんなかい。お前だつて、私だつて、良人を思ふに二つはない。誰が、誰が、お前を歸さないで置くものか、警察へやるものか。」

お前、夜中に崖に立つて、其人を待つた時、寒からうつて、あの、外套の下へ入れて抱いて呉れたの。」

と其ま、確乎と抱きしめた。

膝なる傍、背なる髪、柳と梅としめやかに、濡れつゝ、しばし密とせり。

「ひ。」

手を取つて、顔を上げさせ、右手の指環を凝視ながら、するりと抜いて、胸に垂れたるお鶴の指へ。

「私が祈つてあげるんだよ。」

それからね、此の手紙を、此のまゝお前にあげるからね、大事にして、持つて行つて、其の人に見せるんですよ。

あゝ、構ひません。私の落度になつても可いの、其のかはりね、心がおありだつたら、どうぞ旦那の病氣が直るやうに、お鶴さん、お前も念じて下さいな。」

お鶴は頭おもたげに、首垂れながら合點々々。

夫人も齊く頷いたが、

「まあ、盗賊の大將に、警部長の病氣本復、私も愚癡になつたわね。」

莞爾したが、目を拭ひ、

「どれ、丁として、手帳、鉛筆も。恚うして居ては目につきます。」

と、立たせて、胸に秘めさせた、手紙も持ち添へ、しつかりと内懐へ入れさせて、我が前髪の觸るゝあたり、帯の皺をのしてやりつゝ、

「而して其の人にいふんですよ、これ／＼のものがいひました。賊でも心があるだらう、お寶は盗んでも、こんな可愛い娘を盗んではなりませんと、可いかい。」

さ、最うおいで、夜が更けた。」

と送り出すやうに座敷を出たが、前後に隈はあれど、蔽ふものなき廊下の燈

はらりとかけたたり羽織の片袖。瘠せた夫人は膨らかに、兒の宿つたる姿して、一所になつて渡つたが、姿見の前になると、影が分れて翻然と出た。

お鶴は胸が躍つたらう、別れのⅡさらばⅡいふのも忘れて、其のまゝ、手水流の傍の窓。

硝子戸を引きあげると、下は坂の、二階ではないが、斜めに土塀。



一度、顔を出して覗いて見て、ふり向いて夫人を見た、双の瞳の、露に宿れる星の色。燦然として星はあれど、涙に曇つて暗かつたか、ひらりと蒼い火、マツチを擦つて、足場をしばし計ると見えし。

「は、」と聲かけて、するりと抜けた、土塀の上を足溜。姿は黒き窓となンぬ。夫人はしばらく、姿見を背にして、熟と其方を瞻つたが、欄干の方に目をやつて、襦袢の袖で眉をかくした。

其のおくれげを搔いた時、壁の中の佛は、どんなに、美しかつたらう、柔和く氣高かつたらう。大慈！大悲！我心、我力、良人の病を癒すべく、頼母しいやうな氣がしたので、急に何となく嬉しさうに、いそぐ座敷へ歸らうとして、思はず、よろ／＼と背後に退つた。

一段高い廊下の端、隣座敷の空室の前に、唐銅で鑄て鑄の見ゆる、魔神の像の如く突立つた、鎧かと思ゆる厚外套、杖をついて、靴のまゝ。大跨に下りて、帽を脱し、礎と夫人の爪先に跪いて、片手を額に加へたが、無言のまゝ、身を起して、同一窓に歩行み寄つた。深夜に鼠の氣勢もさせず、帽とともに小脇にかゝへた杖よりも身を細く、小さな口から、するりと抜けると、硝子窓は向うから、音もなく、するりとおのづからしまるのが、姿見にあり／＼と映つて、夢の覺際かと思えたのである。

さて、蒸風呂の中で認めた、警部長の准逮捕状には、偉大なる反響があつた。一旦夫人の情に因つて、八方へ遁れた、萬綱の配下の兇賊、豫て目指された數をあまさず、府、縣、町、村、いふに及ばず、津々浦々にいたるまで、最寄々々に名告つて出た。

御曹子は然らず。但崖の客の盲ひたるは、紫鉛筆の粉のためといひ傳へて、いづれも意外の毒に舌を巻くばかり。自ら其の罪を責めて、甘んじて享くべき縲紲を、お鶴のために心弱り、獄の暗より寧ろつらい、身を暗黒に葬つたのを、祕に知るは夫人のみ。

程過ぎてつれ／＼に、琵琶を、と秋山の命で、座敷に招いた事がある。盲目は、あかい手絡をかけた、若い女房に手を曳かれて來たが、敷居の外で、二人ならんで恭しく平伏した。

夫人は一目、あゝ、其の赤い手絡は見られまい、色の白いのが、嘸、紫の涙を、とあはれさに顔を背けたが、良人のあるに襟を正した。けれども、其の時の眼の光は、嘗て、蒸風呂の中に於けるが如き、爛々たるものではなかつた。警部長は輕快したから。



銀  
短  
冊



はあ、先刻敬つて申すというて、己が阿彌陀様に面談のするやうに呻つて居た、あの文句かね。彼を最う一度聞かせろといふだね。あゝ、可うがす。訓讀のすべい法は知んねえが、棒讀に遣るなら、すらゝだ。此さ、氷柱を縦に飲むやうなもんでがす、遣りますべい、えゝと慥うだによつてと。」

言ひかけて、一軒家に、二人の客の顔を視めた、主の親仁は、求められた其の文句を唱ふる前に、何のためにするかを讀まうとした。

一人は年配三十八九、全身を蔽ふまで、深々と蓑を被て、竹の子笠を、自分が跨いだ床几に掛けて差置いたが、濃い色の鳥打帽は、入つた時一度等とともに脱いで、白いものを拂つたのを、今又被つて居る。髻は見えるが、亂れた襟の蓑毛に交つて、焚火につくやう面を伏せ、土間を其まゝの爐を、抱くが如く、肱を張つて、近く火先に翳した手の、洋服の袖口の色も、未だ融けぬそれかと寒さう。

今一人は美しい手袋を嵌めたのを、やゝ遠のけて烘つて居る。これは大な外套を、すつぱりと頭巾黒く、顔も喪に籠る風情あり。

いづれも其の形容恠る片田舎にはつひぞ見掛けぬ。然も四五日降續いて、昨日今日は風さへ吹荒れ、山も、谷も、田も、川も、唯大浪を覆すやうな、吹雪の海の底に齊しく、板戸も障子も氷りついた、麓の小家へ、何處の里より恠る鳥は渡りけむ。翼はないが、肩とも裾とも袖とも言はず、拂ひ盡さず消えも去らぬ、雪の餘波は紛々として、鶴の毛衣を絡へる如く、土間にちらりと散り敷いたのも、冷き地にとけやらす、春を待つて、山櫻の梢に歸らむす趣見ゆ。

透間漏る風にさへ、況して一陣々々、小家はぐわたゝと震ひ動きて、積り積つた雪の中に、上から押沈めらるゝより、寧ろ、高く宙に擡げられた風情に見えて、蓑に、頭巾にかゝつたのが、焚火のちらりと動くにつれ、霏々として爰に尙ほ降りしきるに異ならず、炎は憚と時々靡いて、脈々として紅の瀧の、断れては續き、絶えては流れて倒に燃えるのである。

あはれ山、峰、雪の下に、此の一團の火なかつせば、世は奈落の底までも、冷くなつて了ふであらう。

天は、地は、何處まで雪か限りなく、若狭は、近江は、加賀は、能登は、越後は、飛驒は、凡そ數百里が間、如何なる状かを測り知られぬ。越路は此處を振出しの、越前の國は敦賀から杉津、



鮎波の汽車路も、木の芽、椿井、中の河内の舊道はいふも更なり、大日枝、大良の新道も重たき雲に閉ぢられて、三が出て、五が出て、雙六は泊の赤星一まはり、七日ばかり、人馬の歩行を留めたれば、三國港には近いけれども、山を漕ぐ雪舟の影もない。埴生郡埴生村から、噺の外へ賽を投げて、雪ころがしをしたやうな、掘立ほどの白い小屋。年は取つたが巖壘造で、これさへも白くなつた、頭に頬被りしたのも取らず、よくは覗かれぬが二人の顔、かゝる山住の田舎親仁に、教を聞くべき人相でないのを視めて、ト出おくれ、紛らした。

「へ、へ、へ、」

其の笑ひ聲は幽ながら、轟々と鳴りはためく、吹雪の音にも持ち去られぬは、恚る處に住へるものの雪がものいふに同一いからで。

是より前、唯一言、二言を語るにさへ、客は數次打咳いて、猶且つ呼吸の途切るゝのを苦んで居たのであつた。

蓑を着たのが又咳き、かすれた調子で、

「あゝ、何だつけ、弟子敬つて、それから何だつけな、西方極樂の、それから。」

と打傾いて促がした。近く寄せ來る風の音、さつと當つて寂として、ぐわたくとけた、まし

い。

二

「えゝ、そりや、西方極樂の阿彌陀如來、といふのですがね、貴客方恚う見掛けた所、後生を願ひさうもねえではないかね、容子がさ。

それに何だ、突然此處さ入つて來て、酒はねえか、蟹は賣らねえか、といはしつけえの、折るとぼきゝの、あの脚を啣へて、どぶろくを煽るとは、些と縁の遠い文句だからね。

はあ、生憎と又蟹もなし、酒も切らしただが、其代にや、今此の坊主葦と、菟蕪が煮えるとの、椀に装つて進ぜべい。そら、一時ぢや辛抱さつせえ。最うぶすゝと吹いて來ただ、いや、煮えるわ。」

と手をかける。低い天井からぶら下げた、自在に釣つた大鍋は、憑物がしたやうに、ふらくと炎に躍つて、眞黒にひよいと揺れる。

「や、だけんど、嘸はあ難澁であつたんべい、遠所他國の人らしいが、能く、まあ、こんな雪の中をござらつせえた。己はそれ、恚うやつて見ざる通り、」

我ものながら客の前、珍らしさうに振返る。土間を一段、淺間な納戸、突當の壁の凄いのも見



透かされて、外は幾千丈の雪に分らぬ。さて、破筵先づ六七枚敷けさうな片端に、落葉の衾、木の枕、これも浮世の中かして、建てかけた二枚折の古屏風に、晝はあるが、未だ冬ならぬ先、峰の月に松は消え、野分に馬は抜け出して、雨漏のあと朦朧と、秋の山家の佗しさは、歴々と月に浮んで、恠くてあるよりなほ寂しい。

唯蓑を着たのが見た時であつた。外套に姿を包んだのも、親仁が振り返るに従うて、屏風の中を窺はうとすると、丁ど背後にした燻つた羽目の一方が、入口の戸と斜に向ひあつて又一個、其處からぐるりと、裏へ廻られる仕掛があり、物置ならむ、と推量られるが、直ぐに一なだれの谷かも分らず。開いた口に堆く、枯柴を積んだ間から、拳ほどな白いものがむつくりと覗いたので、はつと氣を取られたやうに目を注ぐと、忽ち一幅になつたは粉雪で、一度閃いて、すぐ其の形を土間に印した。

これが洪水なら最う溺れよう。しかし頼母しかつたのは、丁ど顔のかくれた、小造なのが居つた上の、壁に爐縁のやうな棚、ありたけの煤のたまつた中に、大神宮の御札拜まれ給へり。傍に圓くなつて、鼠の目の、星かと思えて光るのも、折から寧ろ懐しい。

「獨で後生樂極め込んで、此方方が枕許に立たつしつたを、はて、夢か。願ひ通りに極樂さ引取られたにしては、つひぞ見馴れぬ、は、蓑如來に、羅紗菩薩ぢやと、は、は、は、は、」

人を嘗めたやうに笑ひながら、涙を流して、まめやかに、煙を、ふうふツ。

「そないに寢惚けたくらるぢやで、南からか、北からか、何方からござらしたか知んねえが、何でがせう。よもや暇の方からではあんめえね、向ひ風ぢやで、迎も呼吸の續くことではねえさ、山からでがせうなあ。」

「あ、山から、山から小僧が泣いて來た始末ぢや。」

と復仇一番した都人、蓑如來は、言ひ得て一寸羅紗菩薩を顧みる。

親仁きよとんとして、良あつて、

「は、は、は、串戲もんだあ、主。」

はあ、えら我折りやしたよ。何でも此の吹雪さ驚かねえで、己が處へ飛込ましたつて、焚火すると、直に早や蟹はねえか、どぶろくは、といはしつけ、元氣ぢや、尋常ものでねえと思つたでね。己そんな人達は大好でがすで、話さつしやい。

いや、今時の少い奴は、それにつけても、倅と嫁ぢや。己、倅一人嫁一人あるだがね。一昨日町方まで仕事に行つて、此の吹雪にかじかんで歸つて來ねえだよ。尤もはあ、向ひ風の此の騒を越すだがね、も、んじいの分際で、此方衆にも面目ねえ。」



蓑なる人物は、當の親仁には眩く如く、傍聞きする、連なる外套に却つて語るが如く、一種口  
早な沈んだ調子で、

「何うして私達だつて生命がけた。いかに雪國だといつて、まさかこんなぢやなからうと思つて  
來たが、迎もこりや人間業では不可んのだな。」

敦賀から此方は、凡そ、一日に三里四里といふのは驚いた。

かういふ事なら、いくら退屈でも四日なり五日なり、汽車の通ずるまで旅籠に逗留をすれば可  
かつたのに、新道を歩行けば行かれぬことはないと聞いたし、又此方も悪かつた。

今時昔の川留に逢ふでもあるまい。雪が深いといつて、何も海を徒渉にするわけでもなしと、  
山路へかゝつたがね。

「御存じないで。さよぢや、さよぢや、  
と打領く。」

「尤も汽車が通じた所で、目的の土地が、停車場から直ぐに車といふ處ぢやない。三里、五里、  
山路をせねばならん覺悟で居たから、五里が十里でも足序と、高を括つて踏み出すと、まあく

何うか慙うか、天から白衣を曳いたやうな、山の裾なり、目の下なり、ちら／＼蒼い雲が動いて、  
敦賀灣の見えるうちは頼母しかつた。又風は酷くても天氣は好かつた。」

「え、／＼、海岸の彼處等、お客様、海から吹附けますのが山へ當つて、雪を攫つて、大浪のや  
うに捲返しますで、峠から此方が八尺一丈と積りました時でも、ぼつ／＼乾いた土が、去年の秋  
轉がつた團栗の實と一處に見えるで、吹飛ばされるほどの風でさへねえ分にや、道の絶えるとい  
ふことはねえだがね。はあ、それでは峠から此方、山ばかりの中になつて、此の吹雪に逢はしつ  
ただね。」

「然う、其の峠で昨夜泊つたよ。」

「はあ、猿まが茶屋だ。」

「何といふか、一軒家さな。」

「峠のは高い處で、猿が茶屋、猿が茶屋といふのでがす、梢頭まで樹登りをした形だでね。それ  
から、此の麓まで來る途中、これぢや雪を被つて見えぬでがすが、谿河が横に瀧のやうに流れる  
だね、其の上さ架けた橋の詰に一軒あるのを、山鳥の宿といふでがす。私等が少いうちから新造  
での、未だ中年増でわせるだね、美しい女房が遣つとるだよ。己が許は、一番下で、見てくれも  
悪し、貧乏だで、穴ぢやというて、狸の小屋と吐すでがすよ。」



と焚火にあかき老の皺、笑顔に深く炎を刻んで、酔へる猿に異ならず。人には似ぬが狸でない。

「いや、お庇で、穴へ来て落着いた。」

然うさ、峠から此處へ来る中程の、彼は山鳥の宿といふか。

私は又然うでもない、八寒地獄とかの立場かと思つた。道理こそ、雪の奈落へ、山が落込みさ

うな恐い響がすると思つた。谿河が流れる音だつたな、

といひかけて、外套のと、互に頷いた状であつた。蓑の袖ばさくと、燃えつきさうに猶かざ

して、

「今朝あけ方に、私と此方と。」

軽く手をあげ、一寸教へ、

「雪舟を二臺、人夫を五人、一臺に二人づゝだ。尤も下り坂は雪舟を前にして、上から繰下しに

迂らかして降るんだ。」

「然ぢや。」

「一つ手を離されたが最後、一雪顔に雪の瀧を、谷底へ落されるんだから、人足が二人ばかりで

も、力が足りまい、と乗つてるものは手に汗を握つたぞ。」

其の四人が、雪舟二臺、一人が提灯をつけて先達をする。何も彼も眞白な中だらう、灯までも

白ツ茶けて、まるで葬禮見たやうな始末。私たちこそ無事だつたものの、山鳥か、其途中の宿へ  
来るまでに、人足が二人といふもの倒れて了つた。

四

「又無理もない、非常な吹雪で、吻と一呼吸つく風の斷間に、四邊を見ると、目の前にも、頭の上にも、脇の下まで、慙う引抱へるやうな圓い山が、幾つとなしに重つて居る。其の間の、狭い處は、雲が舞ひ下るやうに渦をまいて、大きくぐるぐるまはりながら續けざまに吹雪いて来るんだ。

除けるも潜るもありはせん！とうとう二人行倒が出来たのだ。残つた三人に、私たちも手を貸して、少しは雪もなだらかな處だつたのが幸、冷くなつて硬ばつたのを、雪舟へ入交へて私たちは外へ出た。やうく途中の茶店まで引込んで、其處で焚火をして暖める、此方も何うやら熱い澁茶にありついて、兎も角、舌だけは濡らしたが。

最うあとについて、ともをして呉れようといふものはないぢやないか。

然うかといつて、其處へ逗留をしようにも、これが峠なら、舊來た海岸へ出て引返される。麓なら、無理をして里へ出られる法もあるが、山路の中途では、此の勢で雪が積ると、風が止んでも彼岸の頃まで、どちらへも出られない、といふ話だ。



迎も生命は續かんと思つて、荷物などはすつかり差置きにして、身輕なのが一式取得、雪と一處に降つた所で、どの道麓へは下られる。何と間違つても嵐風だから、峠へ吹上げられる事は無い、といふのを頼みだ。風船にでも乗つた氣で、夢中にふらふらと出て来たが、引合つた手も、吹き断たれさうに、まあ宙を飛ぶ心持よ。ぼくく雪に沈むので、どうやら地の上だらうと考へて、一生懸命。

一面に白い中で、些と凸だと思つたくらゐの、爺さん。

お前の、此の家が、見つかつたのも不思議なほどだな。しかし門口へ辿りついて、實の所、中には熊が居るか、猪が居るか、知れなからう。風が強くて口も利けず、お前が唱へた文章を、一きり聞いて、いきなり戸をあけたまでは頃刻だつたよ。何にしてもいひやうのないほど、身に染みる文句だつた。我々恚うして、罪の深い少いものが、こんな場合に、こんな時でなくつては、聞かれさうもない。又更めて聞かうともしないだらうから、どうぞ一つ聞かして呉れ。」

とて直ぐ其の耳を傾けるのであつた。

親仁、下腹にぐつと落ちて、

「遣りますべし。あとで阿呆陀羅經だといはつしやれ、それは構はねえ。

山鳥の宿あたりは、夏の鶯が名物だけんど、峠と麓は念佛處だ。

又これについて、成程と思はつしやる談があるがね、一つ唱へてから語るで、然うすると信心がますますだよ。

先づ、

と櫓を抜き取つて、燃え立つ炎先を、半月を描いてかざして、鍋の蓋を取つて見る。坊主輩と蒟蒻は、衆生が未だ悟らぬやうに、ぐづく、ぶつく。

さしくべて黙つて蓋。膝のあたりに指を組んで、半眼にして誦しぬ。其の言にいはいはく、

「弟子敬つて、西方極樂のけしゆ阿彌陀如來、觀音勢至諸々の聖主を驚かし申す。我受け難き人身を受けて偶々佛法に會へりといへども、心固より愚癡にして、更に勤め行ふ事なし。徒に明し暮して、空く三途に歸りなんとす。然るに、阿彌陀如來、我と縁深くおはしますに因りて、濁れる末の世の衆生を救はむがため、大願を起し給へる事ありき。其の趣を尋ねれば、たとひ四重五逆を造れる人なりとも、命終らん時、我國に生れむと願ひ、南無阿彌陀佛を十度申さば、必ず迎へむと誓ひ給へり。今此の本願を頼むが故に、今日よりの生命を限りて、夕べ毎に西に向ひて法號を唱ふ。願くは今宵まどろめる内にも、命盡なむ事あらば、是を終りの十念として、本願あやまたず極樂へ迎へ給へ。たとひ残りの生命ありて、今宵過ぎたりとも、願ひの如くならずして、彌陀を唱へずば、日頃の念佛を以て終りの十念とせん。我、罪重しといへども、未だ五逆を造ら